

高橋セボネ遺跡

高橋第一土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1996

石川県野々市町高橋第一土地区画整理組合
石川県野々市町教育委員会

高橋セボネ遺跡

高橋第一土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1996

石川県野々市町高橋第一土地区画整理組合
石川県野々市町教育委員会

例　　言

- 1 本書は石川県石川郡野々市町高橋町地内に所在する高橋セボネ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は高橋第一土地区画整理事業に係るもので、平成2年度、3年度にわたって野々市町教育委員会が実施した。
遺物・調査図面類の整理作業及び報告書作成については平成4年度より開始し、7年度に終了した。
- 3 発掘調査は田村昌宏が担当し、吉田淳　横山貴広が補佐した。
- 4 本書執筆は田村昌宏が担当し、吉田淳　横山貴広　鶴見裕子が補佐した。
- 5 発掘調査及び本書の執筆にあたっては下記の方々から御協力を得た。記して感謝申し上げる次第である。

宇野隆夫　木立雅朗　楠正勝　小島和夫　小林正史　沢田まさ子　鶴見裕子　出越茂和　徳野伸一
橋木英道　浜崎悟司　佛田理恵子　増山明美　安英樹　横山貴広　吉田淳（敬称略）
- 6 出土遺物整理作業は市村美知栄　大杉幸江　川端敦子　長谷川啓子が行った。遺物写真は吉田淳が撮影し田村昌宏　鶴見裕子が補佐した。編集は吉田淳が行った。
- 7 本書の各図・写真図版の指示は以下のとおりである。
 - (1) 本書での遺構・地図等の方位はすべて真北を表示し、水平基準は海拔高で、(m)で表示する。また、写真図版中の出土遺物に付された番号は挿図の出土遺物実測図中の番号に対応する。
 - (2) 各図の縮尺は以下のとおりである。

遺構	1／40、1／60、1／80、1／200
上器	1／3　　石器　1／1、1／3、1／4
 - (3) 土器実測図は断面黒塗りが須恵器、白抜きが繩文上器・弥生土器・土師器、スクリーントーンを貼ったものは赤彩を意味する。
 - (4) 遺構名の略号は次のとおりである。

堅穴住居跡	(堅穴、堅、H)	掘立柱建物跡	(掘立、櫛、S B)	柵列	(S A)		
土坑	(S K)	溝	(S D)	小穴	(ピット、P)	不明遺構	(S X)
- 8 本遺跡の出土遺物、記録資料は当町教育委員会で保管している。

目 次

第1章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	3
第3章 基本土層と旧地形	5
遺構全体図	7
第4章 遺構	9
第1節 墓穴住居跡	9
第2節 掘立柱建物跡	18
第3節 棚列	22
第4節 土坑・溝・その他	27
第5章 遺物	36
第1節 土器	36
第1項 弥生時代後期、古墳時代の土器	36
第2項 弥生時代中期以前の土器	47
第3項 スタンプ文土器	47
第4項 奈良・平安時代の土器	47
第2節 石器	47
観察表	86
第6章 まとめ	91
第1節 桧文時代	91
第2節 弥生時代	91
第3節 古墳時代	92
第4節 奈良・平安時代	93

写真図版

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境



第1図 野々市町位置図

高橋セボネ遺跡は、石川県のはば中央に位置する野々市町高橋町地内に所在する。野々市町は金沢平野のはば中央、山海もなく起伏のない平坦地で、東西4.5 km、南北6.7 km、面積13.56 km² m²という小さな町である。土質は肥沃で豊富な地下水に恵まれているため都市型農業に適しており、昭和40年代までは田園地帯が広がり集落が点在するどかな風景であった。昭和50年以降は北陸地方の中核都市金沢市の隣町という条件もあり、急激な都市化と人口増加が進み、現在は4万3千人を有する日本海沿岸の雄町となった。この間、二つの大学や専修、高校が相次いで設置され、若者達のにぎわいをみせている。本遺跡の所在する高橋町は野々市町の東端に位置しその隣は金沢市となる。また、本遺跡の南隣には金沢工業大学がそびえ立ち、その周囲は学生アパートが建ち並ぶといった一昔前の田園地帯とは程遠い環境になっている。

野々市町の地形は雲峰白山を源とする石川県最長の河川手取川によって形成された扇状地が大きな特色となる。町の大部分は扇尖部にあたるが、北端の御経塚・押野地区は扇端部にあたり近年まで自噴水がみられた。しかし、町東部はこれとは違う地形の様相をもつ。野々市町の東方には金沢市内を流れる犀川と手取川の河岸段丘に挟まれた富樫丘陵が南北に走っている。この丘陵の稜線間を縫うようにして小河川が平野に流下し、伏見川に合流する。本遺跡の西隣には富樫丘陵から派生した高橋川が流水し、この高橋川から流れできた土砂によって周辺一帯の地形が形成された模様である。

第2節 歴史的環境

高橋セボネ遺跡は発掘調査の結果から弥生時代後期、平安時代前半の集落跡が見つかっている。また、この他に縄文晩期や弥生前期、占領前期、中近世の土器・陶磁器も発見されているため、縄文時代から人々の営みがこの地もしくは周辺に存在していたであろう。以下、縄文時代から江戸時代までの周辺の遺跡を順に概観する。

金沢市南部地域は遺跡の宝庫といわれている。集落跡はもちろん古墳、中世城館など時代に即した多種多様な遺跡が点在している。数ある中の特に主要な遺跡を挙げていく。四十万C・D遺跡は富樫丘陵台地上に位置する旧石器、縄文時代草創期の遺跡で、金沢市南部一帯の最も古い時期をもつ。縄文時代で最も注目すべき遺跡は手取川扇状地扇端部にあたり金沢市と野々市町の境界に位置する御経塚遺跡、新保チカモリ遺跡、米泉遺跡である。これらの遺跡は縄文後期～晩期にかけての大集落遺跡で、特に御経塚、新保チカモリ両遺跡は国史跡に指定され、史跡公園として整備、公開されている。これだけの大集落が形成されたのは多くの要因があったであろうが、特に第1節で述べた自噴水の噴出による地下水利用と深い関係があると考えられる。弥生時代にはいると今回調査した高橋セボネ遺跡をはじめ各地に大小の集落遺跡が散在する。現在確認されている集落遺跡の大部分は後期以降のものが中心でこれから紹介する遺跡もこの時期にあてはある。御経塚遺跡付近では平成元年度に直径約15 mを測る八角形堅穴住居跡が発見された。押野タチナカ遺跡は中期から後期にかけての集落遺跡で、堅穴住居跡が17棟、掘立柱建物跡7棟が確認されている。この他平野部に押野大塚遺跡、押野ウマワタリ遺跡、富樫丘陵先端部に額谷ドウシンド遺跡、本遺跡近隣に扇が丘ハワイゴク遺跡、扇台遺跡が挙げられる。古墳時代は縄文



- | | | | |
|--------------|--------------|----------------|---------------|
| 1. 高橋セボネ遺跡 | 7. 押野タチナカ遺跡 | 13. 扇が丘ハワイゴク遺跡 | 19. 栗田遺跡 |
| 2. 新保チカモリ遺跡 | 8. 押野ウマワタリ遺跡 | 14. 高尾イシナ塚古墳 | 20. 末松庵寺跡 |
| 3. 御経塚シンデン遺跡 | 9. 長坂二子塚遺跡 | 15. 扇台遺跡 | 21. 下新庄アラチ遺跡 |
| 4. 御経塚遺跡 | 10. 山科うわの塚遺跡 | 16. 高尾公園遺跡 | 22. 上林新庄遺跡 |
| 5. 長池キタバシ遺跡 | 11. 扇が丘ゴシ遺跡 | 17. 高尾城跡 | 23. 上新庄ニシウラ遺跡 |
| 6. 米泉遺跡 | 12. 富樫館跡 | 18. 須谷ドウシンダ遺跡 | 24. 四十万CD遺跡 |

第2図 周辺の遺跡 (1/50,000)

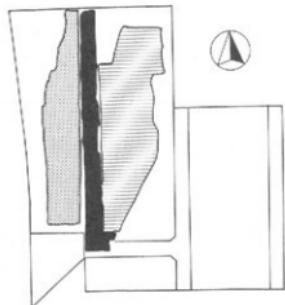
時代・弥生時代に比べ遺跡の数は少ない。その僅少した中、注目すべきものに御経塚シンデン遺跡がある。この遺跡は弥生時代後期の集落跡、古墳時代前期の古墳が確認されており、特に金沢南部地域の平野部では初の方墳12基及び前方後方墳2基が見つかっている。ほかに富樺丘陵縁辺部に全長50mの前方後円墳である長坂二子塚古墳を代表とする長坂古墳群や高尾イシナ塚古墳、山科うわの塚古墳などが存在する。奈良・平安時代にはいると再び遺跡の展開密度は濃くなる。野々市町と松任市の境界に古代寺院として名高い末松庵寺跡が残っている。現在国指定史跡となり公園として人々の憩いの場となっており、当時はここが中心となって平野部一帯に集落が展開されていった。野々市町南部土地区画整理事業に伴う発掘調査で確認された上新庄ニシウラ遺跡、上林新庄遺跡、下新庄アラチ遺跡は8～9世紀の集落遺跡で、これらより北に位置する栗田遺跡等を含めて今後古代の村落構造を考察していく上で重要な遺跡群となるであろう。この他、本遺跡を初めとして扇が丘ハイゴク遺跡、扇台遺跡、高尾公園遺跡などが点在しており、扇が丘ハイゴク遺跡では四面庇をもつ建物跡、扇台遺跡では据立柱建物跡が5棟、高尾公園遺跡では平安時代前期の火災の跡が検出されそれぞれ成果を挙げている。平安末期にはいると本遺跡から西南約700m離れた所に立地する扇が丘ヤグラ遺跡が存在する。この遺跡からは南面に庇のついた据立柱建物跡が見つかっている。室町から戦国時代にかけては右川県の歴史上重要な遺跡として富樺氏関連遺跡群の存在が挙げられる。本遺跡から西南約1kmに富樺館跡があったといわれ小面積ながら発掘調査がおこなわれ、堀跡や建物跡などが発見されるなど大きな成果を挙げている。扇が丘ゴショ遺跡でも中世の遺構・遺物が確認されており、富樺館跡との関連が示唆されている。また、富樺丘陵上には富樺氏の居城である高尾城跡が占地されており、本遺跡を含む野々市町東部、金沢市南部は中世において一大拠点であった。また、野々市町北部にある長池キタバシ遺跡、御経塚遺跡デト地区では14～15世紀の集落遺跡が展開されており、据立柱建物跡・堅穴遺構・井戸跡がセットで検出された。集落周辺からは烟地が見つかることで中世村落の構造を解明していくうえで良好な資料を提示している。江戸時代は遺跡としての発掘調査はおこなっていないが、現在の集落の名称が江戸期の史料に掲載されているので、野々市町内を含む周辺の集落は江戸時代には成立されていたと想定される。本遺跡の西には旧北陸道が走り、金沢城下町に最も近い宿場町として栄えた野々市村（現野々市町本町地区）が存在する。また、近隣には横川村（現金沢市横川）、久安村（現金沢市久安）馬替村（現金沢市馬替）など農業経営を中心として発展した村落が名残を止めている。

第2章 調査に至る経緯と経過

高橋セボネ遺跡の発掘調査は野々市町高橋第一土地区画整理事業に伴い実施された緊急発掘調査である。野々市町高橋第一土地区画整理地区の北側は早い時期に区画整理事業を完了した金沢市横川2丁目の住宅地が並び、南側は金沢工業大学がそびえ立つ。このため、この地区は市街化の進んだ一帯に取り残されたポケット的な農地が残る状態となった。近年、石川県は本地区的西側に隣接する高橋川の河川改修事業を施工しており、この事業が本地区まで進行してきた。そこでこの時期に合わせて良好な住宅地の供給を図ると同時に、排水施設等の整備をし直すことを目的に10,361m²を対象とした土地区画整理事業が計画された。平成2年6月、本土地区画整理事業区域内における埋蔵文化財の調査の依頼があった。同年7月調査区に10カ所の試掘トレンチと2カ所の試掘坑を設定。小型掘削機及びボーリングによって平面、土壌断面等の観察をおこなった。その結果、3カ所のトレンチで幅30～50cmを測る南北に走る溝、2カ所のトレンチより土坑状遺構が確認され、6カ所のトレンチで遺物が発見された。遺物は土器類がほとんどで時代は弥生時代後期～古墳時代初頭と推定された。遺構・遺物の発見された場所は本地区的中央部から西側一帯で、西端には灰色粘土と礫が堆積する旧河道跡が確認された。この調査結果から本地区には弥生時代後期～古墳時代初頭の遺跡が存在することが判明し、その範囲内は発掘調査が



第3図 区画整理事業区域図（1/2500）



第4図 調査区図(1/2000)

A区

B区

35

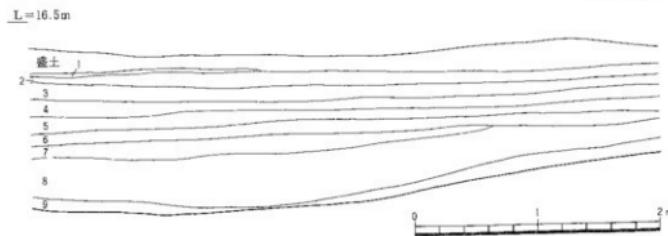
必要となった。この結果に併せて野々市町教育委員会、野々市町都市整備課、高橋第一土地区画整理組合の3者で協議を重ね、平成2～3年度にかけて発掘調査を実施することで合意に達した。平成2年度は道路区（B区）を対象とした約600㎡で10月24日～12月17日、平成3年度は道路区を除いた遺跡範囲全域の約3,500㎡で6月10日～12月6日にかけて実施した。なお、遺跡範囲地内にあたる約300㎡の公園については地下遺構に影響を及ぼさないことから、盛土造成による保存策がとられた。

第3章 基本土層と旧地形

発掘調査前の本地は水田であった。水田の高さは海拔16.3m～16.8mで用水が高橋川へ流れるよう東から西へ緩く傾斜する状態となっている。基本土層は水田の青灰粘質土が約10cmあり、その下に約5～10cm弱の床土（灰黄粘質土）が張っている。更に掘り下げるに従い灰灰粘質土もしくは灰褐粘質土が約30～60cm堆積する。この土の間に灰黄土が見え隠れしており、床土にあたると考えられる。よって暗灰もしくは灰褐粘質土は旧耕作による覆土と想定する。大正3年木町一帯は農業政策の一環として耕地整理事業がおこなわれた。この時耕作土の入れ替えがおこなわれており、この覆土は耕地整理前のものであろう。この覆土は場所によって土色が変化したり、現在の水田に削平されたりしている。また、地山の深いところでは3層に分かれたりもする。これは長い年月の間水田耕作が営まれ開墾を繰り返した結果によるものと思われる。時代は遺物がほとんど出土していないので具体的な決定はできないが、調査区壁面で龍泉窯系の青磁碗、珠洲焼の摺鉢、壺が各1点見つかっているので中世には水田が形成されていたであろう。これらの覆土の下は黒色もしくは褐色系の粘質土となり、包含層にあたる。弥生土器が確認されるのはこの土層から地山の起伏によって約20～70cmの堆積の差がある。黒色土の下方は黄褐色粘質土となり、この層が地山にあたる。地山面から各時代の遺構が望めるが、奈良・平安及び弥生時代の遺構面は黒色土から掘りこまれている。これは調査区中央に南から北方向へ流れる黒色土堆積の鞍部があり、C区7号窪穴は堆積した黒色土から切りこまれて造られていることがわかったためである。しかし、調査を実際に実施していくうえでは黒色土からの検出は非常に困難を極めるため、重機による表土の掘削は黄褐色粘質土を主体とした地山面直上までとした。第5図の基本土層は調査区中央に流れる鞍部の断面図である。（7号窪穴西隣）盛土は調査をおこなった時に掘られた残土である。1は近年まで耕作されていた水田面である。調査時の残土置き場になっていたため、実際よりも削平をうけている。試掘調査から平均約10cm堆積する。2は1の耕作土の床土にあたる。周辺は平均約5cmの堆積であるが、ここでは約10cmと厚めの層となっている。3、4、5は先に述べた中世から大正3年の耕地整理前までの耕作土層である。他の箇所では1層ないし2層であるがここでは3層見られた。6、7、8は黒色をベースとした包含層である。この層も3～5と同様地山の起伏から場所によって1層～3層に分かれ、各遺構の堆積土はほとんどこの層からで、細分すると灰褐粘質土・暗灰褐粘質土などの層もみられる。9は汚れの混じった地山の層で、水分を多く含んだ粘りのある土である。河川や鞍部の堆積土でよくみられる。第5図の鞍部の堆積土をみると地上から地山まで約120cmと大変深いが、他の箇所では6までを掘削するとすぐ地山面となり、水田面から地山面まで約30～60cmが平均である。高橋セボネ遺跡の標高値は地山面で海拔約15m～16.3mを測り、南から北へ傾斜していく。調査区中央には集落を断ち切るように小さな鞍部が南から北へ走っているが、先に述べたように鞍部が堆積した後に集落が形成されている。調査地の西隣には高橋川が流れしており、本調査区より南約300m離れたところに位置する扇が丘^ジ遺跡の発掘調査では、蛇行する旧高橋川の流路が確認された。そのため、古い段階から高橋川もしくはそれに準ずる河川跡が本調査区の西隣まで流れていたと推定される。また、試掘調査の際灰色粘質土を覆土とした河川跡が本調査区西端に流れていることがわかった。覆土などから近世以降のものと推定される。調査区の東側は地山が徐々に低くなり、遺構密度も少なく

なる。これより更に東へ向かった地点での試掘調査の結果色粘土が厚く堆積しており、水田面から約120cm掘削した。地山も粘質土ではなく礫層である。その他の箇所では120cm以上掘り下げる黑色粘土が埋まっていたり、灰色砂質土が堆積するなど水分が多く含み、人々が生活するには不適当な土質であった。また、昭和63年度に東へ約200m離れた金沢工業高等専門学校建設に伴う試掘調査をおこなったところ黒色粘土による泥層が深く堆積していたことが判明した。また、この調査時に水辺に自生する葦のような植物を大量に確認している。そのため、本調査区東一帯は沼地のような湿地帯が広がっていたと想定される。調査区北側は金沢市との行政区域で、幹線道路が東西に走り、更にその北は住宅が建ち並ぶといった状況となっており、遺跡の確認及び当時の立地を判断することはできない。しかし、調査区北から北西にかけて堅穴住居跡が連なっていることからまだまだ遺跡が延びていく可能性はある。ただし、北東側は極端に遺構密度が低くなるため、調査区東側と同様湿地帯へと変わっていくと想定される。調査区南側は試掘調査によって灰色砂質土が確認されたことから河川もしくは沼地のような状態であったと思われる。未確認箇所が多く推定の域も多々あるが、以上を総合すると本遺跡の立地は周囲を河川や沼地などに囲まれた複数尾根の地形であったと考えられる。

- 1 耕土
- 2 朱土
- 3 黒褐色粘質土
- 4 明灰粘質土
- 5 暗灰粘質土
- 6 黑色粘土
- 7 灰灰粘土
- 8 黑褐色粘質土
- 9 暗黄褐色粘質土



第5図 C区北壁鞍部土層断面図



第6図 高橋七示木遺跡遺構全体図 (S=1/200)

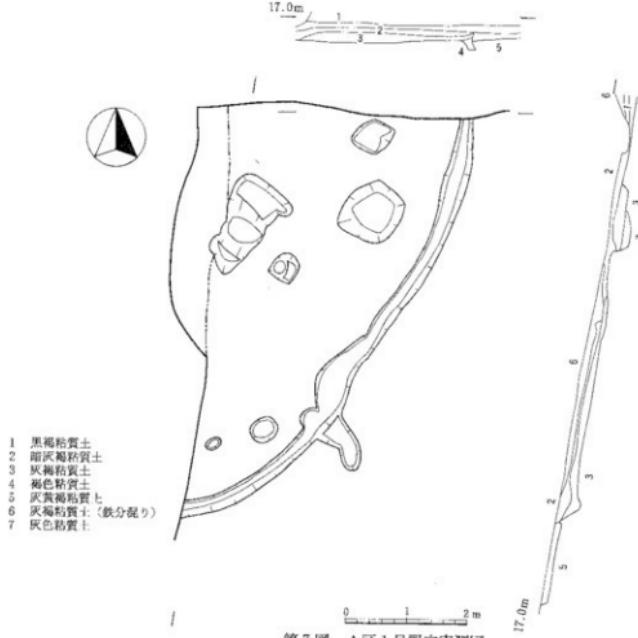
第4章 遺構

平成2年度、平成3年度の調査にあたり確認した主要遺構について述べていく。堅穴住居跡は16棟、据立柱建物跡は8棟、櫛列2、その他土坑、溝跡などが確認された。形状や性格、時代等詳細な点は以下の個別の説明に依っていきたい。(遺構全体図は第6図参照)

第1節 堅穴住居跡

1号堅穴 (第7図)

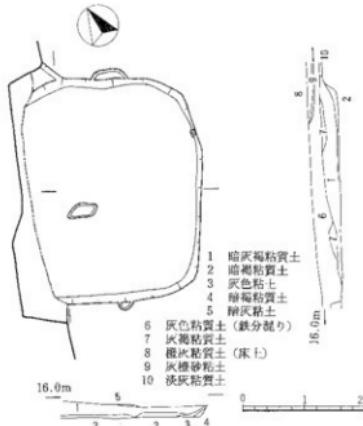
調査区北西隅に位置する。北側は野々市一横川を結ぶ東西道路が走り、西側は近世河川跡により破壊をうけ全體の4分の1程しか確認できなかった。一辺約7mの隅丸の形狀を呈しているが、方形になるか多角形になるかは不明である。面積は約45m²である。床面には張り床が張られ、周辺地山との比高差は約10cmである。住居内の周縁部には幅約20cm、深さ床面から約10cmの周溝をもつ。住居南半を中心に床面直上から壺形土器2・5、高环形土器9が見つかっている。住居の北と中央そして南には一辺約40cm~60cm、深さ約30cm~40cmの方形状をしたピットがあるが、柱穴になるかどうかはわからない。住居の真ん中には約160cm×80cm、深さ約25cmのテラスをもった不定形土坑がある。特殊ピットになるかもしれない。この土坑の直上(張り床面とはほぼ同レベル)及び周辺には壺形土器3・4、小型土器14、壺形土器8が一括発見された。この土坑の1m離れたところにも壺形土坑があるが、遺物は全く出てこず深さも約7cm~8cmと浅いため性格はよくわからない。





第8図 2号竖穴遺物・炭化材出土状況図

炭化材及び焼上塊が検出され、上器の完形品も見つかっていることから、この竖穴は焼失住居跡と考えられる。炭化材は縁辺部に集中し中央から放射状に延びるような形でみられる。材は直径約10cm～15cm、長さ約60cm程の棒状のものが多く、加工した痕跡をもつものもみられた。炭化材や遺物は北東、東南面ではあまり多く見られず、4号竖穴の切り合い及び用水による破壊のためと考えられる。壺形土器17、壺形土器21・25・26・29、高杯形土器31、砥石は床面上から出土した。



第9図 A区 3号竖穴実測図

2号竖穴 (第8図・第10図)

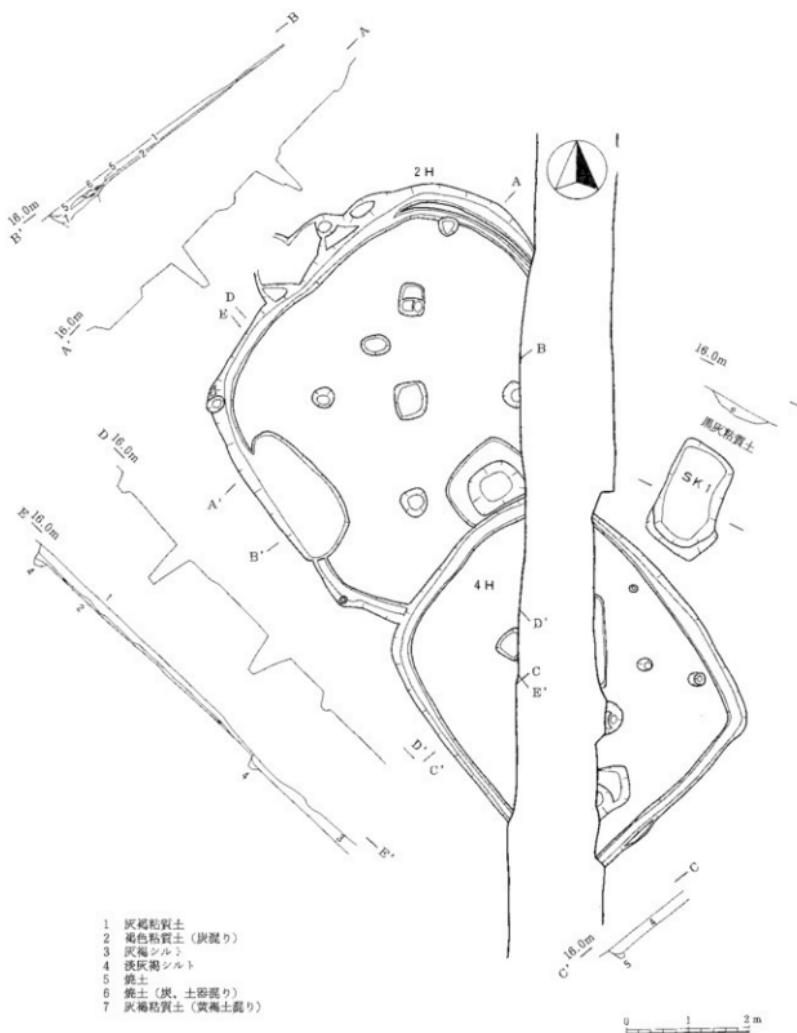
1号竖穴の南下に位置する。竖穴の一部を4号竖穴に切られ、また近年の農業用水によって一部破壊を受けている。一辺約5.6m、もう一辺は破壊、切り合い等によって約4.5mしか確認できないが、復元をすると先の一辺と同じ約5.6mになると思われる。面積は推定約36m²、縁辺部には幅約20cm、深さ床面より約3cm～7cmの周溝をもつ。北東面では周溝が2つに枝分かれしており、一度改修があったかもしない。床面には張り床が施されており、周辺地山との比高差は約15cmである。東南面中央には長辺約140cm、短辺約100cmの方形をした特殊ピットがある。この特殊ピットも用水による破壊や4号竖穴によって削平されているが、それほどの被害は受けていない。竖穴のプランから周溝の脇に造られたと考えられる。内部は約10cmのテラスをもち、さらに床面から約40cmの深さをもった穴が存在する。南西面の周溝際にも約200cm×80cm程の不定形土坑がみられる。深さは床面から約15cmで穴内は平坦状になっている。竖穴内の柱穴は4本で支柱はもたない。深さは約50cm～70cmで東と南の穴がそれぞれ深い。床面上全域から

3号竖穴 (第9図)

2号竖穴の西隣に位置する。西側3分の1は近世河川跡によって削平している。一辺約3.6m、もう一辺は近世河川跡によって約2.8mしか確認できない。判明している遺構から復元するとほぼ正方形の形状になると思われる。竖穴の構造は隅丸方形で張り床や周溝はもたない。周辺地山との比高差は約20cmである。竖穴内のピットは中央に1箇所ものみである。

4号竖穴 (第10図)

2号竖穴の東南下に位置し、切り合いで2号竖穴癪絶後に建てられる。調査区の設定上2ヶ年にわたって半分ずつの検出となった。また、竖穴中央を幅約1.5mの用水が南北に走り破壊されている。長辺約5.2m、短辺約4.5m北西～東南に長く、隅丸方形となる。床面は張り床をもち、周辺地山との比高差は約20cmと2号竖穴よりも深く掘られている。竖穴縁辺部には幅約20cm、床面から約5cmの深さ



第10図 A・B区2号、4号整穴、SK1実測図

をもつ周溝がまわる。堅穴内にピットは確認できるが、穴の深さは約15cm程と比較的浅いものが多い。約50cmの深さをもつ穴もあるが規格性がなく、特殊ピットによるものではないだろうか。柱穴はもたない構造と考えられる。

5号堅穴（第11図）

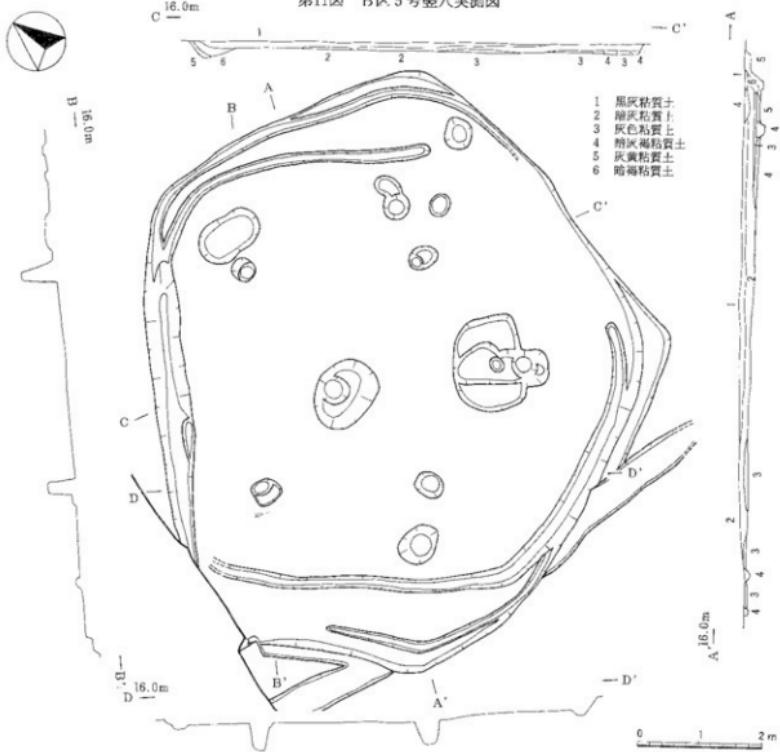
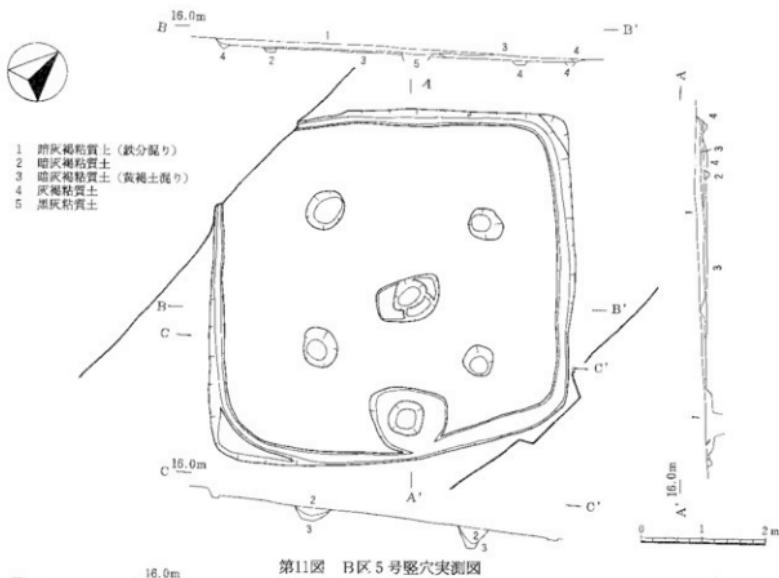
4号堅穴の東南下に位置する。一辺約5.9m×約5.8mのはば正方形に近く、形態は方形に近い隅丸方形である。面積は約34m²を数える。周囲の地山と床面との比高差は約12cmである。床面には張り床が施され、周縁部には幅約25cm、床面からの深さ約5cmの周溝をもつ。堅穴内のレベルは東へ向かうほど低くなり、最大約20cmの比高差が生じている。張り床も薄くなり、最後には消滅してしまう。これは東に鞍部が南北に走っており、堅穴住居跡の検出面は鞍部の覆土となる黒色土から切り込んでいる。こういう状況を知らずに調査担当者は重機による表土掘削の際、黄褐色の地山面まで削り込んだため、床面が傾斜する状態になったのである。実際は全面に張り床が張られ、レベルも海抜約15.55m均一に保たれていたと思われる。これは7号、14号堅穴でも同様の事を起こしており、調査担当者の失態以外何物でもない。東南面中央には長辺約120cm、短辺約100cmのテラスをもった特殊ピットが掘られている。深さは床面から約40cmで周溝に隣接している。柱穴は4本で約30cm前後の深さをもつ。また、張り床を外した下から幅約40cmの隅丸方形の周溝がみつかった。周溝の長さは約5m×4.8m、面積は約24m²である。当初は狭い面積をもっていたものから、広い面積をもつものに拡張されたと思われる。

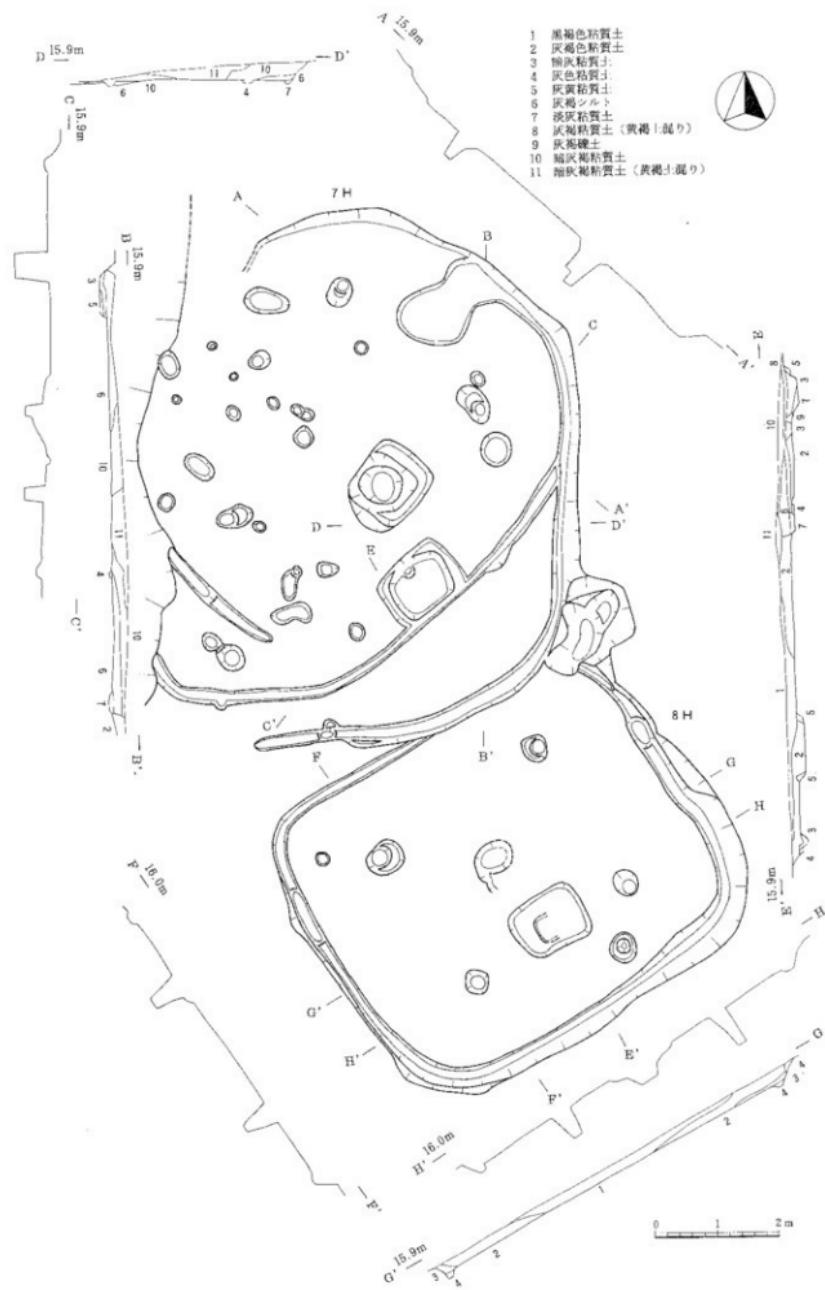
6号堅穴（第12図）

2号、4号、5号堅穴から調査区中央を走る鞍部を隔てた東に立地する。この堅穴住居跡も改修の跡がみられる。プランはこれまでの堅穴と異なり五角形となる。構造は4本柱と特殊ピットをもった一般的な隅丸方形から特殊ピットのすぐ横に新たな柱穴を加えて周溝を五角形にさせている。またこのプランからさらに周溝を一回り外に向けて突出させた多角形堅穴を構築している。土層断面から最初につくられたのは小さい堅穴の方で、その後の改修で大きくなっている。堅穴を改築する時は構築過程で北西のラインを基準とし、柱穴は北西と西南の穴を基準としてつくっている。改修前の一辺の長さは約4m～5m、改修後は約5m～6mとなる。面積は改修前が約5.0m²、改修後は約6.4m²である。ただし、一部周溝ラインの見えないところや未検出の箇所もあるため、一辺の長さや面積は概数である。周溝の幅は約20～50cm、深さは床面より約5cmである。床面には張り床が施され、周辺地山との比高差は約20cmである。堅穴内から布留併行期の壺形土器や壺形土器が出土したが、堅穴とは直接関係なく流れ込みによると思われる。

7号堅穴（第13図）

6号堅穴から南下したところに位置する。この堅穴も周溝が3本見えるため、少なくとも2回の改修があったであろう。土層断面図から当初は最も規模の小さい隅丸方形の形から拡張を加え多角形へと変化したことが判明した。しかし、5号堅穴の項でも述べたように当初の重機掘削の段階から地山面まで削り取ってしまったため、西側3分の1は削平されてわからなくなってしまっている。そのため、一辺の長さ及び面積は6号堅穴と同様概数となる。当初の堅穴は隅丸方形で、東南中央に約120cm×110cmの方形特殊ピットをもつ。柱穴は4本、深さは特殊ピットとはほぼ同じ約50cmである。周溝の幅は約20cm、深さ床面より約5cmである。一辺の長さは約7.2m×6.4m、面積約46m²である。1回目の拡張では西南面の周溝を延長させている。また、この時特殊ピットが東南面の周溝に接して新たに掘られる。この特殊ピットは長辺約130cm、短辺約100cmの方形プランで深さは約45cmである。拡張した堅穴の一辺の長さは約2.5mと約6mの2種類をもつ不定形な多角形住居となる。面積は約56m²である。柱穴も改修前と違った場所に掘られていると思われるが、実際の地点位置は判別しない。2回目の改修では8号堅穴を削った形で確認されている。周溝の幅は約20cm、深さは床面より約7cmである。周溝は途切れているが本来は全周していたであろう。ただし、何角形によるプランなのかは不明である。床面は張り床が張られ、周辺地山面との比高差は約30cmと深めである。





第13図 C区7号、8号竪穴実測図

8号堅穴（第13図）

7号堅穴の南隣の堅穴住居跡である。隅丸方形で縁辺部に周溝（幅約20cm～40cm、深さ床面より約10cm）をもち、床面は張り床が施されている。一辺の長さは長辺約6.8mと短辺約5.6mで面積は約38m²である。床面と周辺地山との比高差は約20cmである。柱穴は4本で深さは約50cmと深い。特殊ピットは東南面の中央に位置するが、周溝跡ではなく、柱穴と柱穴との間に掘られている。長辺約110cm、短辺約90cmの方形で、テラスをもち深さは約20cmと浅い。

9号堅穴（第24図）

5号堅穴から西へ向かったところに位置する。2号掘立柱建物跡、SK4及び近世河川跡によってほとんどが削られてしまい、全体の4分の1程度しか残っていない。プランはやや方形に近い隅丸方形である。長さは他の遺構の切り合いがあるため途切れてしまい、実際の規模はわからない。確認できた部分では約2.3m×2mとなる。床面は張り床がなされ、周辺地山との比高差は約10cmである。周溝はもたない。内部構造をみると3号堅穴と酷似する小規模な堅穴になりそうである。内部のコーナーに約90cm×約60cmの大きい穴が存在するが、深さは約10cmと浅いため、柱穴にはなりそうもない。

10号堅穴（第14図、第15図）

9号堅穴の南に立地する。隅丸方形で長辺約6m、短辺約5.2mと北東～西南に長い。床面は張り床をもち、周辺地山との比高差は約20cmを数える。縁辺部には幅約20cm、深さ床面より約5cmの周溝が巡る。しかし、北西面は周縁部まで延びず約1.2m手前の柱穴間を通り、北のコーナーで途切れてしまう。特殊ピットは東南面に配置され壁に接する。長辺約140cm、短辺約100cmの方形プランで一段テラスをもちその下に深さ約30cmのピットが存在する。柱穴は4本で約45cm～60cmの深さをもつ。この堅穴からは2号堅穴と同様の炭化材や土器などが大量に出上した。炭化材は調査検出の段階で一部取り外した箇所があるが、概ね全域にわたって認められた。少々ばらついているが基本的に中央から放射状に延びた状態となる。2号堅穴よりも比較的多く、大きめのものが見受けられる。加工した棒状のものは長さ約20cm～80cm、直径約10cmがほとんどで、堅穴中央には細かい炭の塊が目立つ。また、東南面の端には焼土塊が顕著にみられた。この堅穴住居跡も焼失した家屋になると思う。土器では壺形土器140・142・150が下層面から出土している。なお、145・146など布留甌も見つかっているが、上層から出土しているため堅穴と直接関係はないであろう。この他緑色凝灰岩の原石や玉の未製品が確認されている。

11号堅穴（第17図）

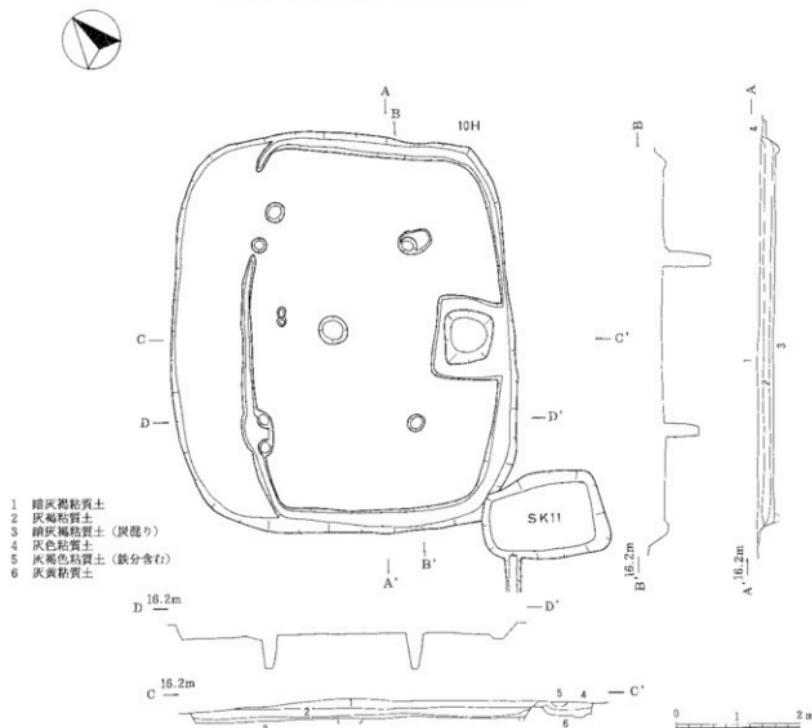
12号堅穴に隣接する。堅穴の半分は調査区外となるため、詳細な内容はとらえにくい。一辺の長さは約4mで、コーナーの角度は鈍角となり柱穴も堅穴半分の検出面にも関わらず4本確認されていることから多角形（六角形か？）になると推定される。周縁部には幅約30cm、深さ地山面から約7cmの周溝が巡り北東では二重となっている。床面は張り床となっており周辺地山との比高差は約20cmである。柱穴は各コーナーにひとつの間隔をもち、深さは約45cm～70cmである。北東側の柱穴は隣接して2個並んでおり、周溝も2重であることから改修があったと思われる。特殊ピットは8号堅穴と同じ柱穴と柱穴の間に掘られている。大きさは長辺約140cm、短辺約110cmの長方形をし、穴の周囲にテラスを設け、深さは約50cmである。壺形土器172、高杯形土器183、器台形土器189は床面直上から出土している。

12号堅穴（第16、17図）

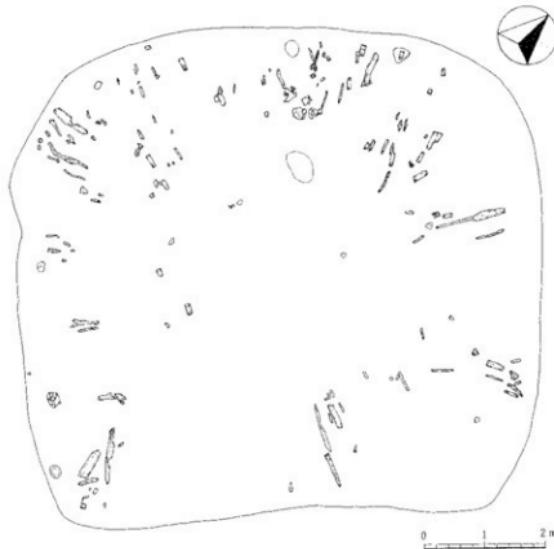
11号堅穴の東隣の堅穴住居跡である。隅丸方形のプランをもち、一辺の長さは約8.5m、約8mとはほぼ正方形の形を呈する。面積は約68m²と大きく6号堅穴の改修前の面積に近い。幅約40cm、床面からの深さ約10cmの周溝が堅穴の縁辺部を回り、東コーナーでは二重となる。床面は厚い張り床が施され、周辺地山との比高差は約20cmである。柱穴は約60～80cmの深さをもつ。4本を基本とするが、東南面中央の周溝と隣接したところに深さ約40cmのピットがあり、これも柱穴の一つになると考えられる。特殊ピットは柱穴間の真ん中に位置し、直径約140cm



第14図 10号堅穴遺物・炭化材出土状況図



第15図 A区10号堅穴、SK11実測図



第16図 12号堅穴遺物炭化出土状況図

のやや不定形な形状をしている。小さいテラスをいくつもも深さは約50cmを数える。ここでも堅穴内全域から炭化材を大量に検出した。2号、10号堅穴と同様中央から放射状に散らばった形をしており、炭化材は加工された棒状のものが多い。炭化材の間に器台形土器244や鉢形土器252をはじめとした土器や砥石が埋まっている。西側では焼土塊もみられる。これもおそらく焼失住居跡であろう。遺物は擬凹線のはいった變形上器が多くみられ、200、202は床面直上から出土した。この他緑色凝灰岩の原石や玉の未製品、翡翠の勾玉などが発見されている。SD 25と29は堅穴をはさんだ両側にそれぞれ掘られ、同一方向、規模・深さとも似ていることからこの堅穴に大きく関連すると考えられる。

13号堅穴（第18図）

12号堅穴から東へ向かい、調査区中央を南北に走る鞍部を隔てたところに存在する。SK 54をはじめ土坑や溝などによってきられ、深さも周囲との比高差が約5cmと残りがあり良くない。プランは隅丸方形であるが掘り方が浅いため歪が生じている。床面は張り床が張られていたが、非常に薄くところどころなくなっている箇所がある。周溝は存在しない。特殊ピットは東南面中央に位置し、長辺約130cm、短辺約100cmの方形である。穴の周囲にテラスをもち中に方形のピットが存在する。深さは床面から約40cm。柱穴は4本で深さは約50cmを測る。図示していないが、堅穴中央に直径約20cm、深さ約10cmのピットがあることが判明した。また、約3m北側にはこの堅穴を取り囲むようにした溝が約9mにわたって走っており、堅穴に対する排水施設の可能性がある。この溝の幅は約30cm、深さは約10cm。

14号堅穴（第19図）

12号堅穴の東南下に位置する。堅穴の中央を南北に用水が走るため、詳細な要点はつかみにくい。また、用水を隔てた東側は黒色土の覆土をもった鞍部が走っており、黒色土層から振り込まれた造構面を表土掘削の段階で削り取ってしまった。そのため、堅穴のプランをみることができるのは西側3分の1弱である。一辺の長さは南北ラインで確認でき、約3.5mを測る。東西面はカクラン等により1.5mしか確認できないが、南北ラインと同等の長さになると推定される。プランは方形に近い隅丸方形である。規模は小さく、周溝や張り床、柱穴はもたない。周辺地山との比高差は約20cmである。

15号堅穴（第21図、第22図）

13号堅穴から南方上に立地する。平成2年度、3年度の調査区域の狭間に当たり、7号、8号掘立柱建物よって一部削平をうけているが、造構の依存度は比較的良い。長さは約6.5m×約6.2mの正方形でプランは隅丸方形

となる。床面は張り床が張られ、周辺地山との比高差は約20cmを数える。周溝は幅約20cm、床面までの高さ約4cmを測るが、前面側しかみられない。特殊ピットは東南面中央の壁際に掘られ、長辺約140cm、短辺約120cmの方形プランをもつ。内部はテラスを全面に設置し、中央には楕円形した約30cmの深さをもつピットを設けている。柱穴は4本で深さは平均約50cmである。この堅穴でも多くの炭化材が発見された。これまでの炭化材を発見した堅穴と同様、棒状の加工品が堅穴中央から放射状に延びている。真ん中では12号堅穴と同じような細かい炭の塊が見受けられる。彫形土器264・265・266、壺形土器273・282、鉢形土器292が炭化材とほぼ同レベルで出土している。

16号堅穴（第20図）

調査区の西南隅で発見された堅穴住居跡である。後世のカクランが激しく全容を明らかにすることは難しい。北東3分の1はSK41など新しい造構によって削平され、柱穴の残存しか確認できない。堅穴の長さは約6.5m×約4.2m以上。復元すれば正方形になると思われる。床面は張り床を施しているが、カクランにより大部分はとばされている。周縁部には周溝をもち、幅約15cm、深さ床面から約5cmを測る。周辺地山との比高差は約10cmと浅いが、遺物量はコンスタントに出土しており、器種も豊富である。柱穴は4本で約50cmの深さをもつが、北の柱穴はSK41の掘削によって失っている。特殊ピットは長辺約100cm、短辺約70cm、深さ約55cmのやや崩れた方形であり、これまでの堅穴と同様東南面の壁際に設置されている。

第2節 挖立柱建物跡

1号掘立柱建物（第23図）

A区の5号堅穴の西隣にある掘立柱建物跡である。桁行2間（約3m）×梁行2間（約2.8m）の長方形、床面積約8.4m²の規模を有する。柱間の寸法は約1.3m～1.5mの間隔をとる。柱穴の直径は約26cm～60cmで円形や方形、不定形とバラエティーに富む。深さも地山から約38cm～58cmとバラツキがある。

2号掘立柱建物（第24図）

A区の9号堅穴を取り囲む形で見つかった掘立柱建物跡である。桁行3間（約3.8m）×梁行2間（約3.2m）の長方形で、床面積は約12.16m²である。柱間寸法は桁行が約1.2m、梁行が約1.6m～1.7mとほぼ均一している。柱穴の直径は約40cm～80cmで、平均約50cm四方の方形プランを中心とする。深さは約34cm～44cmとほぼ均等している。西側の2本は近世河川跡によって消滅している。遺物は全く出ていないが、弥生時代の掘立プランと様相を異としており古代以降のものと推定する。

3号掘立柱建物（第25図）

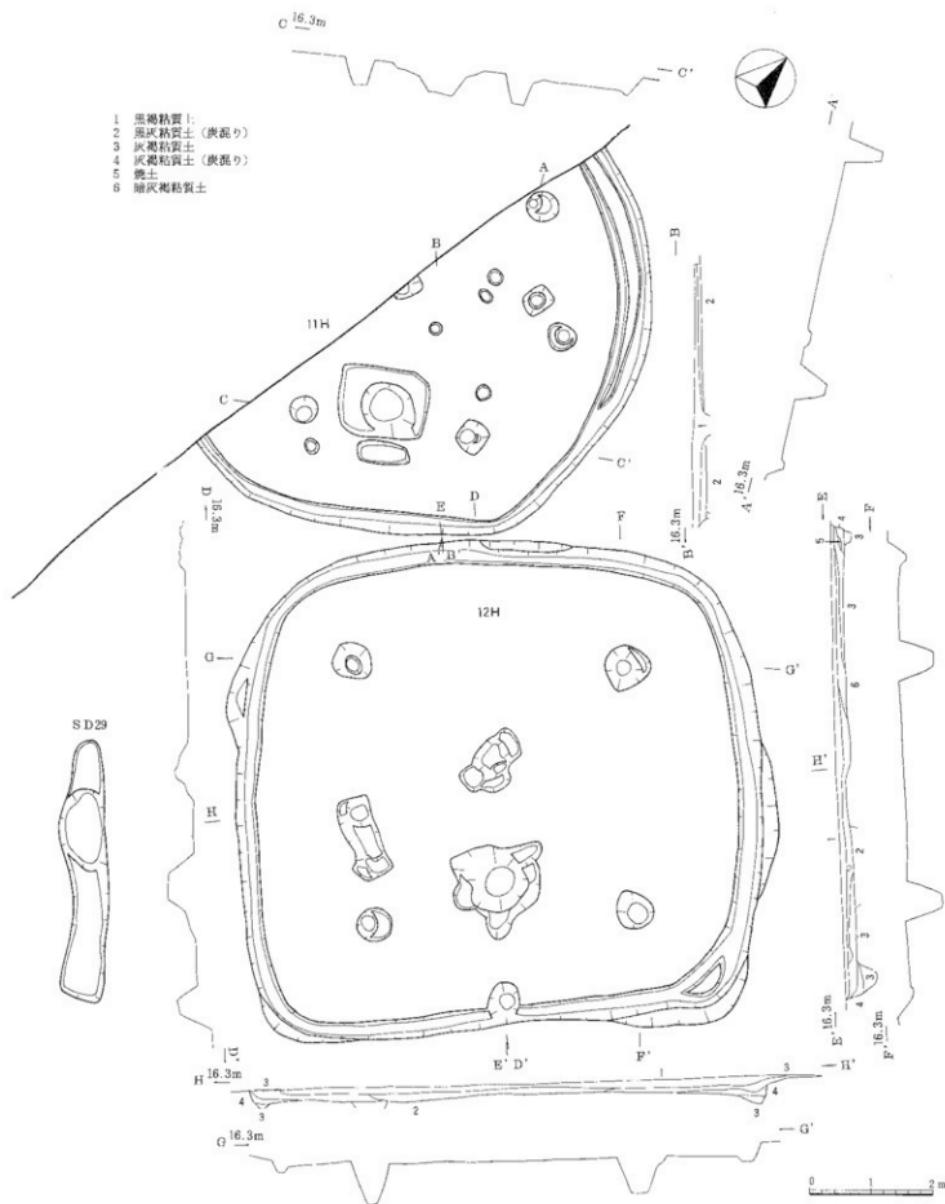
A区の10号堅穴の北東脇の一部に引っ掛かり、SK5を取り囲む形で見つかっている。桁行3間（約4.4m）×梁行1間（約3.8m）の長方形で床面積は約16.72m²である。柱間の寸法は約1.4m～1.6m（桁行のみ）で、柱穴の直径は約20cm～80cm、形も楕円形や方形、テラスをもつものなど千差万別である。深さも約50cm～70cmと幅広い。西南隅の柱穴は10号堅穴と切り合っており、掘立柱建物跡が埋まった後に堅穴が建てられたことが判明している。

4号掘立柱建物（第26図）

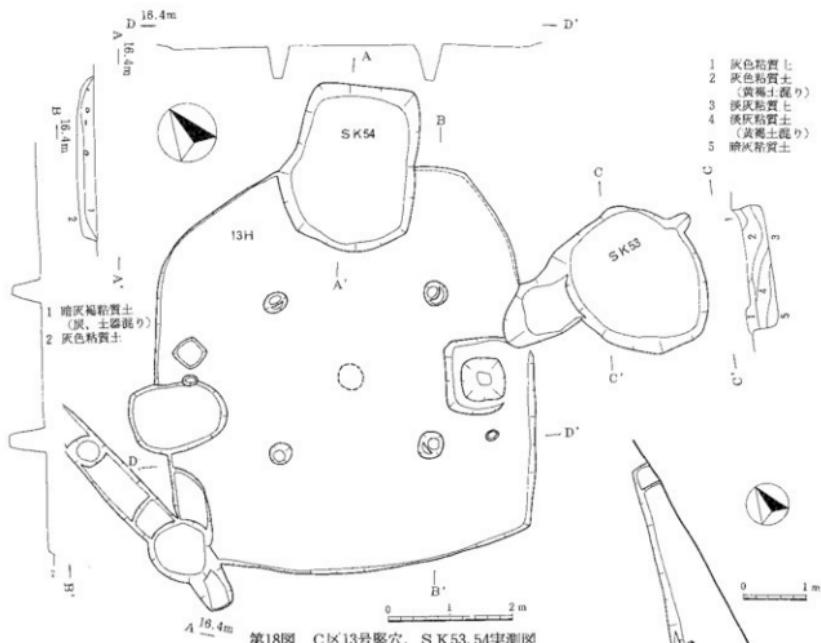
C区の8号堅穴の南に建つ掘立柱建物跡である。桁行3間（約5m）×梁行（約3.6m）で床面積は約18m²の長方形となる。柱間の寸法は約1.6mと等間隔で、柱穴の形状はテラスや段をもつものの円形を中心とする。柱穴の直径は約30cm～60cmで、深さは最深約50cmで平均約40cmである。

5号掘立柱建物（第27図）

A区の南16号堅穴から北西方向に向かった所に位置する。桁行2間（約3m）×梁行1間（約2.6m）の長方形



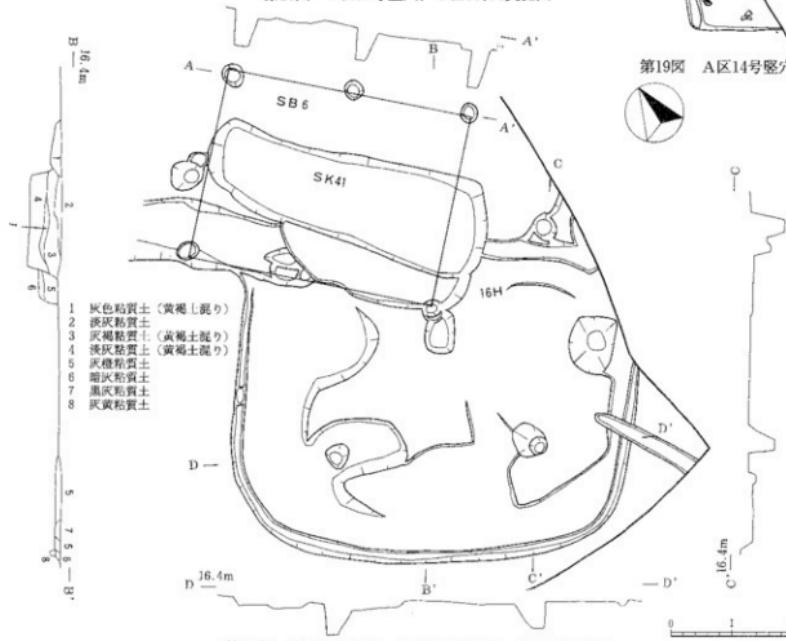
第17図 A区11号、12号竪穴、SD29実測図



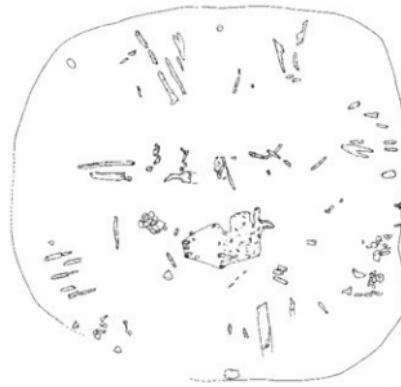
第18図 C区13号竪穴、SK53、54実測図



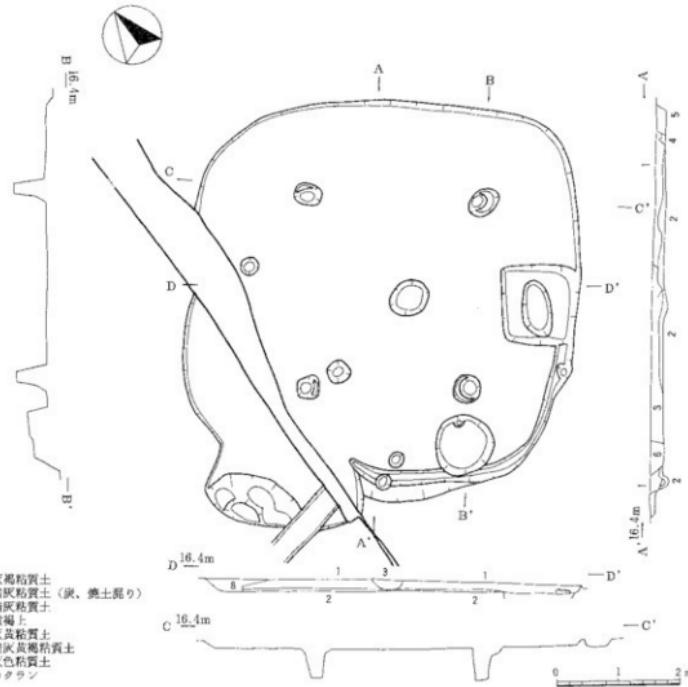
第19図 A区14号竖穴実測図



第20図 A区16号竪穴、6号掘立柱建物、SK41実測図



第21図 15号竖穴遺物・炭化材出土状況図



第22図 C区15号竖穴実測図

で、床面積は約7.8m²と今回の調査で最も小さい掘立柱建物である。柱間の寸法は約1.3m、柱穴は円形及び楕円形が多い。直径は約25cm～60cmと大小様々であるが、深さは地山から約70cm～75cmとこれまでの掘立柱建物で最も深く掘られている。

6号掘立柱建物（第20図）

16号堅穴の北隣に位置する建物であるが、堅穴と同様SK41など後世の遺構によって削平をうけ遺存状態はあまりよくない。桁行2間（約4.4m）×梁行1間（約3.5m）の長方形で、床面積は約15.4m²である。柱間の寸法は約1.9m～2.1mとほぼ均等で、形は円形がほとんどである。直径は約30cm～40cmで、深さは約50cm～70cmである。

7号掘立柱建物（第28図）

B・C区にまたがり一部15号堅穴に接する。南北方向を主軸とし、桁行3間（約6m）×梁行2間（約4.3m）の複数建物跡である。床面積は約25.8m²である。柱間の寸法は約1.7m～2.2mで桁行間と梁行間の距離はほぼ同一である。柱穴の形状は方形、円形、椭円形と様々で、直径約20cm～50cmである。柱穴内にはテラスや段をもつものが多く、深さは約25cm～48cmとばらつきがある。7号掘立の北西には弥生後期のSK58がみられ、切り合いでから7号掘立の方が新しいことが判明した。中央ラインの北から3番目の柱穴は存在しない。遺物は柱穴内から弥生土器片が見つかっているが、軸及びプランヤー1間分の長さなどから存続時期は古代以降と思われる。

8号掘立柱建物（第29図）

B・C区にまたがる掘立柱建物跡で15号堅穴の南に位置する。桁行4間（約8.6m）×梁行2間（約5.2m）、床面積約44.72m²と非常に規模の大きい長方形の建物である。柱間の寸法は約1.8m～2.2mと長く、柱穴の形状は方形、円形を基本とする。柱穴の直径は約60cm～120cmで深さは約50cm～60cmを呈する。土層断面から柱痕跡がみられ、直径約20cmの柱を使用したと推定される。建物の外側には雨落ちもししくは区画と考えられる溝が巡っており、北と西は途中で途切れている。周囲からは9世紀後半の須恵器が点在しており、この時期の建物と推定する。

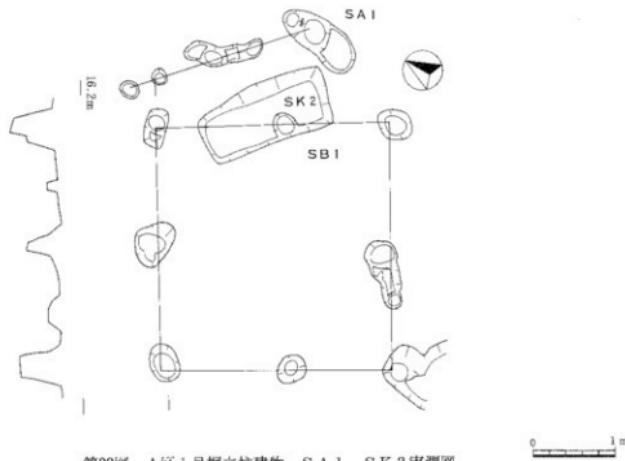
第3節 棚列

S A 1（第23図）

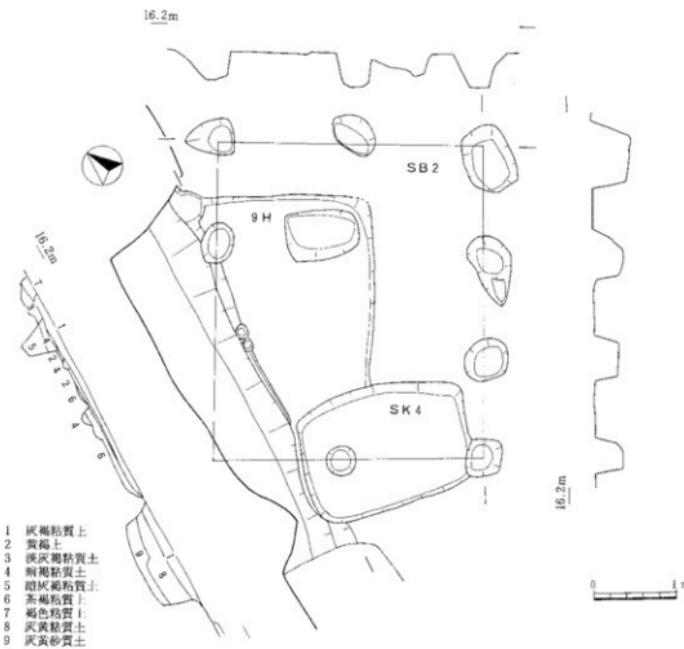
1号掘立柱建物跡の東端に並んでいる。ピット数は5個。ピットの大きさは直径約20cm前後と小さめのものがほとんどであるが、東端のピットは別の遺構が重なっている影響があるのか直径約40cmと一回り大きい。深さは約20cm～40cmと区々で穴と穴の間隔も約40cm～70cmとさまざまである。ピットのすぐ南隣にはSK2があり、SA1と平行に並んでいる。SA1とSK2は密接な関係をもつと思われる。

S A 2（第30図）

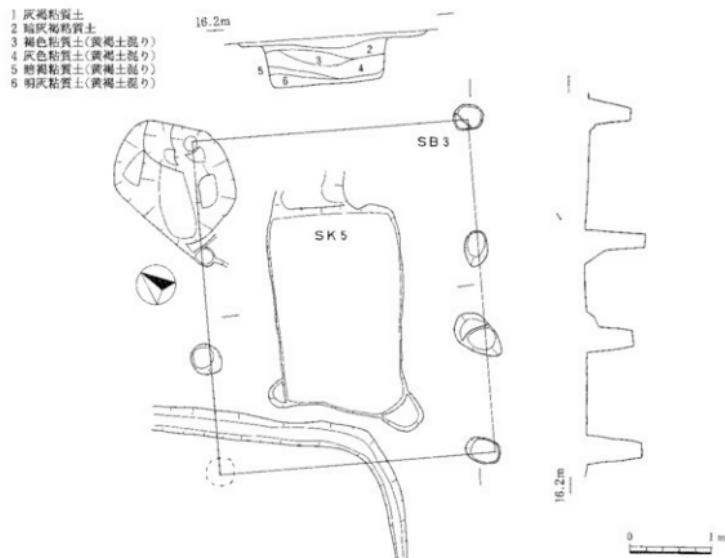
B区中央SK21、22、23、24の南隣に面する。ピット数は9個。形状は円形及び楕円形で中にテラスをもつものがある。直径は約20cm～40cmで深さは約15cm～60cmと様々である。ピットとピット間の距離は約50cm～100cmでSK21～SK24を遮るようにして並んでおり、SK7～SK24の土坑群を遮断・区画する目的と思われる。



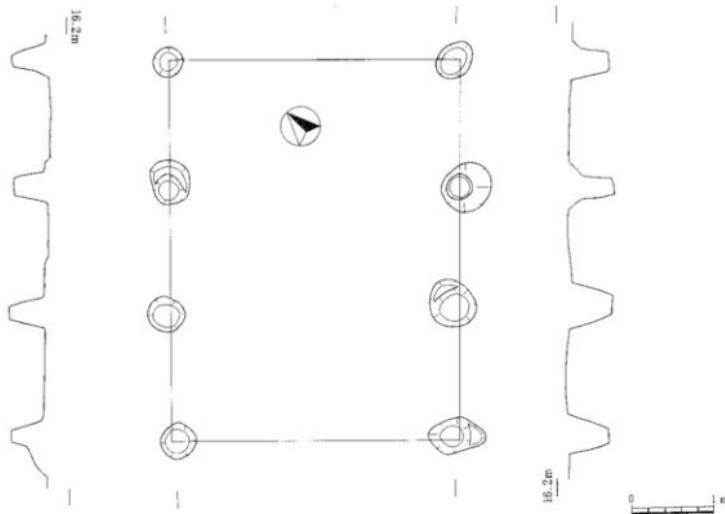
第23図 A区1号据立柱建物、S A 1、S K 2実測図



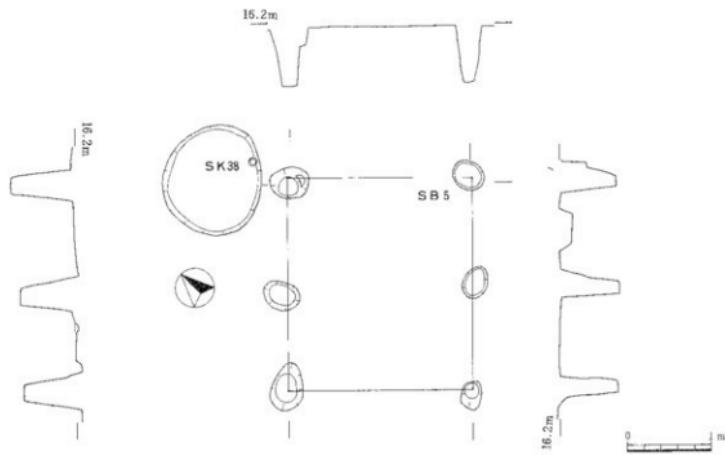
第24図 A区9号堅穴、2号据立柱建物、S K 4実測図



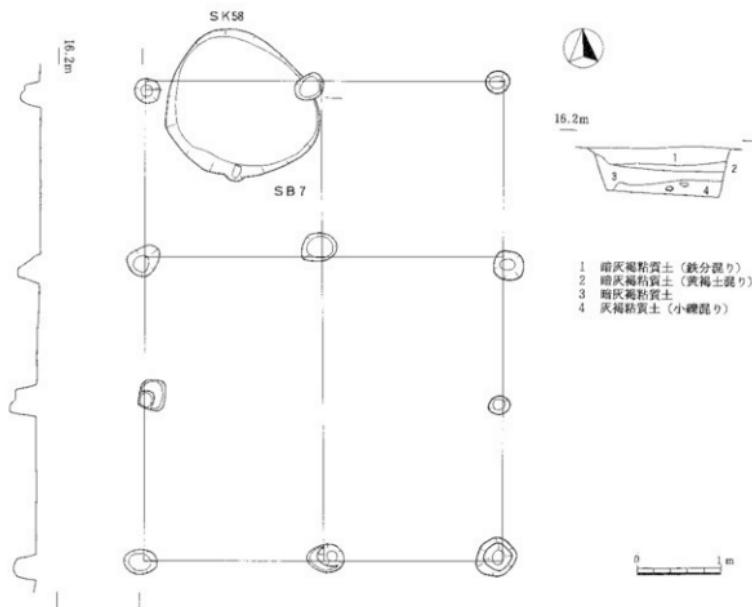
第25図 A区3号掘立柱建物、SK 5 実測図



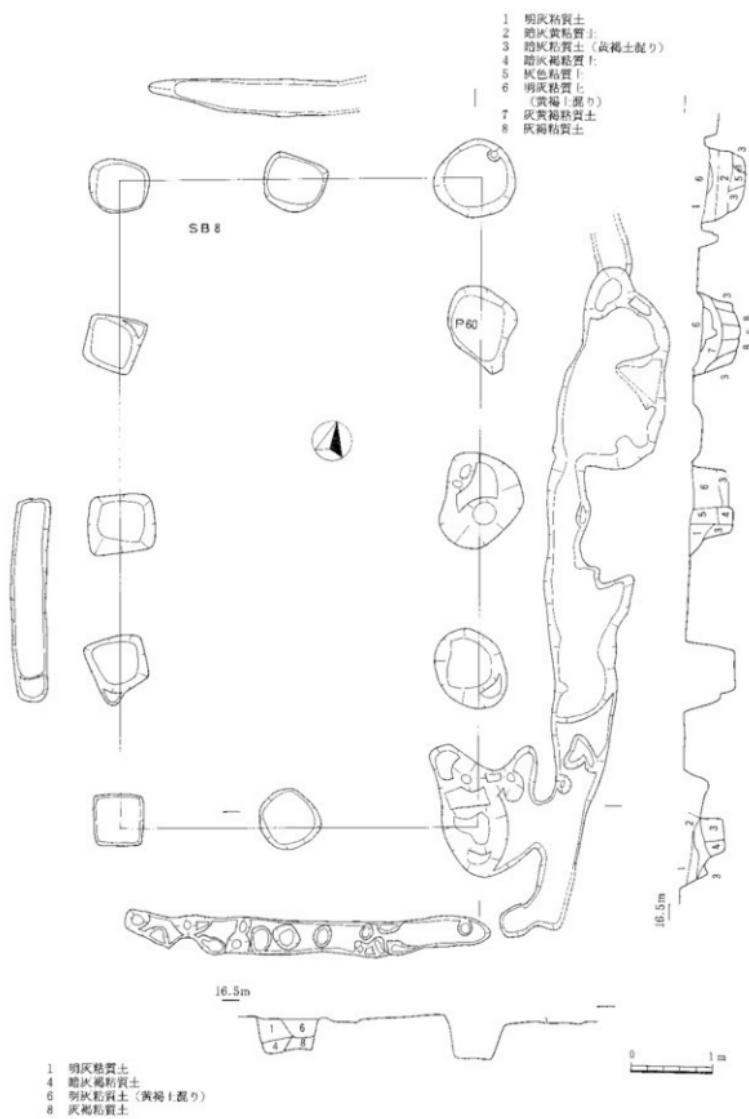
第26図 C区4号掘立柱建物実測図



第27図 A区 5号掘立柱建物、SK 38実測図



第28図 B・C区 7号掘立柱建物、SK 58実測図



第29図 B・C区 8号掘立柱建物、P60実測図

第4節 土坑 溝 その他

本節ではその他の主要遺構について述べる。但し、今回の紹介は遺物の出土した遺構を中心としており、以下に挙げたもの以外にも多数の遺構が点在するがここでは触れない。(図表示のないものは、第6図遺構全体図参照)

SK 1 (第10図)

B区で4号竪穴の北隣に位置する。長辺約170cm、短辺約100cmの長方形である。西南面は拡張するかのように段を設ける。深さは最深で約20cmと浅いが、出土した土器の数量は比較的多く穴の中全般に散在していた。

SK 2 (第23図)

A区の1号掘立柱建物の北に位置する。長辺約180cm、短辺約80cmの長方形で、深さは地山から約40cmを数える。土坑内に1号掘立柱建物の柱穴が見られるが、土坑と建物の新旧関係は不明である。遺物は全く出土していない。

SK 3

A区SK 2の西南から約3m離れたところにある不定形土坑である。長辺約160cm、最短約60cm、深さ約5cmで、穴の中には直径約25cm、深さ約20cmと直径約40cm、深さ約40cmのピットが掘られている。遺物は破損した打製石斧11が出土している。

SK 4 (第24図)

A区9号竪穴が廃絶した後に形成された土坑である。長辺約210cm、短辺約150cmの長方形を呈しており、深さは地山から約55cmと比較的深い。但し遺物は少量で、実測可能なものは壺形土器1点のみである。土坑内には2号掘立柱建物の柱穴が検出され、切り合いから新旧関係は9号竪穴→SK 4→2号掘立柱建物の順番となる。

SK 5 (第25図)

A区3号掘立柱建物の中にすっぽりおさまる状態で見つかった土坑である。長辺約240cm、短辺約150cmの長方形をしており、深さは約60cmと深い。3号掘立柱建物の真ん中に位置し、方向も同一であることから深い関係をももそうである。しかし遺物は弥生土器が小片出土するだけで詳細な性格付けはできない。

SK 6

A、B区SK 7～SK 24の土坑群が集中する北東隅に位置する。長辺3m以上、短辺約1mで北東～西南に細長く溝のようなプランをしている。内部はいくつもテラスをもっており、最も深い箇所で約60cmを数える。遺物は土器は皆無で打製石斧の破損品9が1点見つかっている。

SK 7 (第30図)

B区でSK 6の西に掘られた土坑である。これから述べるSK 7～SK 24の地点は竪穴住居跡や掘立柱建物跡、その他の遺構をほとんど見ることのない土坑のみ密集している区域である。長辺約240cm、短辺約200cmの隅丸をした長方形である。深さは約30cmである。遺物は土器はほとんどなく、打製石斧1が1点出土している。

SK 8 (第30図)

A区に位置し、SK 7の西南上にある。東面は調査区域にぶつかるためわからない。約160cm×140cm以上の隅丸方形をし、約70cmの深さをもつ。但し周縁部には約40cmの削平を受けており見た目では非常に浅い土坑のようである。

SK 9 (第30図)

A区でSK 8の南に位置する。東半分は調査区外のため不明。形状は多角形になると思われ、長さは南北ラインが最長で約110cmを測る。深さは地山から約30cmである。遺物は全く出土していない。

S K10 （第30図）

A区SK9の南隣にある。北側はSK9に切られ、東半分は調査区外となる。このためプランは隅丸方形の可能性をもちらん不明である。規模も約60cm以上×約30cm以上までしかわからない。深さは約10cmと浅く、遺物は全く出でていない。

S K11 （第15図）

A区10号竪穴の南端に位置し、周溝を削平する状態で検出された土坑である。長辺約200cm、短辺約140cmの長方形をしており、地山から約50cmの深さをもつ。遺物は出生土器が数点出土している。西南壁に幅約20cm、深さ約5cm～10cmの西南→北東方向へ向かう溝が走るが、関連するかどうかはわからない。

S K12 （第30図）

A区SK11の東側に位置する。長辺約200cm、短辺約120cmの長方形をしており、深さは約30cmを測る。遺物は出土していない。

S K13 （第30図）

A区SK12の東側に位置する。約80cm×80cmのやや歪な方形をしており、深さは地山から約30cmである。穴の中央には直径約20cm、深さ約20cmのピットが存在する。遺物は出でていない。

S K14 （第30図）

A区SK13のすぐ横。プランは上場は橢円形、下場は長方形をしている。北東面はSK13に切られわからない。長辺は推定約240cm、短辺約110cmで深さは約30cmである。

S K15 （第30図）

A区SK14の東南上に位置する。一辺約150cm×160cmのはば正方形に近い隅丸方形のプランをもつ。深さは約40cmと切り合い関係をもつSK16よりも浅い。

S K16 （第30図）

A区SK15の南隣。平面図をみるとSK16の方がSK15よりも新しいように見えるが、土層断面図を見るとSK15の方が新しい。長辺約180cm、短辺約150cmの長方形を呈しており、深さは地山から約60cmとなる。

S K17 （第30図）

A区SK16の西隣に位置する。一辺約110cm×100cmの隅丸方形プランで深さは約40cmを数える。遺物は出土していない。

S K18 （第30図）

B区に位置しA区SK10の東にあたる。土坑の西3分の1の上面は近年の農業用水によってカクランを受けている。プランは長辺約180cm、短辺約150cmの歪な隅丸方形で深さは地山から約40cmである。遺物は同一の器形、法量をもつ甕形土器4点をはじめ大型甕1点、高环形土器8点など本調査区の土坑で最も遺物量が多い。遺物出土土地の深さは地山から約30cm掘ったところである。先に述べた4点の甕は二次焼成は受けていない。一遺構の中に類似した器種が何点も出土するという状況、供獻用土器の高環が豊富に出土するという点などからSK18は祭祠土坑として意義づけられよう。尚、遺物の出土地は上面カクランを受けた西側に多い。この土坑の検出が1990年（平成2年）調査の終了3日前と時間がほとんどなく遺物出土状況の実測を行うことができなかった。非常に悔やまれることである。

S K19 （第30図）

B区SK18の北東に位置する。長辺約170cm、短辺約150cmの隅丸方形であるが、南半分はSK20が掘削しているためプランが崩れている。深さは約15cmとやや浅めで遺物はほとんど出土していない。

S K20 （第30図）

SK19の南に割り込むようにして見つかった土坑。新旧関係は不明。細長い橢円形をしているが、内部はテラ

スやピットをいくつももち、一つの遺構として認めてよいかいさか不安である。長辺約240cm、短辺約80cm、深さは最深で約55cmを測る。遺物は出土していない。

SK21 (第30図)

S K18、19、20の南方に位置する。SK21~24はそれぞれ切り合うが、わかっているのはSK23の方がSK22よりも新しいことだけである。SK21はこれらの土坑群で最も東端に位置する。一边約140cm×110cm以上の隅丸方形と思われるが、SK22や23の切り合いによってはっきりしたプランはつかめない。深さは約30cmで土坑内にピットが2つ並んでいる。

SK22 (第30図)

SK21の西隣にある土坑。長辺約180cm、短辺約140cmのやや歪な隅丸方形で、深さは地山から約60cmを数える。遺物は出土していない。

SK23 (第30図)

SK21、22、24に取り囲まれた土坑でプランの様相はわからない。最長約200cmで長方形になると推定する。深さは約15cmと浅い。

SK24 (第30図)

土坑群の中で最も南に位置する。西側3分の1は用水のため破壊を受けている。長辺約220cm、短辺約170cmの長方形プランで約25cmの深さをもつ。遺物は少量出ているが実測できるものはない。

SD25

A区中央12号竪穴の北側に位置する。12号竪穴とは軸が同じで竪穴をはさんだSD29とはほぼ同じプランをもつことから、セット関係になると考えられる。区画か排水によると推定されるが性格ははっきりしない。溝の長さは約3.4m、幅約30cm、深さ約10cm～15cmで、遺物の数量は以外に多いが実測可能なものは少ない。

P26

△区12号竪穴から西南上に進んだところに位置する。長辺約65cm、短辺約45cm、深さ約10cmとあまり目立った遺構ではない。周縁には5cm弱の浅い落ち込みが見られる。

SK27

P26の南隣に位置する。最長約150cm、最短約60cmの不定形をしており深さも約5cmと非常に浅い。土坑というよりは浅い落ち込みという表現の方が適切であろう。

SK28

P26の西南に位置する。長辺約130cm、短辺約115cmで別の遺構と複合しているため形状は不明である。深さは約10cmと浅いが土器は多量に出土した。廃棄によるものと考える。

SD29 (第17図)

先に述べたSD25に対応する溝である。溝の長さは約4.2m、幅は約60cm、深さは約15cmで、一部に約30cmの深さをもつ穴が存在する。この周辺に上器が一括に出土しておりミニチュア土器を確認していることから、この穴もしくは溝全体が祭祠的意味をもつと思われる。

SK30

△区12号竪穴の東南に位置する。長辺約190cm、短辺約100cmの不定形で深さは約20cmと浅い。

P31

SK30の東にあるピット。約55cm×40cmの楕円形をしており、深さは地山から約15cmを数える。

SK32

A区SK33の西方に位置する。西半分は調査区外となるため大きさはわからない。プランは隅丸方形になると想われる。深さは約40cmで高环形土器が1点出土している。

S K33 (第31図)

S D29の南方に位置する。若干歪な方形プランをもち一辺約180cmを数える。深さは約30cmである。

S K34

14号竪穴の南脇に位置する。長辺約160cm、短辺約120cmの方形を呈し約50cmの深さをもつ。周辺は約5cmほど削平されている。

P 35

14号竪穴の南、S K34の東に位置するピットである。上場は約60cm×40cmの梢円形で、下場は瓢箪型をしている。深さは約20cmである。

S D36

A区のS K32とS K33の間を横切る溝である。蛇行しながら北西-南東方向を走り調査区から外れていく。レベルをみると北西から南東へ流れることがわかり、S K11に流れ落ちる溝とは方向が違うため同一ではないと考える。幅は約30cm、深さは約20cmとしっかりした造りである。遺物は弥生土器が小片出土する。

S K37 (第32図)

A区S K32から南方向に位置し、S D36と切り合う。直径約160cmの円形である。穴の中の縁辺部に周溝が巡り約20cmの高さをもった盛土を設け、あたかも竪穴住居の張り床のような形をする。張り床状のところからは約50cm、周溝からは約70cmの深さをもつ。土層断面からS D36の方が新しく掘られていることが判明している。

S K38 (第27図)

S K37の南方に位置する土坑である。直径約130cmの円形をしており深さは約40cmである。内部東端の壁際で鉢形土器の完形品402が見つかった。

P 39

A区の6号掘立柱建物の北端の柱穴に相当する。直径約40cm×30cmの梢円形状で約60cmの深さをもつ。

S X40

P 39の付近を約1m～2mにわたってみられる落ち込み状遺構。深さは約10cmと落ち込みにしては深めであるが、人為ではなく自然状によるものと考えられる。

S K41 (第20図)

16号竪穴の北に位置し、竪穴及び6号掘立を削平する状態で検出された土坑。細長い長方形をし、長辺約470cm、短辺約140cm、深さ約50cmと規模は大きい。遺物は弥生土器片が少量見つかっているが、堆積覆土は灰色粘土を主とするため時期は中世以降と考えられる。

S K42

5号掘立柱建物の南に位置する。直径約150cmの歪な円形をしており、内部にテラスやピットが見られる。深さは約40cmで遺物はほとんど出土していない。

S D43

A区南端で確認した南北に走る溝である。幅約20cm～30cm、深さは地山から約5cm程である。北端は6号掘立の脇で消えてなくなり、南は調査区の外へ出ていってしまう。一部は16号竪穴に切られ、レベルから推察すると南から北へ流れていたようである。

P 44

C区8号竪穴の東南に位置するピットである。約60cm×30cmの細長い梢円形をしており、中にさらに直径約20cmの円形小ピットが存在する。深さは梢円形が約10cm、円形が約20cmである。

S D45 (第36図)

C区8号竪穴の東南上でP 44よりもさらに奥へ進んだところに位置する。幅約40cm、深さ約30cmの溝がぐるり

と向る周溝状遺構である。周溝内は直径約2mを数える。内部にはピットやテラスが設けられているが、規格性ではなく大きさ及び深さはバラバラである。遺物は弥生土器片が少量出土しているが実測できるものは皆無である。性格ははっきりわからない。

S K46 (第37図)

C区のほぼ真ん中に位置する土坑。三角形の角をとって丸くしたような形をしており、穴内部にはテラスが縱横無尽に形成している。約420cm×230cmの長さをもち、深さは最も深いところで約1mである。土坑中央約10cm掘った箇所で柴山出村期の土器が2点出土し(522、523)、覆土の一部には炭化物が混ざっている。

S K47 (第34図)

S K46の東方に位置する。長辺約200cm、短辺約130cmで長方形をしている。一部にピットやテラスがみられる。深さは地山から約40cmで全体にしっかりしたプランである。遺物は皆無である。

S K48 (第34図)

S K47の南に位置する。一部S K49に切られている。長辺約270cm、短辺約180cmの長方形である。西面中央に小ピットが存在するが同一遺構によるものかは不明である。遺物は出土していない。

S K49 (第34図)

S K48内にある隅丸方形形状の土坑。一辺約80cm×80cm、深さ約20cmを数える。遺物量は土坑の規模からみると非常に多く、甕、壺、壺、高杯形土器が出土している。祭祠土坑か。

S K50

S K48とS K51の間に位置する。深さ約5cmで直径約80cmの円形をし、内部には直径約20cm~50cmの小ピットが点在している。ピットは約10cm~40cmの深さである。

S K51 (第34図)

S K48の東隣に位置する。一辺約180cmの歪な隅丸方形をしており、約35cmの深さをもつ。遺物は出ていない。

S K52

S K48・S K49から南へ下がったところにある。約90cm×80cmの楕円形をしているが北西側は途切れなくなる。深さは約5cmと浅く、南には直径約20cm足らずのピットが3個見られる。

S K53 (第18図)

C区13号竪穴の東隣に位置する。直径約260cm×220cmの楕円形をしており、深さは約40cmを数える。遺物はほとんど出土していない。

S K54 (第18図、第35図)

13号竪穴の北端にあり竪穴廻絶後に掘削されている。長辺約280cm、短辺約200cmの長方形をしており、深さは約30cmである。この土坑からはS K18に匹敵する程大量の土器が発見された。土器は遺構面から約10cm掘り下げたところから一括に出土している。これは十坑の機能停止後、大分時間が経過してから土器が投げこまれたことを意味する。土器の出土状態はあまりまとまりがなく破片が多い。S K18のような祭祠的な意味合いは弱く、むしろ廃棄土坑の可能性が高い。

S X55

S K53の東南上に位置する。深さ約5cm足らずで北に向かって広がるように伸びている。遺構というより落ち込みという見方の方がよい。この地点で打製石斧2が見つかっている。

S K56

15号竪穴の北西方向、B区に位置する。プランは溝のように細長く南方は若干膨らみをもったヘチマのような形をしている。長辺約310cm、短辺約60cm、深さ約40cmで上層から土器片が散らばるように埋積していた。土器は甕形土器や高杯形土器などバラエティに富むが、実測可能なものは甕形土器と底部1点ずつである。

S K57 （第33図）

B区に位置しS K56の東隣に位置する。約180cm×150cmのやや変形した楕円形である。深さは約30cmで遺物は出土していない。

S K58 （第28図）

B区の7号掘立柱建物内にある土坑で、切り合ひから7号掘立の方が新しいことがわかっている。直径約200cmの歪な円形をしている。深さは地山から約60cmを測り、約30cm～50cmの深さに弥生土器片が集中して出土した。器種は壺、壺、高杯、鉢形土器とバラエティで施案によるものと考えられる。

S K59

B区15号窓穴の西南隅に掘られた土坑で楕円形をしている。南端は東西に走る溝に切られている。窓穴との切り合ひはわからない。長辺約170cm、短辺約80cmで内部はいくつかテラスをもち最深約45cmである。器台形土器などが出土しているが、15号窓穴につく可能性もある。

P 60 （第29図）

C区8号掘立柱建物の東面で北から2番目の柱穴に当たる。一辺約80cmの正方形を基本とするが南側は突出している。深さは約50cmで土層断面から柱痕跡を見る事ができる。時期は9世紀後半である。弥生後期の有段をもった甕形土器が1点まぎれこんで出土している。

S X61

C区の東南隅に位置する落ち込み遺構である。全長約200cm、深さ約5cmで周辺地形は東へ向かって下がる。この落ち込み遺構も調査区外へ伸びる。遺構というより窪みのようなものと思われる。

S X62

S X61のさらに南に位置する落ち込み遺構である。全長約9m、深さ約5cmを測り東南方向の調査区外へと進む。S X61と同様窪みのようなものと思われる。

S K63

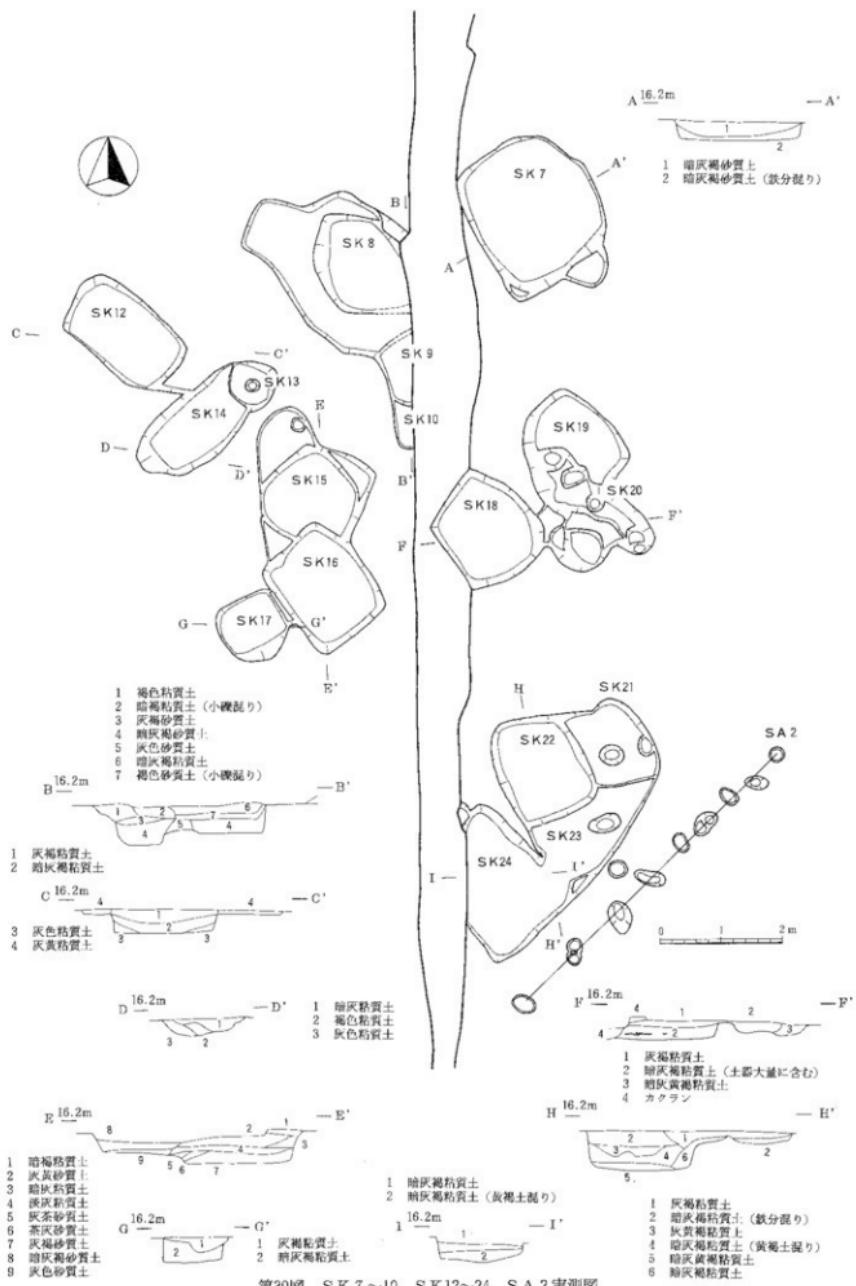
C区西南隅にある土坑。プランは北側は円形、南側は方形と変わった形状をしている。深さは約15cmと浅く掘り方のラインもあまりしっかりしていない。土坑よりも落ち込みのようなものと考える。

S K64

S K63のさらに南に位置する土坑である。遺構のほとんどは西側調査区外へとなるため細かいプランの様相はわからない。南北ラインは約160cm、深さは約15cmである。東壁には直径約25cmのビットが存在し、中から弧凹線をもたない有段口縁甕形土器の完形品が設置した状態で見つかった。祭祠によるものか、貯蔵用のものはわからぬ。

S D65

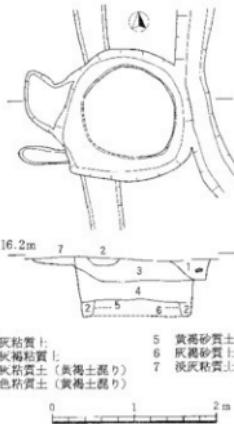
B区南端に位置し北西～東南方向を走る溝である。幅約40cm～50cm、深さは地山から約40cmで、溝のプラン、方向、底のレベル等を考えるとS D66と同一になる可能性が高い。



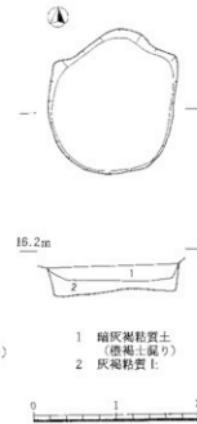
第30図 SK 7~10、SK 12~24、SA 2 実測図



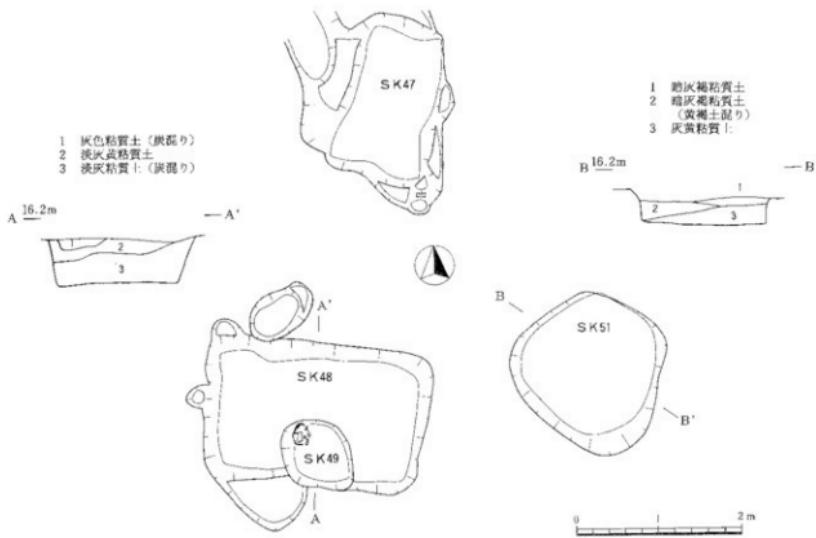
第31図 A区 S K33実測図



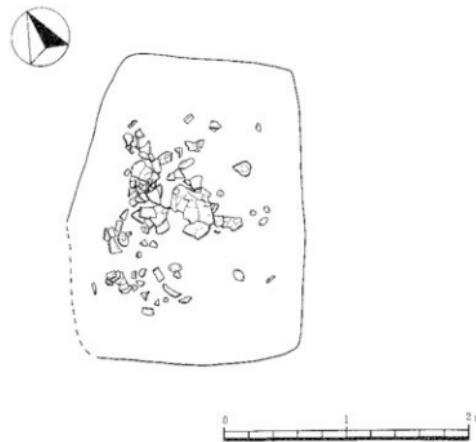
第32図 A区 S K37実測図



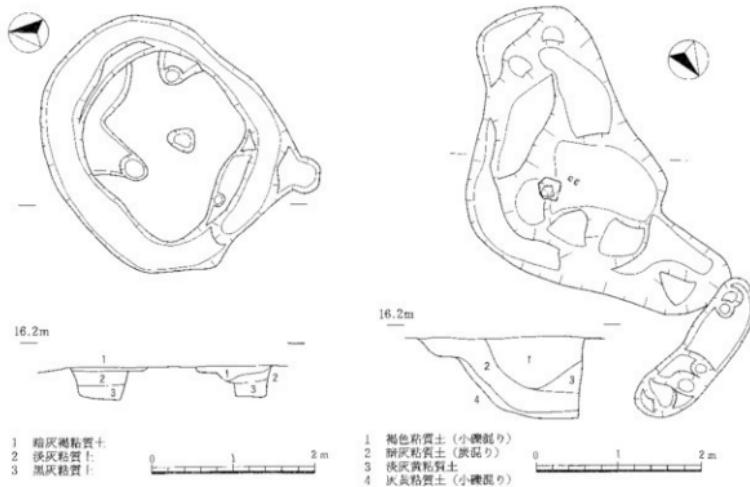
第33図 B区 S K57実測図



第34図 C区 S K47~49・51実測図



第35図 C区 S K54土器出土状況図



第36図 C区 S D45実測図

第37図 C区 S K46実測図

第5章 遺 物

第1節 土 器

第1項 弥生時代後期、古墳時代の土器

堅穴住居跡

1号堅穴（第38図1～8 第39図9～14）

1～7は壺形土器である。1、2は直立する口縁部に擬凹線をもつ有段口縁壺である。頸部以下は外面がハケ調整、内面はヘラケズリ調整で、頸部直下にハケ状具による連続斜行刻みを行う。3は外反する無文の口縁部を有しており、頸部以下の外面内面はともにハケ調整である。内面の上部では粗いハケ状具による調整痕が残る。摩耗が著しく外面全体に二次焼成によるススが付着している。北陸東部を中心に見られるタイプである。4は頸部が明瞭でなく口縁部から胴部にかけて直立に落ちるような器形をもつ。器壁は厚く内外面ともハケ調整である。5は断面が三角形の口縁部をもつものである。胴部外面はハケ調整から一部ナデ調整しており、内面はヘラケズリ調整である。6は無文有段口縁壺、7も無文有段口縁下部にハケ状具による連続斜行刻みがみられる。8は無文有段口縁部をもつ広口壺である。最大径は胴部中央部である。全体に摩耗しているため調整はよくわからぬ。9は高环形土器である。环受部から外傾に真っすぐ伸び外反する。口縁端部は直取りする。10、11、12は鉢形土器である。10、12は台付鉢で内湾しながら立ち上がる。11は丸みの付いた底部をもった有段精製鉢である。13、14は小型土器である。ともに外面全体に二次焼成によるススが付着する。

2号堅穴（第39図15～24 第40図25～32 第41図33～42）

15～19は壺形土器である。15は口縁部を直立に上げた有段擬凹線壺である。16、17は無文有段口縁壺で16はやや小さめ、17は15と同様口縁部は直立に立ち上がる。18はくの字型で口縁端部は内側に玉縁状の突起を設けている。時代は布留期で、出土地点は上層からのため堅穴住居跡にはつかないと考える。19は小型土器になるかもしれない。20～29は壺形土器である。20は短い口縁部の下部に細い棒状のもので連続刻みを入れている。21、22は有段口縁の広口壺で両者とも口縁部は外反せず直立に立ち上がる。21は外面胴部、22は口縁から胴部にかけてミガキ調整を行っている。23は無文有段口縁の広口壺で口縁下部に太い棒状具による連続斜行刻みをもつ。24は外傾する短い口縁部をもち口縁の中央はヨコナデでへこませている。25は筒状の口頸部がやや開きぎみに伸びる。胴部は球形胴である。調整は内外面ともハケ調整である。26～28は広口壺で口縁端部は上方へ引き出しつまみ出している。26や27は粘土紐の痕跡が頗著に見られる。29は長頸壺で一旦稜をもってゆるやかに広がる。外面はミガキ調整で赤彩を施している。30～33は高环形土器にあたる。30の环受部は有段鉢のように丸みをおびている。脚部は棒状で有段脚である。透かし穴は見られない。31は薄手の作りで身が深い。口縁は外反して端部は丸くなっている。出土地点は床面直上である。32は高环の脚部にあたる。堅穴内の特殊ピットから出土した。ラッパ状に外反し、端部は直上に面取りする。33は大きく外反する口縁で端部は外面下がりの広い面が強調されている。34は内湾気味に立ち上がる鉢形土器である。35、36は小型土器で両者とも内外面ミガキ調整が入っている。37は手づくね土器である。内外面共に粘土紐の痕跡を見る事ができる。38～42は底部である。40は外面ミガキ調整となっており壺形土器の可能性がある。41は床面からの出土である。

3号堅穴（第41図43～50）

43～50すべて壺形土器である。43、44は擬凹線をもつ有段口縁壺である。43の口縁部は直立に立ち上がり端部は外側へ向かって細くなる。内面には指頭圧痕、外面にはススが一部付着する。胴部調整は外面ハケ調整、内面ヘラケズリ調整である。44の器壁は厚く重厚なタイプである。擬凹線は4本で直線ラインではなくやや粗雑である。45はくの字口縁で、口縁部は狭小である。口縁下部は突き出ている。46は無文有段口縁で短い口縁部が直立

に立ち上がる。47～49は外傾度の強い口縁部をもつが、起伏に乏しく稜が鈍い器形となっている。50は伸長した口縁部の下部に棒状のもので使用した太い沈線を入れている。

4号堅穴（第42図51～57）

51は無文有段口縁の壺形土器である。器壁は厚く重厚なつくりである。口縁部は短く端部を先細りしている。52も壺形土器である。転凹線をもった有段口縁で口縁部は短く立ち上がっている。53は壺形土器である。無文有段口縁をもち口縁部は長く上方に立ち上がる。頸部内面は面取りをしておりヨコナデ調整である。54、56は高环形土器である。54は环部にあたり口縁は外反する。床面直上から出土している。56は脚部にあたり八の字状に広がる。透かし穴が1箇所見ることができる。55は小型土器で内外面ともに赤彩されている。57は台付きの鉢の底部である。台部は直線に開き、一部削離しているため底部と台部との取り付け痕跡を見ることができる。

5号堅穴（第42図58～70）

58～63は壺形土器である。58は擬凹線をもった有段口縁壺である。胴部は内外面ともハケ調整であるが外面胴上半部は一部ミガキ調整を施しており丁寧に精製している。全体的に肥厚な作りで在地色の濃い様相をしている。59、60も有段口縁壺で口縁部の真ん中に2本の擬凹線をいれている。61は短い口縁部が直立に立ち上がり擬凹線を施している。62、63は無文有段口縁壺である。62は直立した口縁部が強いヨコナデにより中へこみとなる。63はヨコナデ調整のしっかりしたつくりであるが起伏に乏しく稜が鈍い器形になっている。64、65は高环形土器の脚部にあたる。64は脚が外反して大きく開くことで小型品と推定する。65は全体に重厚なつくりになっており在地色が濃い。器台形上器の可能性も残る。66は袋状の口縁部をもった壺形土器である。外面はミガキ調整されているが全体に摩耗が著しい。67～69は高环形土器の环受部にあたる。67は54とタイプが酷似する。器壁は薄く口縁は外反する。内外面とも赤彩されている。68は丸みのついた环底部をもつ。69は若干厚めの器壁をもち重量感がある。口縁部は伸長せず外反度も弱い。口縁端部は外側に面取りする。70は台付き土器の底部である。端部径5.6cmを測り重量感をもつ。台は外反するが短くまとまる。壺形土器に付くものだろうか。

6号堅穴（第43図71～90 第44図91～95）

71～81は壺形土器である。71は無文有段口縁で短い口縁部に強いヨコナデを入れて中をへこませている。72は外傾する無文の短い口縁部を有する。73も無文の短い口縁部をもつが、直立に立ち上がり受け口状となる。74、75は極端に短い口縁で下部にはヘラ状具による連続刻みをもつ。74は柱穴内から75は周溝内から出土しておりこの2個体は同一になるかもしれない。76は無文有段口縁で重厚かつ丁寧なつくりである。77はくの字口縁で端部にはヘラ状具による連続刻みがある。78は無文有段口縁壺で頸部にはヘラ状具による連続刻みをもつ。79も有段口縁壺で口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。擬凹線が何本か入っていたと思われるがその後強いヨコナデが入ったためはっきりわかるのは1本だけである。80の口縁部は粘土紐を新たに取り付けて一周させた形をしており、大きく外傾する。口縁端部の下には1本の強い沈線が走る。81はくの字口縁した壺で端部に独特的な肥厚を行っている。畿内布留式土器の系譜に繋がるものである。82は擬凹線をもった有段口縁壺で口縁部は短い。83～87は壺形土器である。83は畿内の系譜をもった二重口縁壺である。図面は胴部上半が欠損しているため復元による。推定高30cm、内外面ともハケ調整であるが摩耗が著しい。84は口頸部が外傾に伸び、口縁端部は先細りとなる。肩部内面には指で押された跡があり土器製作の際の調整痕と考えられる。83と84はほぼ同一時期と考えられ81と同じ古墳時代前期と推定する。85は長い頸をもつことで口縁端部は断面三角形をしており口縁部下端が突き出されている。86は有段広口壺で受け口口縁となっている。87は二重口縁壺で外面に赤彩が施されている。88～90は底部である。89は内外面ともミガキ調整で86と同一の可能性がある。91～95は高环形土器である。91は丸くなかった环底部をもち口縁は大きく外反する。有段精製鉢の可能性もある。92は推定径25cmと大きめの製品で器受部は浅めである。内外面に赤彩をもつ。93は环底部と脚部との接点にあたる。94、95は小型高环の部類に入るだろう。94は环部にあたり外面に2本の沈線が入る。内外面とも赤彩である。95は無段の底部である。

7号堅穴（第44図96～107）

96～99及び102は壺形土器である。96は擬凹線の入った有段口縁部で短い口縁部が直立に上がっている。97も擬凹線をもった有段口縁部で口縁端部は先細くなっている。98、99は無文有段口縁部で、98は内湾ぎみの口縁が直立に立つ。99は強いヨコナデによってへこませた口縁部をもつ。全体に重厚なつくりである。102は無文有段口縁で、口縁部は外傾度を増し強いヨコナデを呈している。100、101は底部である。101は胎上・焼成から98と同一の可能性がある。103は有段口縁の壺形土器である。104～107は高环形土器である。104、105は杯受部である。104は器壁が厚く重厚である。杯底部は直線に伸び、口縁部は大きく外反する。105は若干丸みを帯びた杯底部から外反する口縁をもつ。これも比較的重厚なつくりである。106は脚部で八の字状に開く。脚部には透かし穴が4箇所あいている。107はラッパ状に大きく外反する無段脚である。

8号堅穴（第45図108～129 第46図130～136）

108～120まで壺形土器である。108は無文有段口縁部である。口径28.6cmと大型で器壁は厚い。外傾する口縁部は直線に伸びる。109～111は擬凹線をもった有段口縁部である。109は直立する口縁部をもち口径22.8cmと108と同様大型の壺である。110は外傾する口縁部を有し外面に二次焼成によるススが付着している。111は直立に立ち上がる口縁部をもつ。112は無文の有段口縁部で口縁部をヨコナデで強く押していることから中がへこんだ状態となっている。113、119は無文口縁の下部が付加する。114はくの字口縁であるが明瞭でない。115も口縁部のはっきりしない器形である。小型土器の部類に入るだろうか。116は有段口縁壺で中へこみのヨコナデをもつ口縁部をもつ。摩耗が著しく全体に丸みを帯びている。117も丸みを帯びた壺である。口縁は新たに粘土紐を取り付けている。118は口縁部が断面三角形状になるタイプで、頸部にかけて丸みを帯びている。口縁下部にはハケ状具による連続斜行刻みが残る。120は無文有段口縁で口縁部は内傾する。121は外傾する無文有段口縁壺で受け口状である。122～124は壺形土器である。122是有段口縁の壺である。口縁部は擬凹線をもたず内外面とも口縁までミガキ調整が入っている。123の119部は短めで直立している。頸部は大きく屈曲する。124は内湾する有段口縁をもつ。口縁部は伸長で擬凹線が入った可能性をもつが強いヨコナデを施したため状況はよくわからない。頸部に管状連続刺突文が認められる。125～129は底部である。125と127はくぼみ底となる。126と128はミガキ調整がかかっているので壺形土器の可能性をもつ。129は堅穴の特殊ピット及び周溝内から出土している。130～133は高环形土器である。130は杯受部にあたる。131はあまり外反しない。口縁端部は外側に向かって面取りする。131は杯受部と脚部の一部にあたる。杯部は水平に伸び破をもたず上方へと向かう。脚部は筒状で短い。全体がどっしりと重量感に富む。132は杯部がやや上へカーブしながら横に伸び急激に上部へ立ち上がりを見せる。竹生野式と呼ばれる能登地方から東へ多く分布するタイプである。133は小型高环で内外面に赤彩が施されている。134は器台形土器の器受部にあたる。受部が直線上に伸び口縁部は直上に立ち上がる。特殊ピットからの出土である。135は小型土器である。外面にミガキ調整が見れるが全体的に摩耗が著しい。136は底部に穿孔をもつ土器である。

9号堅穴

遺物は小片しか出土せず図示可能なものはない。

10号堅穴（第46図137～139 第47図140～155 第48図156～167）

137～152及び161、162は壺形土器である。137は口径31.8cmの大環壺である。無文有段口縁をもち口縁部は直立に上がる。口縁端部は外面は真っすぐに伸び内面は外反して先細りになる。胴部最大径は上半部で42.8cmである。調整は外面ハケ、内面へラケズリである。138はほぼ完形に近い無文有段口縁壺である。口縁部は外傾で強いヨコナデによって中へこみにさせた状態にしている。胴部下半から底部にかけて黒色のススが付着し底部は剥離が激しいため火熱を受けたと思われる。139も無文有段口縁壺である。口縁部はやや外傾ぎみで厚みをもっている。胴部の器壁は薄く胴部の最大径は中央部である。口径20.3cm、胴部径27.5cmの中型の壺と考えられる。140も無文有

段口縁甕である。口縁部は直立に上がり強いヨコナデで中へこみとなっている。口縁端部は内側に向かって面取りしている。外面の底部周辺は剥離が多く、胴部の一部にはススが付着している。138と同様火熱を受けたと考えられる。これらの土器は煮炊き用であった可能性がある。141は頸部から口縁部にかけてゆるくカーブしながら立ち上がるタイプである。器壁は薄く外面はハケ、内面はナデ調整である。底部径は比較的大きく5cmである。外面全体にススがついている。破片の一部は特殊ピット内から出土している。142はくの字口縁タイプである。口縁端部は外側に向けて面取りをする。この土器も外面に一部ススが付着している。143もくの字口縁甕である。頸部に突帯状のものがあるが土器を製作する際、ヘラ状具をあてた時の痕跡である。144は内湾状に立ち上がる口縁部をもつ。11縁部はヨコナデ。全体に重量感をもつ。頸部のくびれが強いため壺形土器の可能性もある。145、146は11縁部に独特の肥厚を行なう畿内布留式土器である。147はやや小さめの有段口縁甕である。口縁部は長めで直立に立ち上がる。肩部には太いハケ状具による連続刻みが行われる。外面胴部下半にはススがつく。148も有段口縁甕である。口縁部は擬凹線をもち真っすぐ上方に伸び先端は細くなる。器壁は薄く外面にはススがついている。149～152は無文有段口縁甕である。149は頸部から口縁部にかけて伸長で口縁部は大きく外傾する。150の口縁部は短く外傾でヨコナデ調整により中へこみになっている。床面直上からの出土である。151は口縁部の強いヨコナデと頸部の大きな屈曲で口縁部下半が突出した状態となっている。152は直立ぎみの口縁部をもつが明確な稜はもたない。153～155は底部の土器で154はススが付着している。156は壺形土器である。胴部最大径は19.9cmである。157は台付き土器である。台は外反して広がる。158は底部から胴部にかけての上器である。外面はハケ、内面はヘラケリ調整で壺形土器と推定する。159、160は壺形土器である。159は長い頸をもつもの。口縫帶は伸長で下部が突出する。160は畿内系二重口縁壺である。頸部の下方には突帯が巡りそこにヘラ状具による連続刻みが入る。161、162は器種がよくわからなかつたが壺形土器とした。161の頸部ははっきりせずゆるく湾曲しながら口縫へと繋ぐ。口縫部は短く若干立ち上がりを見せて丸めている。162の口縫部は断面三角形である。頸部の器壁は厚い。163は鼓形をした小型土器である。高杯もしくは台付き鉢と呼称すべきか。164～166は器台形土器の脚部である。164は棒状支柱でやや膨らみがかかる。外面は赤彩がかかっている。165、166は幅広く開いた形をしている。166は3箇所の透かし穴を確認する。167是有段脚である。透かし穴は2箇所確認され推定4箇所と思われる。

11号窓穴（第48図168～172 第49図173～196 第50図197～199）

168～171は擬凹線をもった有段口縁甕である。168は口縁部が長く擬凹線は貝文様を使用したと思われる。169の口縁端部は外反し、170の口縁部は直立に上がって丸くおさまる。171の口縁部は直上でやや短めである。肩部に波状文が見られる。172は無文有段口縁甕である。口縁部はヨコナデが強く中へこみとなる。頸部の屈曲は激しい。173～179まで壺形土器である。173は口縫部を欠いた壺で、頸部には突帯がある。174の口縫部は指でつまみ出してヨコナデを行い端部を尖らせている。175の口縫部は外側へ突き出させている。176は胴部下位が強く張り出しうほまる袋状の形をした壺である。177は口縫部と頸部の見極めが難しい。178は有段擬凹線の口縫をもち内外面に赤彩が施される。179は口縫部が無文で強いヨコナデによりへこんだ形となっている。177、179は壺形土器の可能性もある。180～182は小型土器である。181の外面は赤彩が認められる。182は手捏ねである。183～186まで高杯形土器となる。183の口縫部は短くあまり外反しない。端部は丸みを帯びながら外側に面取りする。脚部は棒状であるあまり伸長ではない。全体に重厚なつくりとなっている。床面直上で見つかった。184も棒状の脚部である。185は大きく外反する口縫部である。これも器壁が厚く重量感にあふれる。186はラッパ状に広がる脚部である。透かし穴は4箇所である。小型の部類に入るだろう。187～191は器台形土器である。187は186と同様小型のラッパ型した脚部である。透かし穴は4箇所である。188は八の字状にやや開くタイプである。189は筒状の脚部に直線上の器受部をもった漏斗のような器形である。透かし穴は1箇所だけ確認できた。床面直上から出土している。190は187を大型化したようなラッパ型した無段脚である。透かし穴は3箇所である。191は口縫端部

が大きく垂下し外の面に擬凹線を有する。器受部はあまり傾かず直線に伸びるため身は浅い。192～196は底部にあたる。192は穿孔をもった土器である。鉢形土器と思われる。193～196の底部径は4.3～5.4cmと大きめである。197～199は鉢形土器である。197は擬凹線をもつた有段鉢である。外面全体にススが付着している。198、199は無文有段口縁をもつ。199の口縁下部には櫛状具による連続刻みがある。

12号竪穴（第50図200～220 第51図221～246 第52図247～254）

200～211は擬凹線の入った有段口縁變形土器である。200は器壁が薄く口縁端部が細くなる。胴部はあまり張らない。201、202は口縁の下部に付加物がつく。200と202は床面直上からの出土である。203、204は器壁が厚い。204の口縁内部に指頭圧痕の形跡があるがはっきりしない。205、206の口縁端部は先細りになっている。205は外傾度が強く内面に指頭圧痕が認められる。206は口縁部が伸長で下部には付加物がつく。207は外類で短い口縁部をもつ。208は直立した短い口縁部で崩れた擬凹線をもつ。209、211の口縁部は内傾である。210の胴部はほとんど張らずに直下する。212、213も有段口縁変形であるが無文である。214～220及び223～226は底部にあたる。214の内面見込み部に指頭圧痕の窪みが見られる。216は外底面の窪み周間に4箇所の粘土塊をつけている。217の外底面にはモミ痕が残る。218の外面には指頭圧痕の窪みが認められる。223は窪みが浅い。226は216と同じくぼみ底で、2箇所の粘土塊が見られる。221は大型の變形土器である。口縁は直立に上がり端部で平面に面取りする。222は小型土器で内外面に赤彩が残る。228は頸部のはっきりしない變形土器である。227、229～232は壺形土器である。227は口縁下部に強めのヨコナデを入れ有段の口縁部を形成している。頸部内面下半には指頭状の圧痕が残る。229は有段口縫をもつ。頸部に突尖状のものがあるが調整の際に生じた痕跡である。230は短い口縁部をもつた壺である。231、232の口縁下部にはハケ状具による連続刻みがある。233は底部である。變形土器になるだろうか。234、235は壺形の小型土器である。234は外面と内面口頸部に赤彩がかかる。火熱を受けた痕跡があり全体にススが付着する。焼失住居の影響か、祭洞に関わるか今後の課題である。235の内外面は赤彩が施されている。236は底部穿孔の土器である。237～239は高杯形土器である。237は杯部にあたる。238は内面に赤彩が残る。まだ上方へ進みそうな器形であるがここで完結する。239は丸みを帯びた杯部である。小型の部類に入るだろう。240～243は脚部である。240は棒状、241、243は八の字型、242はラッパ型である。240と243は器台形土器、241と242は高杯形土器と考える。244は器台形土器の完形品である。器壁は厚く、口縁部は直立に上がり、鼓形をしている。245、246も器台形土器で両方とも脚部とした。擬凹線をもつ有段脚である。247は直線に広がる無段脚である。透かし穴は4箇所である。248は蓋形土器である。本遺跡での蓋形土器の出土は極めて少ない。249と252は鉢形土器である。249は内湾して立ち上がり口縁端部は細くなる。底部は穿孔する。252は完形品で床面上から出土している。253は壺形土器となるだろう。内外面とも赤彩がかかる。250、251、254は小型上器である。

13号竪穴（第52図255～260）

255、258、259は壺形土器である。255は無文有段口縁で長めの口縁部をもち外傾する。258はくの字口縁か有段口縫か判別しにくい器形である。259は直立に立ち上がった有段口縁で擬凹線をもつ。256、257は壺形土器である。257の外面にはススが付着している。260は高杯形土器である。口縁部は短めでほとんど外反しない。端部は外側に向て面取りする。内面には真ん中に向かって遮光状の赤彩がかかる。

14号竪穴（第53図261～263）

261はくの字口縁の變形土器である。やや小型で外面にススが付いている。262は高杯形土器で丸みをもった杯部に外反する口縁部を有する。263は鉢形土器になると思う。有段口縫をもつ推定口徑25.6cmと非常に大きい。

15号竪穴（第53図264～281 第54図282～292）

264～271は壺形土器である。271以外は無文有段口縫である。264の口縁部は内傾で強いヨコナデによって中へこみになっている。胴部は球形に近く全体的に重厚である。外面にススが付着する。265はやや小型で口縁部は直立する。胴部はあまり張らない。床面直上から出土している。266は短い口縫部で強いヨコナデによって中へこみ

となる。267は頸部の屈曲が著しく壺形土器の可能性も残る。268、269は口縁下部に付加物がつく。268は胴部がやや張りをみせるが口縁部の方が発達している。両者とも外面にススがつく。270の口縁部は外傾を示し、口縁下部にはヘラ状具による連続刻みをもつ。271はくの字口縁となる。口縁端部は外側に面取りする。近江北部地域の影響をうけている。272は有段口縁の壺形土器である。口縁部は伸長で直立に上がる。外面はミガキ調整である。273は小型の有段口縁壺である。口縁部は長く外傾で外反する。274～280は底部となる。276～278は底み底で278は外底面に4箇所の粘土塊がつく。281は小型土器で外面に赤彩痕が残る。282～288は壺形土器となる。282は高さ31.2cmを測る壺である。口頭部はやや広がりをみせ、口縁部は外側に面をとった断面三角形となる。胴部は中央で最大径を測る。283の口縁部は外反し、端部は水平状に面取りする。面取りした後ナデており一部底みが見られる。内面にハケ状具の跡み痕が見られる。284は外傾する長い口縁をもち頸部に向かう程すぼまっていく。口縁下部にはヘラ状具による連続刻みがある。285の口縁部はヨコナデ調整により外反を示し、286は外傾する口縁部がそのまま伸びる。287は筒状に伸びる口頭部をもち端部は外反して断面三角形となる。288は東海地方のペレススタイルの影響を受けたものである。289は山陰系土器の系譜をもつ壺形土器である。290は外反度の強い口縁部をもつ高杯形土器である。口縁端部は外に向けて面取りする。291は台付き土器である。台部しか遺存せず器種はわからない。直線上に伸びるタイプである。292は台付きの鉢形土器である。胴部は直線に伸び口縁が近くになるにつれ内湾する。

16号堅穴（第54図293～298 第55図299～313）

293～299は壺形土器となる。293、294、297～299は無文有段口縁である。298の口縁下部にはハケ状具による連続刻みがある。294、298は壺形土器の可能性もある。295、296はくの字口縁で295の口縁端部は指でつまみ押さえている。296は強いヨコナデで端部を細くする。300～306で壺形土器である。300は口縁部がラッパ状に広がる壺である。外面は頸部までハケ調整である。301は細く長い頸をもつ壺で外面は赤彩をもつ。302、303は壺の頸部にあたる。302は屈曲する所に突帯がつく。304は短い口縁をもち端部はやや直上気味に立ち上がる。305は算盤玉状に張り出す胴部で、胴の張り出し部分に大きい突帯がつく。306は無文有段口縁をもった壺である。口縁部は短く直立する。307～309は高杯形土器である。307は小型高杯の杯受部にあたる。杯部は内湾状に上がる。308は口径25.5cmと大型の高杯となる。器壁は厚く重厚なつくりである。口縁端部は外面下がりの広い面を肥厚なしで取っている。口縁部は杯底部に比べて短く外反度は大きい。内面に赤彩を施している。309も口縁部の外反が著しく、口縁端部は水平に面取りする。外面に赤彩痕が残る。310是有段脚である。段になる所に沈線が2本入った付加物が取り付く。透かし穴は3箇所確認するが全周での個数は不明である。端部は折り返しをもつ。311～313は鉢形土器である。いずれも有段口縁で、311の口縁部は直上。312、313は外傾である。312の口縁部及び胴部には波状文がある。外面全体にススが付着する。313の胴部はゆるい内湾から急に立ち上がりを見せる。床面上から出土している。

土坑 溝 その他

S K 1（第56図314～320）

314は擬凹線をもった有段口縁壺である。外面頸部までハケ調整となる。315は壺形土器で口縁部にむかって広がる。316は直線に伸び切る器受部をもった器台形土器である。口縁端部は外側に向けて面取りする。317は高杯形土器の脚部でラッパ状に広がる。外面に赤彩を施している。脚は無段脚である。擬端部は内側に向けて面取りする。318は台付き土器である。底部までの器高は3.9cmとやや高め。これもラッパ状の広がりを見せる。319と320は底部で壺形土器と推定する。

S K 4（第56図321）

口縁部に向かって広がる壺形土器である。器壁は厚く重厚である。内外面ともハケ調整である。

S K 8 (第56図322~327)

322~324は無文有段口縁の壺形土器である。322は頸部の屈曲が強く口縁端部は水平に面取りする。323の口縁部は真っすぐに立ち上がりハラ状具による連続刻みがつけられている。近江系土器の系譜に通なっている。324はやや厚めの口縁部を有し外頬ぎみに立ち上がる。壺形土器の可能性もある。325は口縁部が伸長する高杯形土器である。内外面に赤彩が残る。326は脚部である。器種は不明。端部は面取りし上方につまみ上げている。外面にV型の連続文様及び赤彩が施される。327は小型土器になる。

S K 11 (第56図328)

壺形土器のつまみ部にあたる。頂部真ん中にはへこませている。外面に赤彩を施す。

S K 14 (第56図329)

底部穿孔の土器である。器種は不明。

S K 15 (第57図330~337)

330~333は壺形土器である。330、331は擬凹線の入った有段口縁である。332はくの字口縁で口縁部は短めである。333は壺形土器である。口縁部は短く外傾する。334は器受部径24.6cmの大型の器台形土器である。器受部の段は重厚につくり口縁部は大きく外反する。脚部は八の字状に広がる。透かし穴は4箇所である。335は真っすぐに伸びた細い壺形土器の口縁部である。摩耗が著しい。336は水平に伸びた杯部から大きく立ち上がる口縁部をもった高杯形土器である。口縁部は伸長であるがあまり外反しない。身の深い形状になっている。337は八の字状に広がる高杯の脚部である。柱状部は長い。端部は伸び切らず中途で内側に面取りする。

S K 16 (第57図338、339)

壺形土器である。338は擬凹線をもった有段口縁である。口縁はやや伸長で直立に上がり、端部は細くなる。内面には指頭圧痕が連続で押されている。器壁は薄い。339は無文の有段口縁で内面が外反して端部は細くなる。両者とも外面にススがつく。

S K 17 (第57図340、341)

340は擬凹線の入った有段口縁壺である。口縁は伸長で口縁端部は細くなる。胴部最大径は中央部であるが大きさは張らない。全体に重厚なつくりである。341は小型高杯の脚部である。外面及び杯部内面に赤彩が施される。

S K 18 (第58図342~348 第59図349~358 第60図359~362 第61図363~372)

342~359は壺形土器である。343と344、345と346、347と348、349と350、352と353は同一個体になる。342から348までの4体の壺は器形、法量、調整、色調、焼成、胎土がほとんど同じという極めて珍しくかつ興味深い土器である。製作時期・場所・使用時期・使用内容、S K 18への埋土時期が同一で行われたと解釈する。製作工人も一個人によるものかもしれない。擬凹線をもった有段口縁をしており、342、343は直立、347は内傾に立ち上がる口縁部をもつ。肩部にはいづれもハケ状具による連続刻みが見られる。胴部は卵型で真ん中よりやや上がり最大径になる。349・350や352・353は器形、法量に差異があるが調整、色調、焼成、胎土が上記4体壺と酷似していることからこれも製作場所や工人が同一の可能性をもつ。349の口縁部は外傾で擬凹線をもつ。352は無文の有段口縁で口縁部は外傾する。胴部はいづれも卵型。肩部にはハケ状具による連続刻みが通なる。どれもが二次焼成は認められず土坑に対しての埋納に使用したと推定する。351は有段口縁壺である。擬凹線らしきものが見えるがヨコナデによりほとんど無文化している。口縁部は直立に立ち上がり受け口状をしている。胴部最大径は中央部で11径よりも長い。近江系土器の影響を受けた在地型の所産と考える。354の口縁部は短く立ち上がり強いヨコナデで中へこみさせている。口縁下部はヨコナデを残したため突起した状態となる。胴部はあまり張らない。355は無文の口縁をもった有段口縁壺である。口縁部は長く直上となる。胴部は張らない。焼成、胎土は342、347等と酷似する。356は小型の部類に入るだろう。357は受け口をもつ無文有段口縁壺で器壁は薄い。

壺形土器の可能性もある。358の口縁下部にはハケ状具による連続刻みをもつ。359は口径28.6cm、推定高43.2cmの人型甕である。擬凹線を有した有段口縁をもち、口縁部は直立に上がる。外面はスヌが付着し胴部の所々に剥離が見られる。360～368は高環形土器である。360の口縁は伸長で大きく外反し、口縁端部は水平な広い面をもつ。内外面に赤彩がつく。361も口縁部の外反度は強く口縁端部は外側に小さい面をもつ。362の口縁部は短く外反度も360、361よりは弱い。杯底部は若干丸みを帯びる。363は口縁部は長いが外反せず直線となる。口縁端部は外側に向けて面取りする。外面赤彩が見られる。364は口径33cmと大型の部類である。杯部は丸く口縁部は伸長で大きく外反する。器壁は薄い。365は杯部が丸みを帯び、口縁部は短く外反する。口縁端部は外側に面取りするよう見えるがあまり明瞭ではない。身は深めである。366の口縁部は比較的長めで外反度も強い。杯部と口縁部との間の稜は顯著である。器壁は薄い。367は杯受部が頗りしている。口縁部の立ち上がりと外反は著しい。脚部は棒状に近く伸長である。摩耗が著しい。368は小型高杯の脚部である。ラッパ状に開く無段脚となる。369～371は無段脚である。369の端部は直立に面取りし、その他は伸び切る。372は口径27.4cmと大きめの器台形土器である。口縁部は伸長で大きく立ち上がり外反する。

S K21 (第62図373)

擬凹線をもった有段口縁の壺形土器である。口縁部は長く直立に上がる。外面に赤彩が残る。

S D25 (第62図374)

有段口縁の壺形土器で擬凹線を有する。口縁下部は突出する。

P 26 (第62図375, 376)

両者とも底部である。375はくぼみ底である。

S K27 (第62図377)

壺形土器である。口縁部は外反し、口縁端部は細く尖る。器壁は薄い。

S K28 (第62図378～382)

378は口縁が欠損する壺形土器である。胴部は球形に近い。外面にスヌが付着する。379は小型の壺形土器で、ほぼ完形品に近い。口縁部は形態が甘くはっきりしない。口縁端部は明瞭な面取りをせず凸凹する。380は壺形土器の口縁部にあたる。外反ぎみに伸び、口縁端部は細くなる。381は身の浅い高環形土器である。口径27cmと大型で口縁部は大きく外反する。口縁端部は直上に面取りする。382は高杯の脚部にあたる。八の字状に広がり、端部はやや内側に向けて面取りする。

S D29 (第62図383～386)

383は擬凹線の入った有段口縁壺形土器で口縁部は内傾となる。器壁は薄い。384は壺形土器の胴部にあたる。外面は赤彩を施す。385、386は小型土器となる。385は壺形土器の部類に入るであろう。

S K30 (第62図387, 388)

387は有段口縁壺形土器で口縁部は短く外傾である。擬凹線を有する。388は高環形土器の脚部である。ラッパ状に広がる無段脚である。

P 31 (第63図389)

有段口縁の壺形土器である。口縁部は外傾で口縁端部は細くなる。

S K32 (第63図390)

高環形土器である。杯部は丸みがあり口縁部は外反する。

S K33 (第63図391, 392)

391は有段口縁の壺形土器である。擬凹線を有するが途中で滅失する箇所があり明瞭ではない。392は小型高杯になる。杯部は内湾して口縁端部へと続く。内面はミガキの後にハケという調整を行っている。

S K34 (第63図393～395)

いずれも壺形土器である。393はゆるくカーブする頸部をもった壺である。口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。394は屈曲する頸部をもった壺で、口縁部は短い。口縁端部は内側に面取りする。395は直立に立ち上がる口縁部に強いヨコナデを行っている。

P35 (第63図396)

高环もしくは器台形上器の裾部にあたる。端部は内側に向かって面取りする。器壁は厚い。

S D36 (第63図397)

底部にあたる。しっかりしたつくりであるが器種は不明。

S K37 (第63図398~401)

398、399は無文有段口縁の壺形土器である。398は外傾、399は直立の口縁部をもつ。400はくぼみ底である。401は袋状の形をした鉢形土器である。外面に赤彩を施す。

S K38 (第63図402)

鉢形土器の完形品である。内湾して立ち上がり口縁端部は先細くなる。

P39 (第63図403)

無文の有段口縁壺である。口縁部は直立に立ち上がる。口縁下部にハケ状具による連続刻みを有する。

S X40 (第63図404)

有段口縁をもった壺形上器である。口縁下部にヘラ状具による連続刻みが見られる。

S K42 (第64図405~408)

405は無文有段口縁をもった壺形上器である。口縁部は内湾して立ち上がり口縁端部は水平に面取りする。焼成、色調はS K18の4体変と酷似する。406は擬円線を有する有段口縁壺である。口縁部は伸長でヨコナデによって若干外反ぎみとなる。407は器台形土器の完形品である。器受部はゆるく立ち上がり、口縁部はカーブを描いて内湾する。脚部は筒形をあまり伸長しない。裾部は無段脚で端部は直上に面取りする。透かし穴は4箇所。408は壺形の小型土器である。口縁部は379と同様形態が曖昧ではっきりしない。

S D43 (第64図409)

高环形土器の脚部にあたる。八の字状に開く。摩耗のため調整は不明。

P44 (第64図410)

S K21出土の373壺形土器と同タイプである。擬円線を有し外傾の口縁をもつ。内外面赤彩で飾る。

S K49 (第64図411~416 第65図417~419)

411~414は無文有段口縁の壺形土器である。411は口径19cm、412は口径21.6cmと大型の部類に入る。411の口縁部は短く直立に上がる。胴部は口縁部よりも大きく張り、中央部が最大径と思われる。内外面ともにハケ調整。412は器壁が厚く重厚なつくりである。口縁部は直上で外面は強いヨコナデにより中へこみになる。413は412の底部と考えられる。414は外傾で内湾して立ち上がる口縁部をもつ。415~418は壺形土器である。415、416は頸部の屈曲が強いタイプである。415の口縁部は短く外面の強いヨコナデによって外反する。内外面ともハケ調整で胴部最大径は中央部である。416の口縁部は直立に立ち上がる。口縁端部は指でつまんでヨコナデを施すため尖頭する。417の口縁部は新たに粘土組を取り付けて形成している。強いヨコナデによって外反し、口縁端部は先細りとなる。内外面ともハケ調整である。418は器壁が厚く長い口縁を有する。口縁部は外傾で外反する。胴部は大きく張り上半部が最大径となる。419は身の浅い高环形土器である。口縁部はほとんど外反しない。内外面とも赤彩されている。

S K50 (第65図420、421)

両者とも壺形土器である。420は擬円線が入る有段口縁である。全体に丁寧なつくりである。421は無文の有段口縁壺で口縁部は直立に立ち上がる。口縁外面は強いヨコナデで中へこみとなる。

S K52 (第65図422)

無文の有段口縁変形土器である。口縁部は長めで直立に上がり受け口状となる。口縁部内面にヘラ状具による連続刻みが入る。

S K54 (第65図423～427 第66図428～438 第67図439～446 第68図447～457)

423～438は変形土器である。423～427は擬凹線が入った有段口縁をもつもの。428～435は無文の有段口縁をもつものである。436、437はくの字口縁である。423は外側ハケ、内面ヘラケズリ調整である。口縁部は直立に立ち上がり、胴部は大きく膨らむ。424は器壁が薄く口縁部は外傾となる。口縫部内外面には指頭圧痕が連続して認められる。口縫端部はやや丸みをもっている。胴部最大径は上半部あまり膨らまない。弥生時代後期後半の指標となる月影式土器の系譜である。425、426も口縁部内面に指頭圧痕を有する。425の口縁部は仲長で直立に立ち上がり、426の口縁部は短く外傾である。口縫端部は両者とも尖頭する。427は厚みをもった口縁部で短く直立に立ち上がる。胴部はあまり張らず小型の器形と推定する。428は器壁が薄く口縁部は外傾となる。胴部は卵型で長い。429～433はいずれも口縁部が短い。429は直立に立ち上がり、外面はヨコナデにより中へこみとなる。430の口縁部は外傾。431は口縁下部に付加物がついて突出する。432は受け口口縁である。433は口縁下部にヘラ状具による連続刻みが入る。434は口縁部の形態が曖昧ではっきりしない。口縫部は内湾して立ち上がる。口縫端部は水平に面取りする。435は短い口縁部が直立に上がるタイプである。436は口縁部が仲長しないタイプである。口縫内面に1本の沈線が入る。胴部は球形に近い。437是有段に見えるが形態が曖昧なためくの字口縁にした。438は内湾して立ち上がる口縫部をもつ甕である。これも有段口縁とは言い難い。胴部は張らずそのまま直下する。肩部にハケ状具による連続刻みが入る。443を除く439～446は壺形土器である。439は筒形の口縫部を有する。胴部は球形になる。440も胴部は球形である。口縫部は外傾ぎみに立ち上がる。口縫端部は外側に向かって肥厚する。441は短頸の壺で大型の部類に入る。442是有段口縁をもつタイプである。口縫部は外傾で外反する。443はくぼみ底をもつ底部である。444是有段口縁で口縫部は短く立ち上がる。鉢形土器の可能性がある。445、446は口縫部が仲長する。446は外傾が著しい。447～451は高环形土器である。447は長く伸びた环底部から口縫部にかけて大きく立ち上がり外反する。胴部は筒形の無段脚で長く伸びない。448も环底部から口縫部にかけて大きく立ち上がる。ただし、口縫部は447よりも外反はしない。胴部は447とはほぼ同じタイプで縫部は直線に広がる。両者とも摩耗が激しく調整は不明である。449は环部にある。立ち上がり及び外反が著しい。口縫端部は外側に向かって面取りし肥厚する。450は丸みをもった环底部と仲長で外反しない口縫部で構成する。451はラッパ状に広がった無段脚である。透かし穴は4箇所で内1箇所は同じところで2回開けている。452～454は器台形土器である。452は直線に伸びる器受部と外反する口縫部とが合致した器形である。口縫部は外傾で外面に1本の沈線が入る。脚部はラッパ形の無段脚である。据端部は直上面取りする。453は鼓型をした器形をもつ。454は器壁が厚く膨らみをもった脚部である。455は内湾して立ち上がる鉢形土器である。456、457は小型土器である。

S K56 (第69図458、459)

458是有段口縁変形土器である。口縫部は外傾で擬凹線をもち外面は強いヨコナデによって外反する。459は底部にあたる。外面はミガキ調整で壺形土器と推定する。

S K58 (第69図460～467)

460、461は無文有段口縁の変形土器である。460は短い口縫部に強めのヨコナデを行う。461の口縫部は内湾ぎみに立ち上がり、口縫端部は水平に面取りする。462は長い頸部をもった壺形土器である。口縫は短く立ち上がり口縫端部は水平に面取りする。口縫部には赤彩を施している。463は脚部にあたる。直線上に大きく広がり、内外面ハケ調整する。464は高环形土器である。脚部は棒状と思われる。465は高环形土器の脚部で重厚なつくりをもつ。466、467は鉢形土器である。466は小型で内湾して立ち上がる。胴部外面上半部でミガキ調整の方向が変わる。口縫部は内傾する。底部は欠損するが脚台部が付くと推定する。467是有段口縫をもつ。口縫部は内湾して立

ち上がり、口縁端部は水平に面取りする。

S K59 (第69図468、469)

468は身の深い高环形土器である。环底部は長く直線に上がり、口縁部は短く外反する。

P 60 (第69図470)

無文口縁の壺形土器である。口縁部は内側に傾き口縁下部に突帯がつく。口縁端部は水平に面取りする。

S X61 (第69図471)

頸部の短い壺形土器である。口縁部は外傾に傾く。

S X62 (第69図472)

算盤玉状に張り出す胴部をもった壺形土器である。胴部張り出しに突帯がつきその下部にはハケ状具による連續刻みが入る。

S K63 (第69図473)

無文有段口縁の壺形土器である。口縁部は短く、胴部は張らない。

S K64 (第70図474)

有段口縁をもった壺形土器の完形品である。口縁部は外傾で無文。胴部よりも口頸部の方が発達している。底部はくぼみ底である。外面調整はハケで底部はヘラケズリである。内面調整は胴中央部から上半はナデ、下半はヘラケズリとなる。

S D65 (第70図475～477)

475は有段口縁をもった壺形土器である。口縁部外面に5本の擬凹線を有する。476は口頸部の長い壺形土器になる。口縁は弱い外反を見せ口縁端部は丸まる。477は器台形土器の脚部である。八の字状に大きく開くタイプである。器壁は厚く重厚なつくりである。

A区包含層 (第70図478～492)

478是有段口縁の壺形土器である。口縁部は直立に立ち上がり口縁下部には突帯がつく。外面はきめ細かい擬凹線を施し内面は棒状具による圧痕が上下2段に分けて押す。肩部には波状文が入る。479は無文の有段口縁壺である。口縁部は直線上に外傾する。480は口頸部の形態がはっきりしない壺形土器である。口縁端部は面取りせず尖頭する。内外面ともにハケ調整である。481は壺形土器の口縁部である。口縁部は短く内湾ぎみに立ち上がりが肥厚する。口縁端部は内側に向かって面取りする。482は壺形土器の口頸部にあたる。頸部はやや短めで屈曲度が強い。口縁部は外側に向けて面取りし下部は突出する。483、484は鉢形土器である。483是有段口縁と思われるが形態が曖昧ではっきりしない。口縁部は内湾して立ち上がる。外面胴部にモミ痕のような跡が見える。484は底部が広く胴部は丸みがある。口縁部は伸長で外傾である。485は高环形土器の脚部である。筒型をした無段脚である。486～490は底部である。486、489、490はくぼみ底である。491は台付き土器の底部である。外傾で伸長しない。492は不明である。器形は尖頭型で、外面はミガキ調整で剝離した面からはハケ調整がみられる。

B区包含層 (第71図493～500)

493～498まで壺形土器である。493は擬凹線の入った有段口縁壺である。口縁部は伸長で真っすぐに立ち上がる。494～496は無文有段口縁壺である。口縁部はいずれも内傾で短い。497、498はくの字口縁の壺形土器である。497は口縁部が内湾して立ち上がる。器壁は薄い。498は口縁端部が肥厚をもつ袋内布留式土器にあたる。499は高环形土器の脚部である。外面に赤彩を施す。500は底部である。

C区包含層 (第71図501～505)

501は頸部の長い壺形土器である。口縁部は外傾で口縁端部は丸くおさめる。502は頸部が短く屈曲する壺形土器である。口縁部は伸長しない。全体に重量感をもつ。503は底部穿孔の上器である。摩耗のため調整は不明。504は小型高环の环部にあたる。口縁部は大きく立ち上がり外反する。505は高环形土器の脚部である。棒状でやや

膨らみをもつ。裾部は有段で段には縦凹線が見られる。外面に赤彩を施す。

排土（第71図506～514）

506～508までは無文の有段口縁甕で、口縁部はいずれも外領である。509はくの字口縁の壺形土器である。口縁部は伸長せず器壁は厚みをもつ。510は頸部の短い壺形土器である。口縁部は外反し口縁端部は丸くおさめる。511～514は底部である。512はくぼみ底で、514は脚台部がつく。

第2項 弥生時代中期以前の土器（第72図515～523）

515、516は底部である。515は無文の組成深鉢形土器である。出土地点、時期は不明。516は条痕文の深鉢形土器である。縄文晩期後半と考えられる。517は深鉢形土器の口縁部にあたる。縄文後期と推定する。518は縄文晩期の条痕文深鉢形土器である。519は縄文後期の深鉢形土器。520は縦線間に押引列点文を施す縄文晩期後半、下野式の深鉢形土器である。521は横位弦線をもつ深鉢形土器で、縄文後期の所産か。522は柴山出村期の壺形土器である。胎土に海綿骨針を見ることができる。523も柴山出村期で壺形土器である。口縁部を肥厚させて押出す。522、523はS K 46からの出土である。

第3項 スタンプ文土器（第72図524、525）

両者ともS字状溝文。沈線が単独で渦の中心へ巻き込むタイプと想定される。

第4項 奈良・平安時代の土器（第72図526～533）

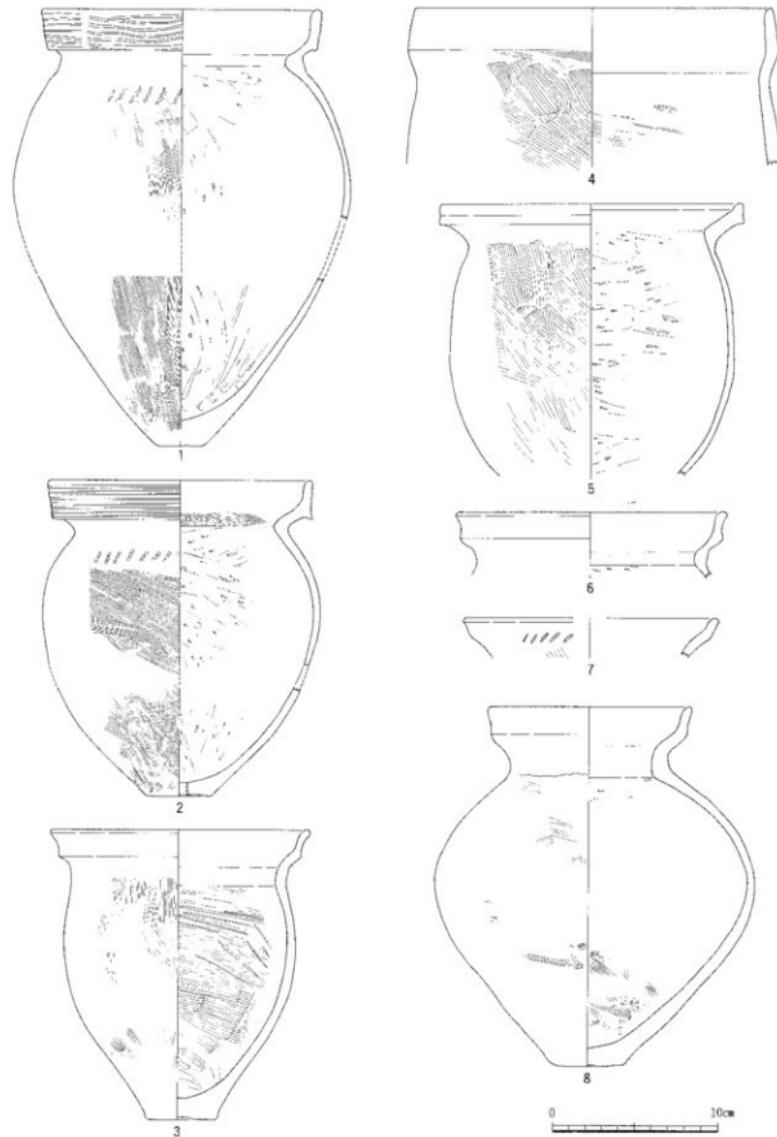
526～533全て須恵器である。526は杯である。内面底部に使用痕が認められる。金沢市末塗の製品で9世紀後半と推定する。527～529も杯である。528、529は底部に段をもつ。いずれも河北郡高松町の所産で9世紀後半である。530も杯で高松産である。時期は9世紀と考えられるが断定できない。531は高松産の皿で、使用痕が認められる。時期は9世紀後半である。532も使用痕のある皿である。時期、産地は不明である。533は蓋で上部は欠損する。時期は9世紀後半で高松産である。

第2節 石 器（第73図1～12、第74図13～29）

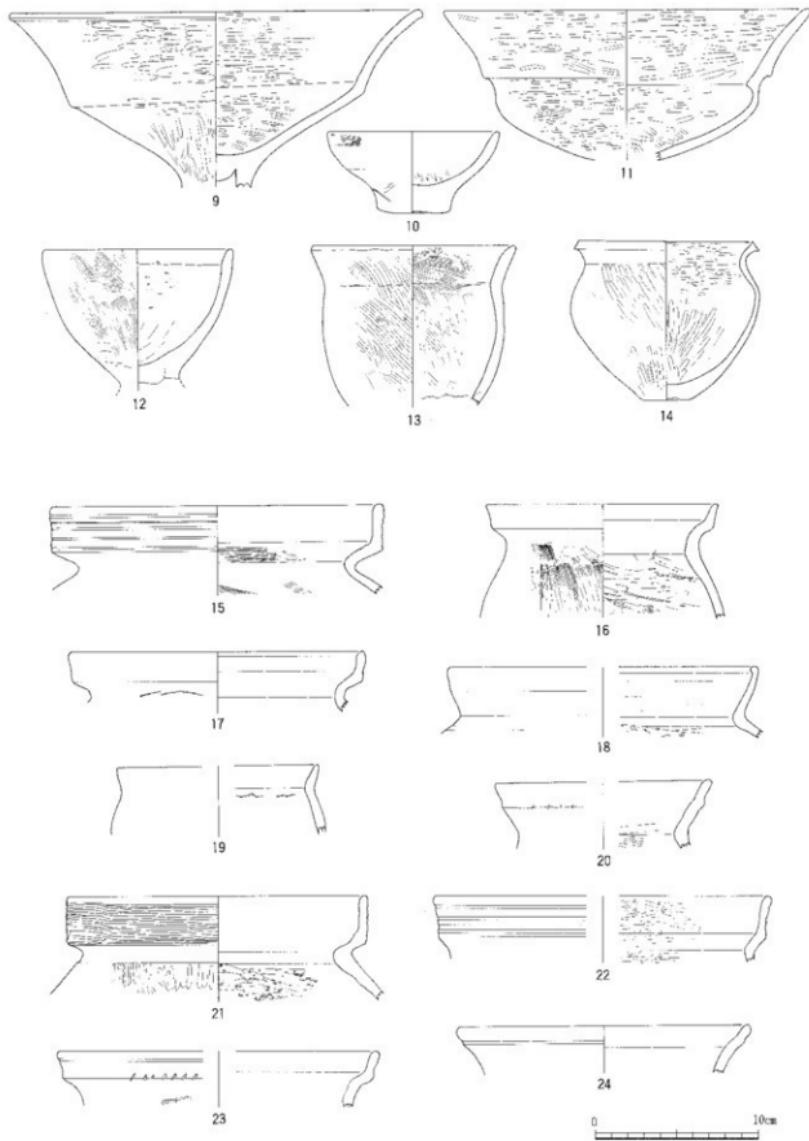
1～11は打製石斧である。1は短匣型である。長さ14.9cm、幅7.1cm、厚さ3.3cm、重さ515gを測る。石質は安山岩である。SK 7から出土した。2は盤型で、未使用の可能性がある。長さ15.7cm、幅8.7cm、厚さ3.1cm、重さ462g。石質は安山岩質火山礫凝灰岩。SK 55から見つかった。3も盤型で未使用の可能性をもつ。長さ18.5cm、幅10.4cm、厚さ3.5cm、重さ684g。石質は火山礫凝灰岩。4は弾丸のような形をする。長さ14.7cm、幅7.5cm、厚さ3.2cm、重さ346g。石質は安山岩である。5はやや小さめで一部欠損する。長さ10.9cm、幅7cm、厚さ2.3cm、重さ216g。石質は安山岩質火山礫凝灰岩。6は半分欠損する。長さ11.8cm、幅8.7cm、厚さ2.6cm、重さ300g。石質は安山岩質火山礫凝灰岩。7は3と同等の大きさをもつ。半分欠損する。長さ12.2cm、幅9.5cm、厚さ2.6cm、重さ409g。石質は安山岩である。調査区中央の鞍部から出土する。8も半分欠損する。長さ10.8cm、幅8.4cm、厚さ1.9cm、重さ230g。石質は石英安山岩である。9は盤型と考えられる。半分欠損する。長さ9.0cm、幅7.1cm、厚さ1.9cm、重さ150.8g。石質は安山岩質火山礫凝灰岩。SK 6からの出土である。10は小型の破損品。長さ8.9cm、幅5.8cm、厚さ2.4cm、重さ178g。石質は火山礫凝灰岩。11は大型の破損品である。SK 3から出土する。長さ10.2cm、幅9.6cm、厚さ2.2cm、重さ250g。石質は安山岩質火山礫凝灰岩。12～16は母岩を利用した砥石である。12は10号堅穴からの出土である。重さ1.07kg。石質は安山岩と思われる。13は2号堅穴から研ぎ面は全面使用である。重さ2.04kg。石質は細粒砂岩である。14は3号堅穴からの出土である。偏平な形をし、全体を研ぎ面に使っていている。重さ2.9kg。石質は細粒砂岩である。15は12号堅穴からの出土である。重さ775g。石質は細粒砂岩。16は三角形をした破損品で、1号堅穴からの出土である。重さ300g。石質は細粒砂岩で金雲母が目立つ。17、19、20、21も砥石である。石質は21を除いて珪岩と推定する。17は真ん中に深いラインが入る。

周囲には研いた傷痕が多数残る。S D43からの出土で重さは140g。19は方形した破損品で、12号堅穴から出土したものである。重さ115g。20は台形状した破損品である。S K54からの出土である。重さ42g。21は8号堅穴付近で見つかったもので、重さ136g。研いた傷痕が多く残る。流紋岩と考えられる。18はたたき石になる。全面にススが付着し火を受けたと思われる。剥離が著しい。重さ1.49kg。石質は安山岩である。22～25は緑色珪質凝灰岩である。22は3号堅穴からで重さ40g。23は13号堅穴からで重さ0.5g。24は12号堅穴からで重さ0.4g。25も12号堅穴からで重さ5g。玉製品の原石と考えられる。26は16号堅穴から出土する。研いた跡が見れるが用途不明である。石質は流紋岩か。27は翡翠製の勾玉である。長さ0.9cm、幅0.6cm、厚さ0.3cm、重さ0.2gと非常に小さい。真ん中には穿孔する。28と29は管玉の未製品である。両者とも緑色珪質凝灰岩。28は長さ1.4cm、幅0.7cm、厚さ0.5cm、重さ0.55g。1号堅穴からの出土である。29は長さ0.8cm、幅0.5cm、厚さ0.5cm、重さ0.3g。3号堅穴から出土する。

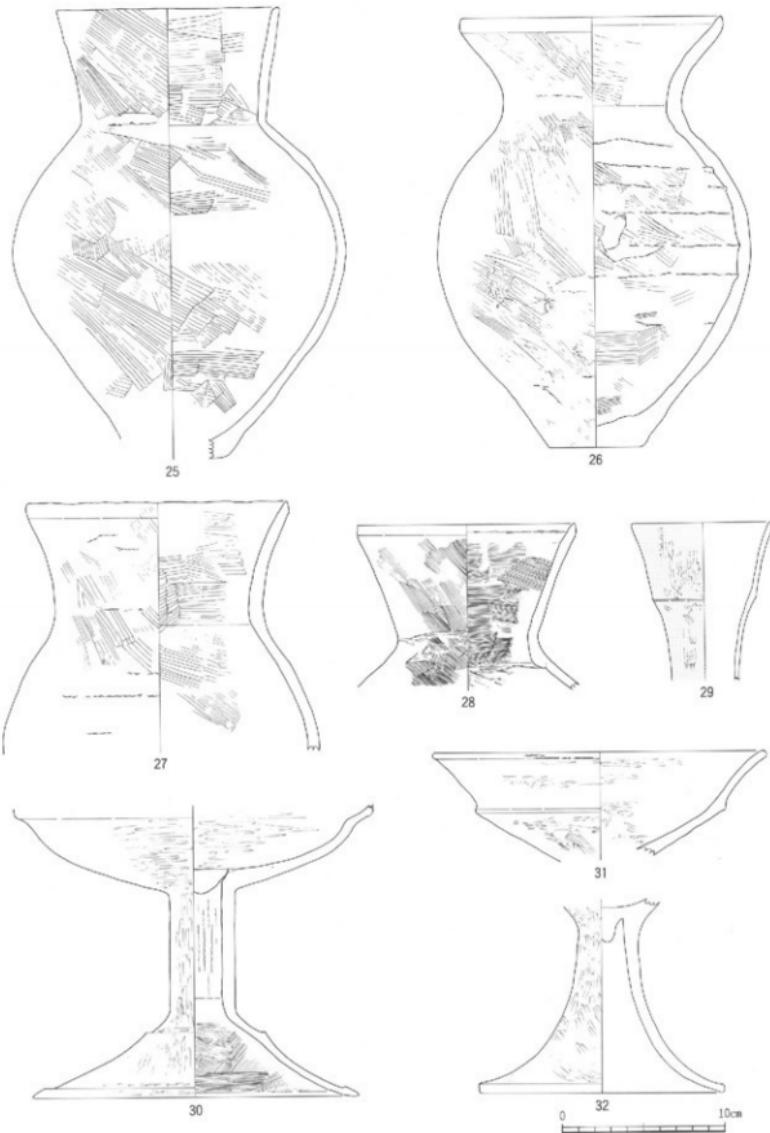
堅穴住居跡から見つかった緑色珪質凝灰岩はチップを含めて30点近くに上り、各堅穴から複数発見されている。13号堅穴は23の1点しか出でていないため、流れ込みによるものと考える。なお、本報告では代表的なものだけ掲載した。



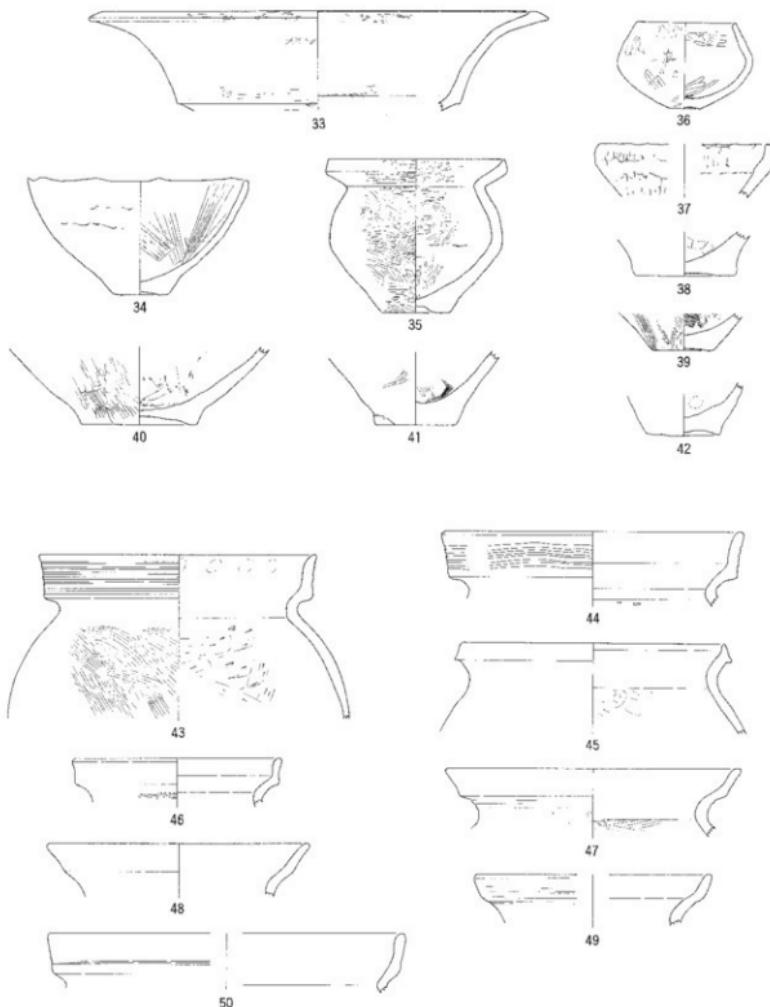
第38图 1号墓穴出土器



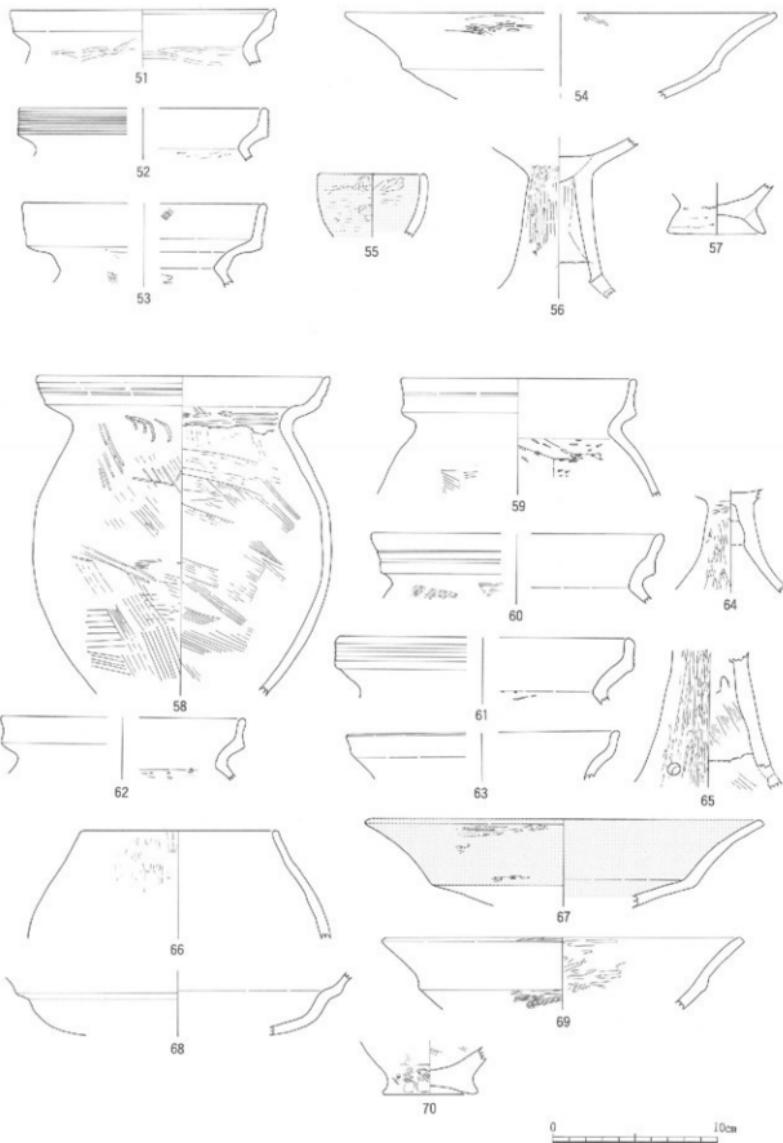
第39図 1号窓穴（9～14）、2号窓穴（15～24）出土土器



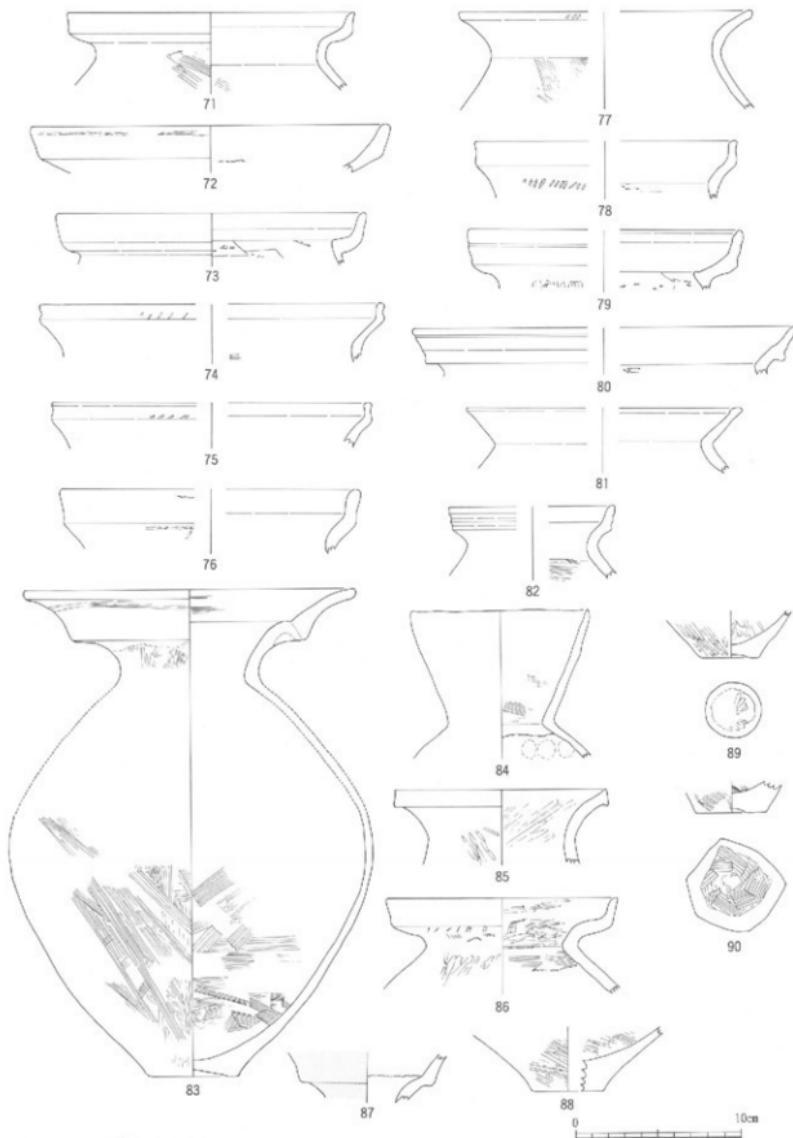
第40図 2号竪穴出土土器



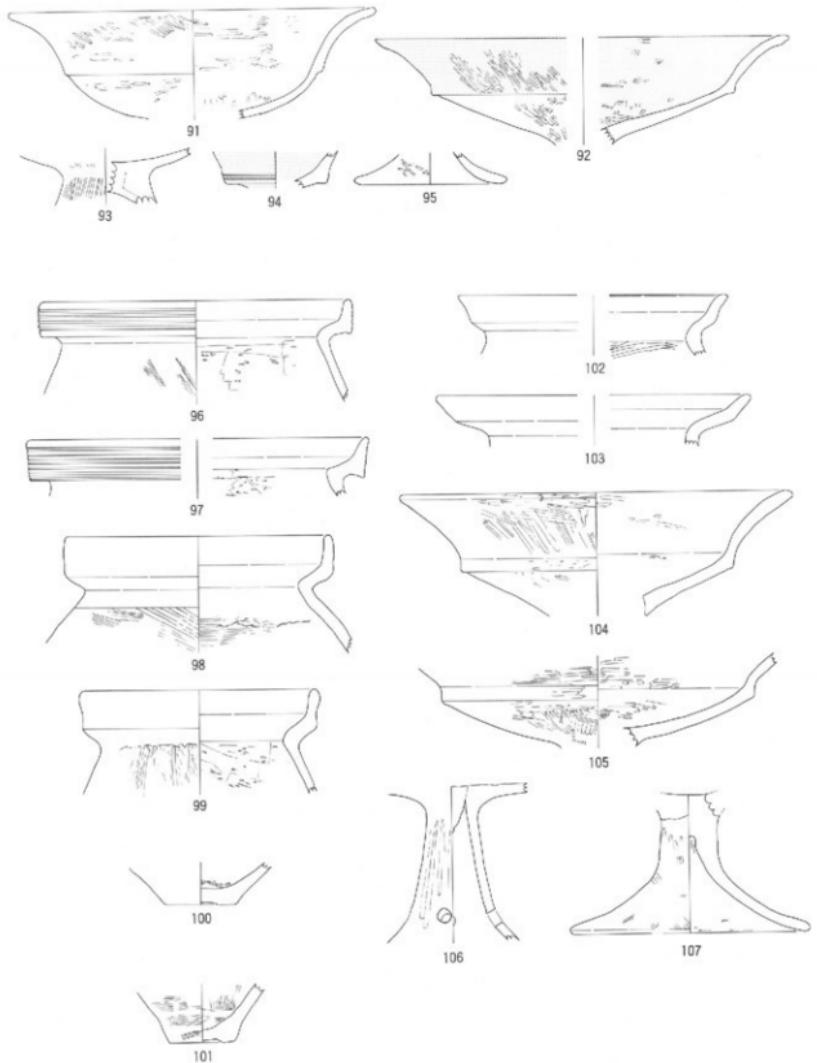
第41圖 2號竖穴（33~42）、3號竖穴（43~50）出土土器



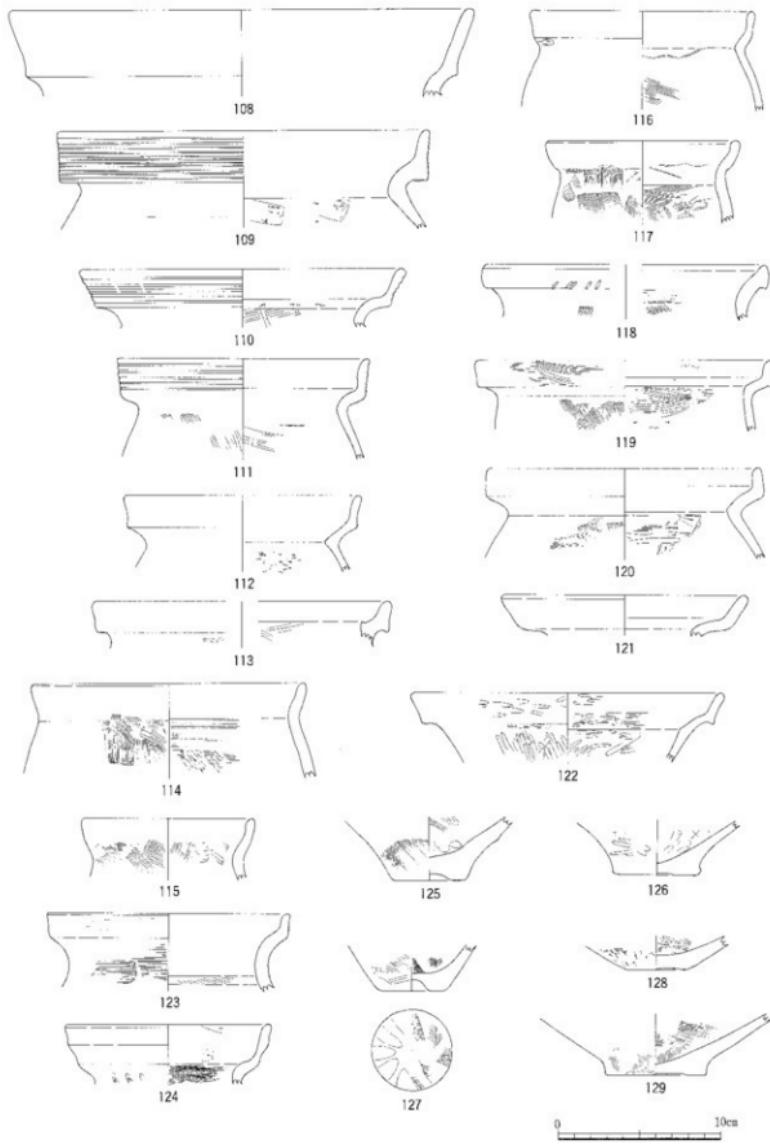
第42図 4号竪穴(51~57)、5号竪穴(58~70)出土土器



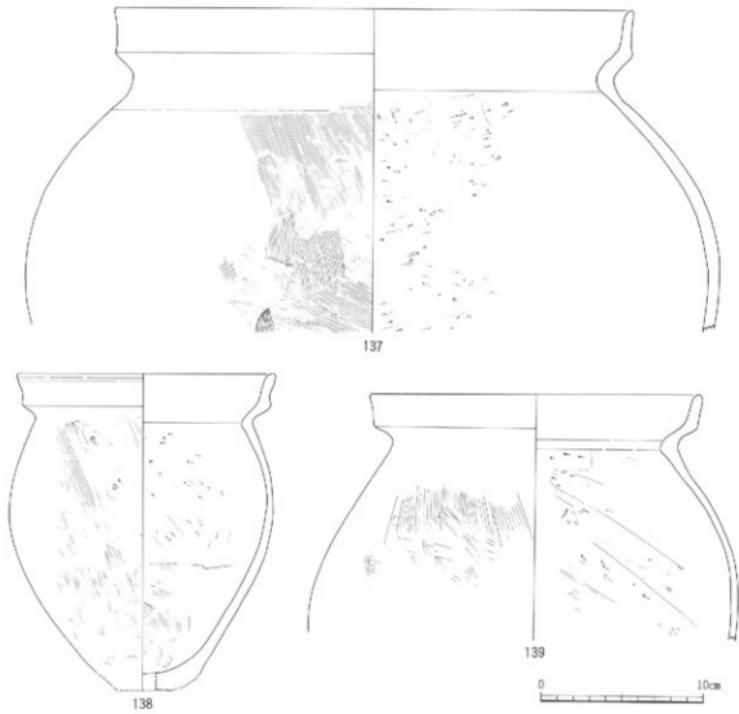
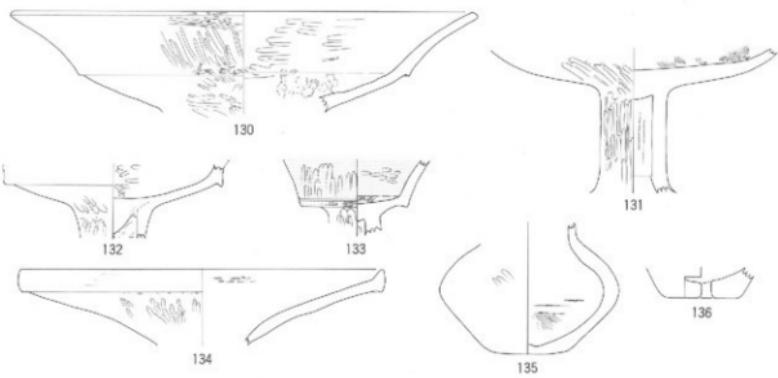
第43圖 6號竖穴出土土器



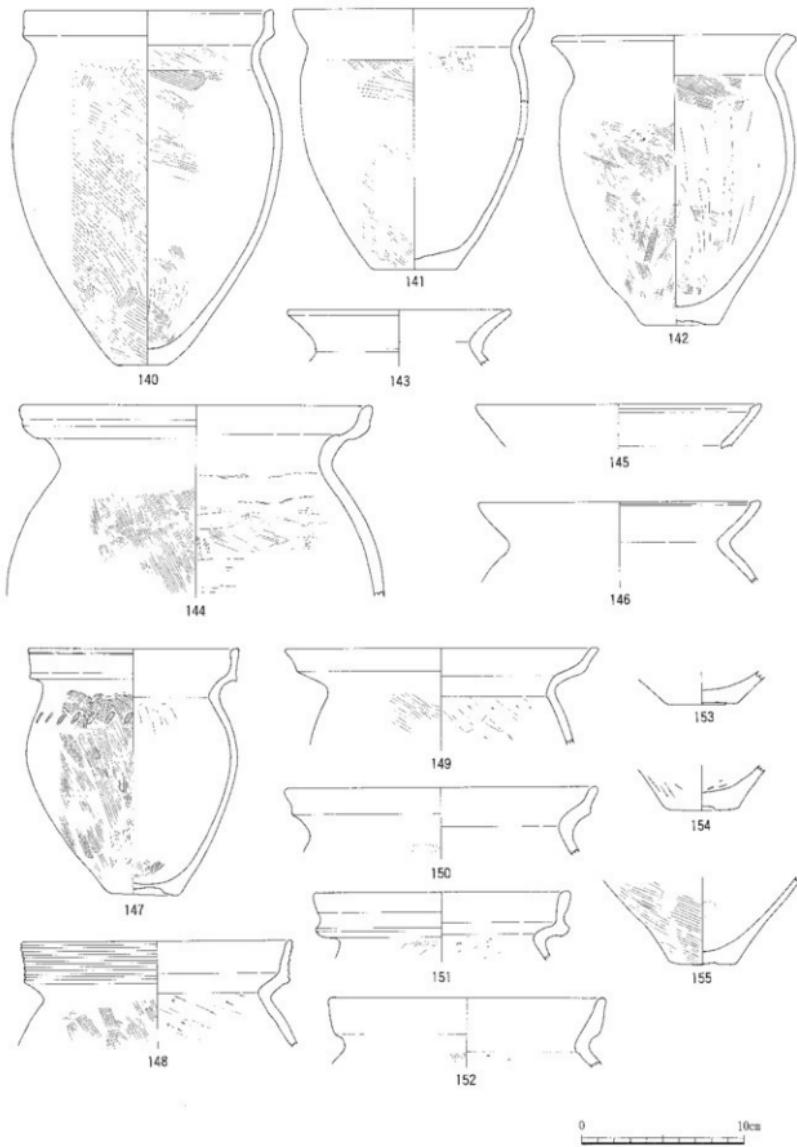
第44図 6号竪穴(91~95)、7号竪穴(96~107)出土土器



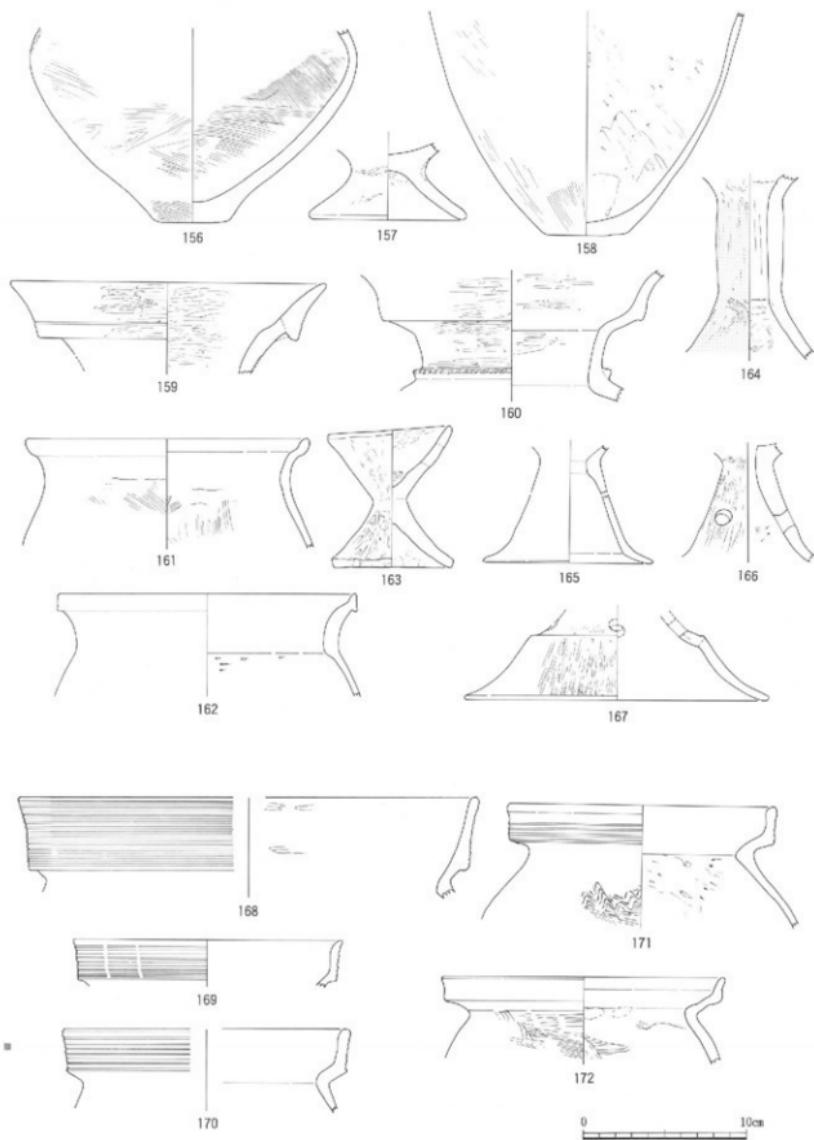
第45図 8号竪穴出土土器



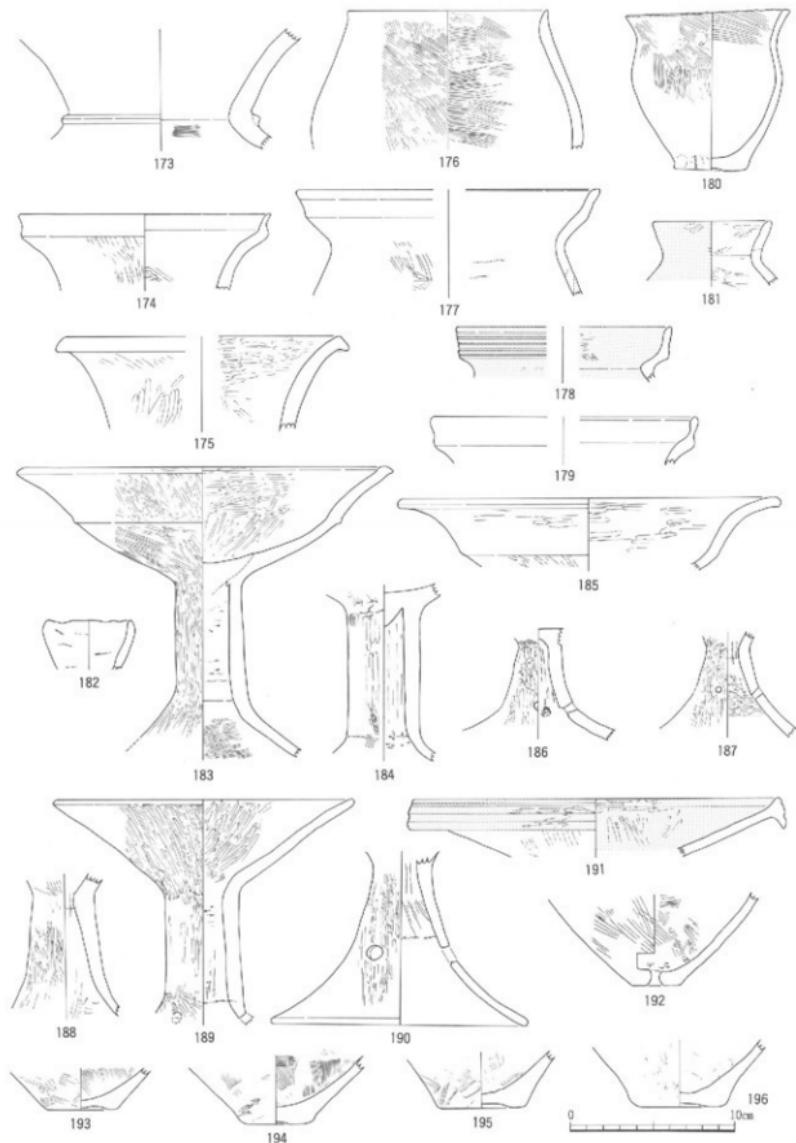
第46圖 8號堅穴（130～136）、10號堅穴（137～139）出土土器



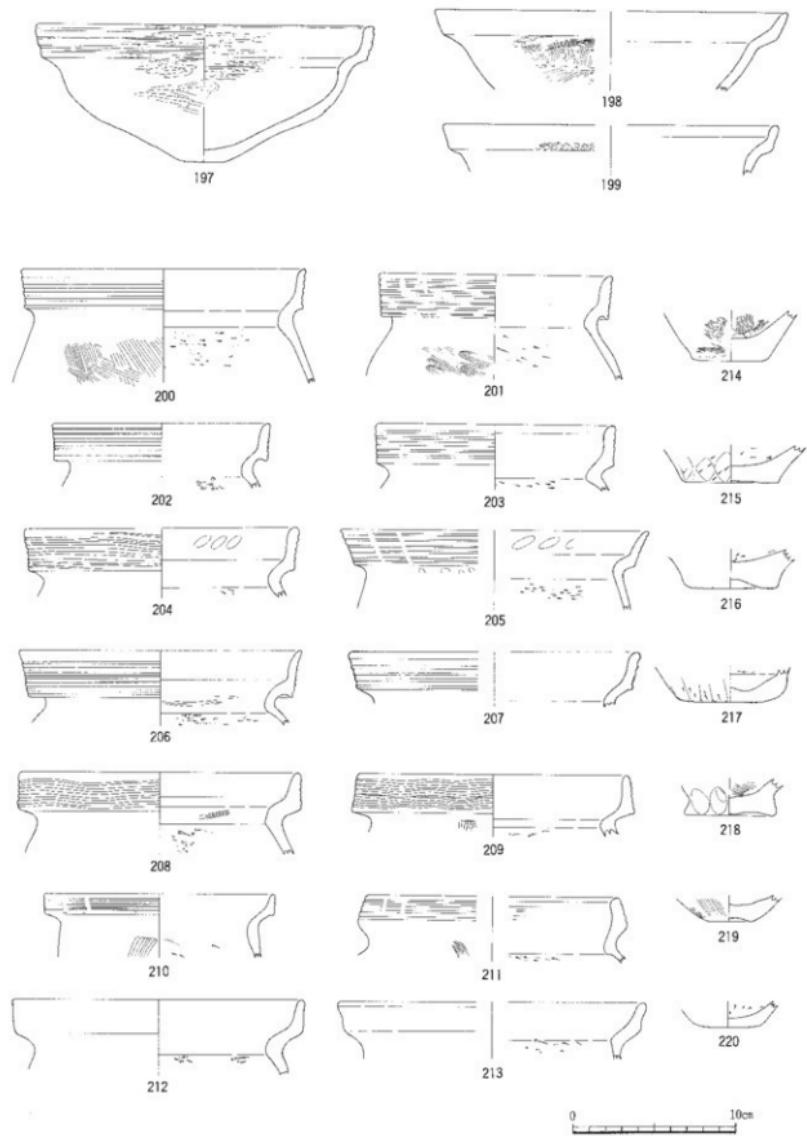
第47図 10号堅穴出土土器



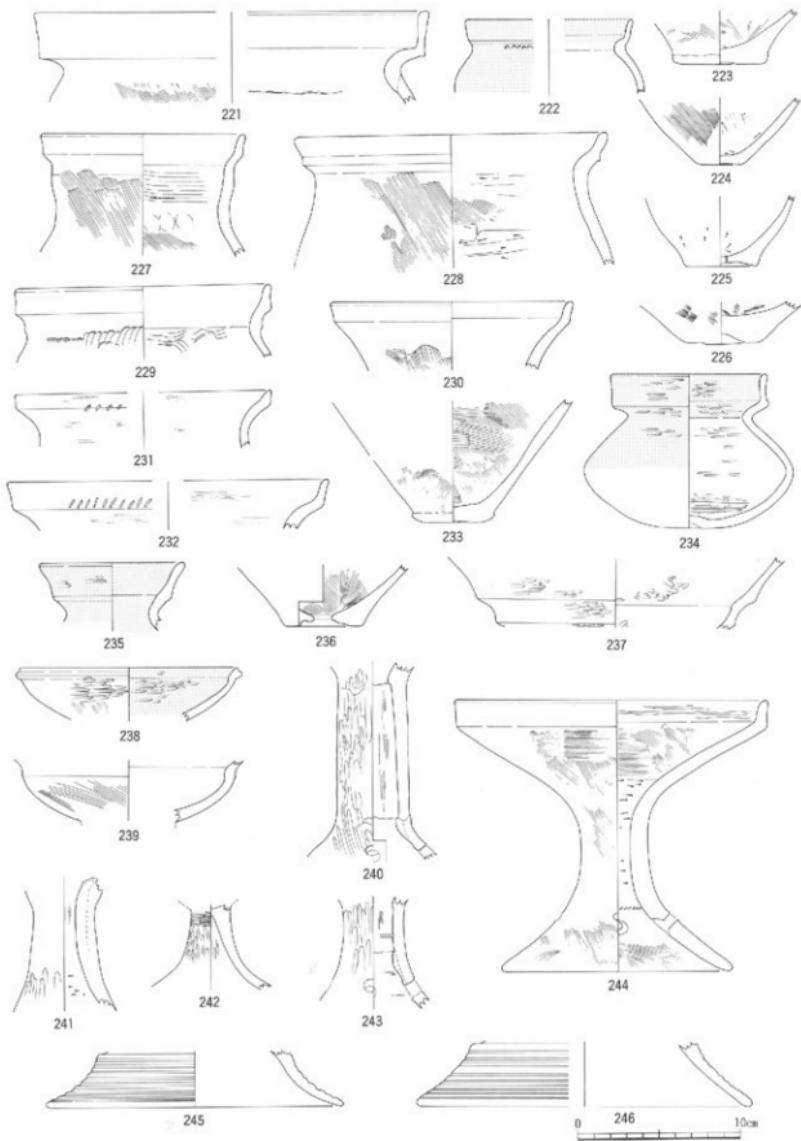
第48図 10号堅穴（156～167）、11号堅穴（168～172）出土土器



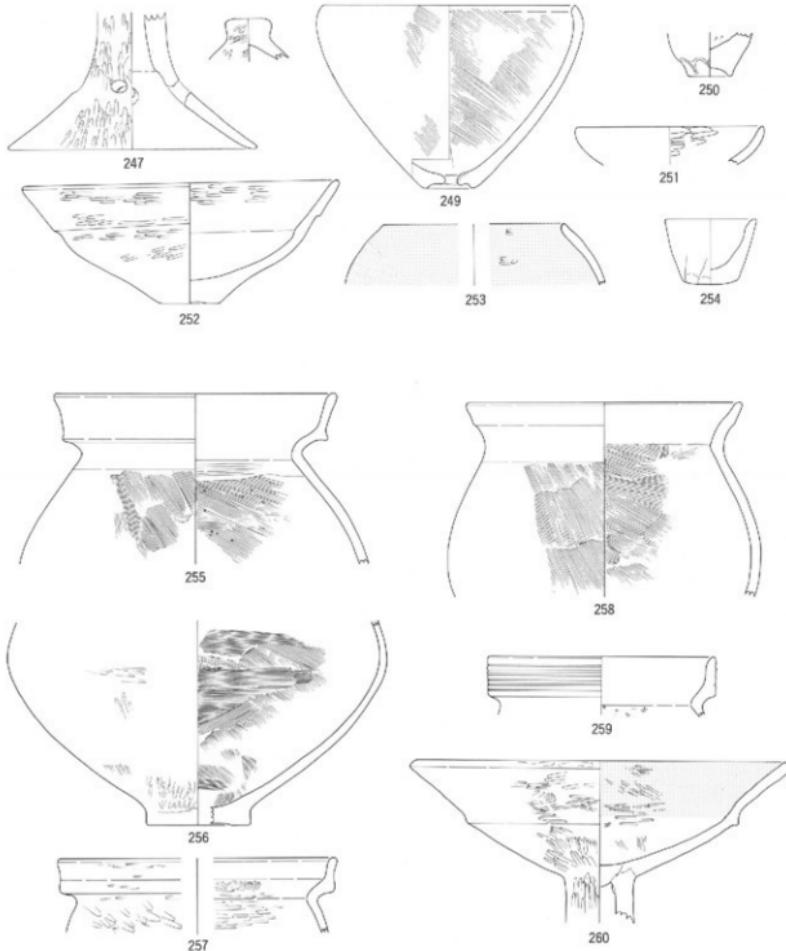
第49図 11号墳出土土器



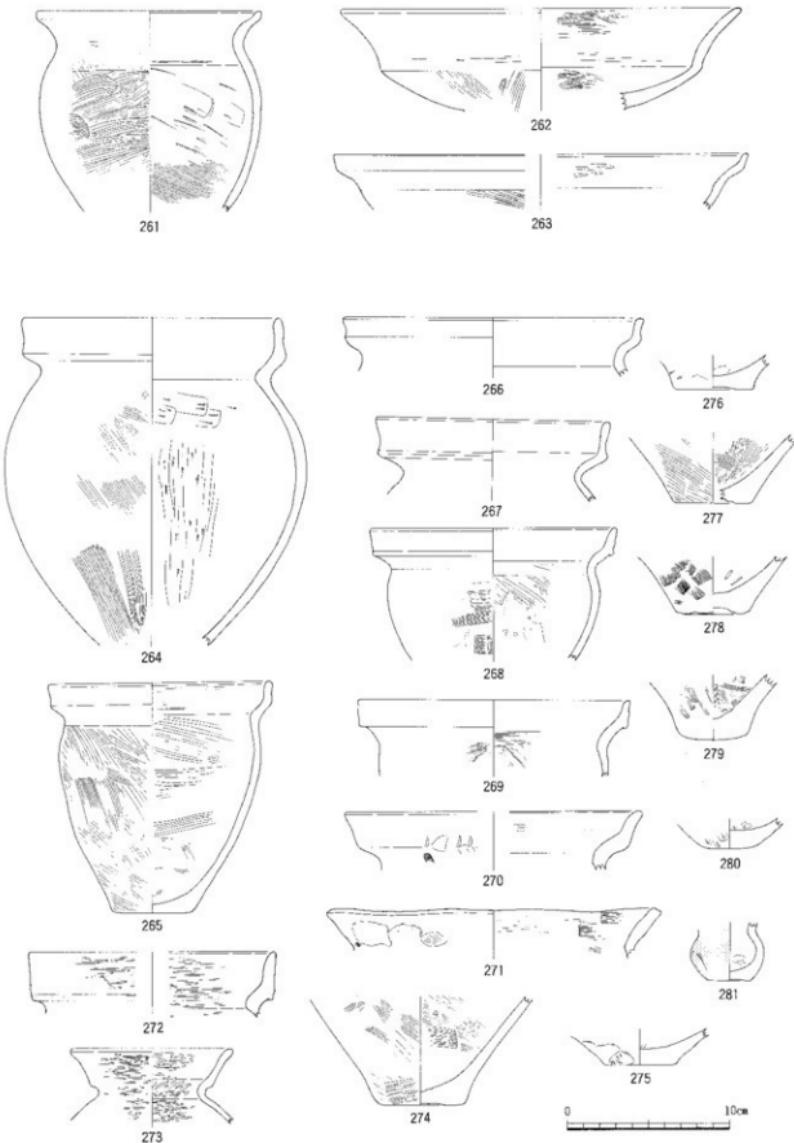
第50図 11号竖穴（197～199）、12号竖穴（200～220）出土土器



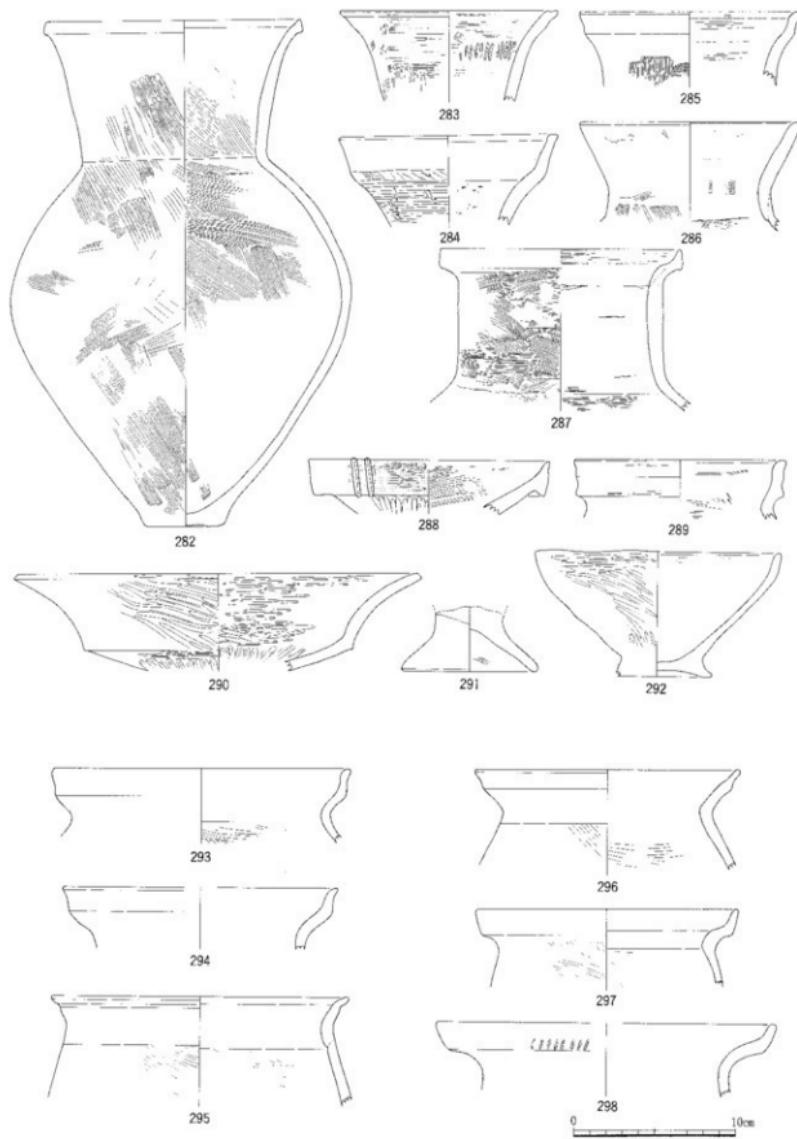
第51图 12号竖穴出土土器



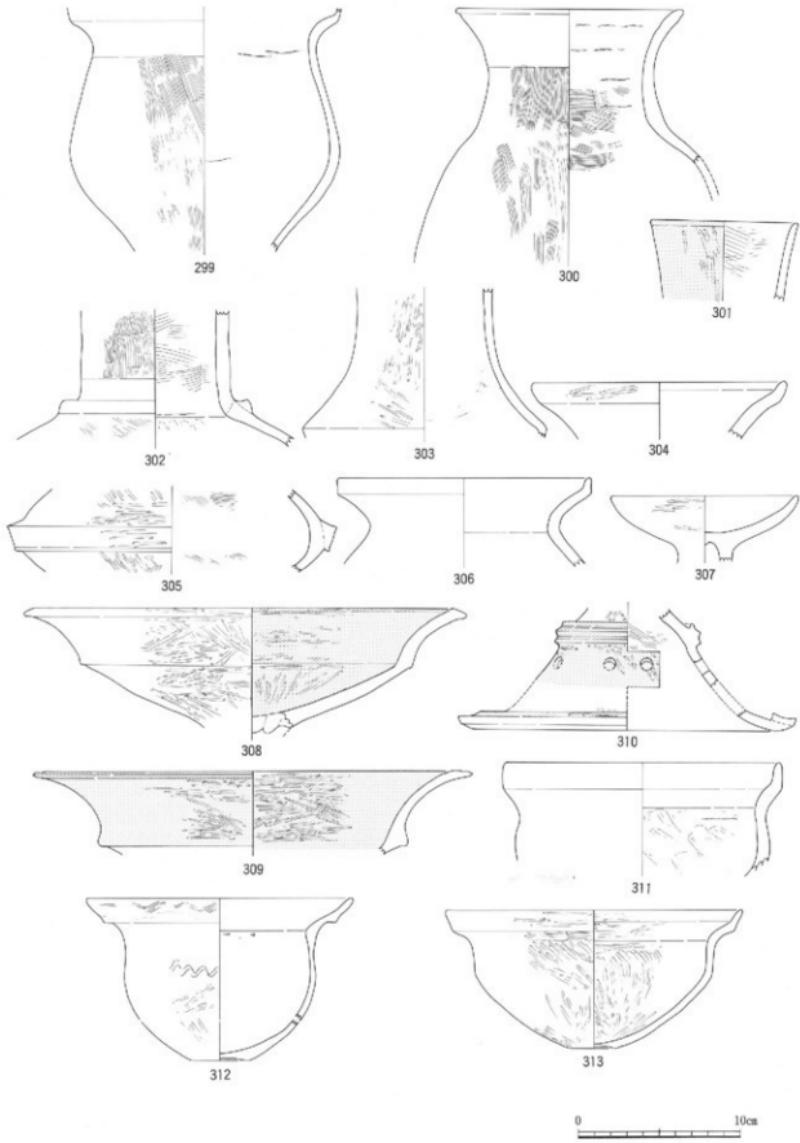
第52圖 12号堅穴（247～254）、13号堅穴（255～260）出土土器



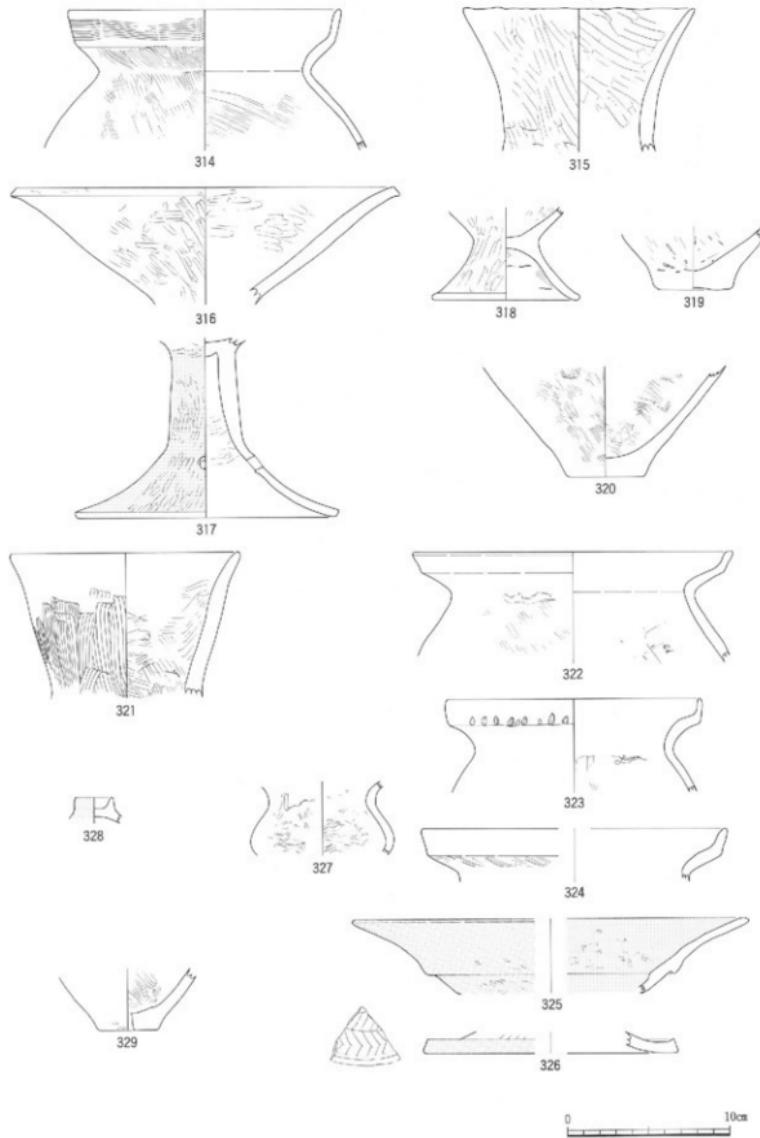
第53図 14号堅穴（261～263）、15号堅穴（264～281）出土土器



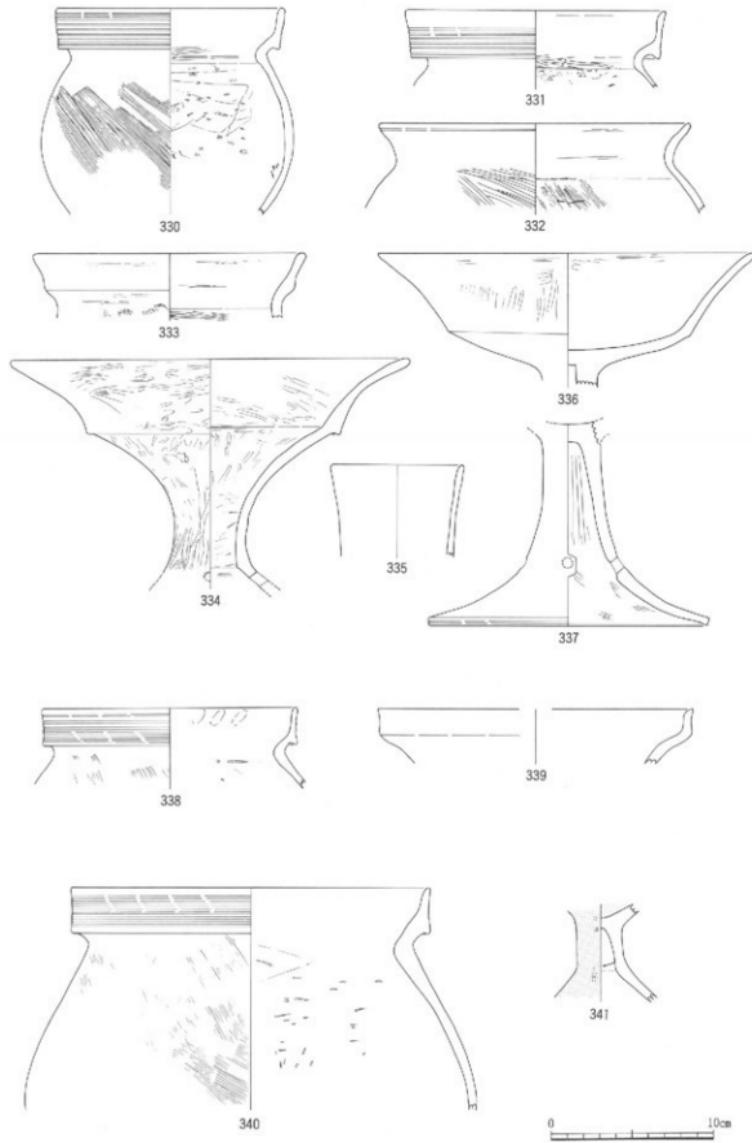
第54圖 15号堅穴（282～292）、16号堅穴（293～298）出土上器



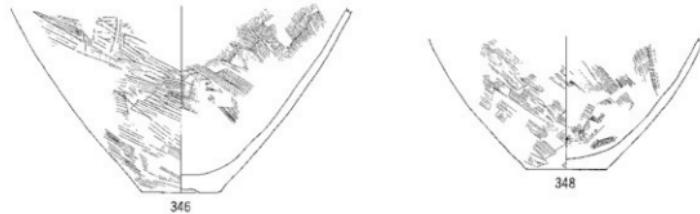
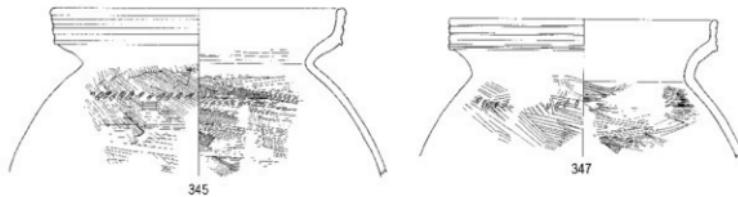
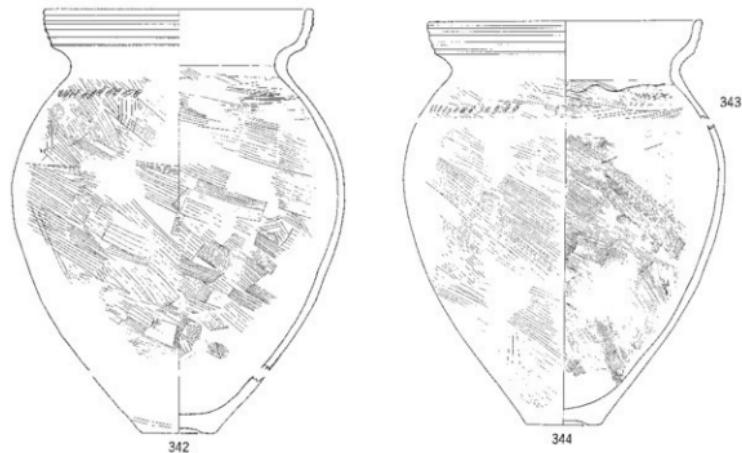
第55図 16号竖穴出土土器



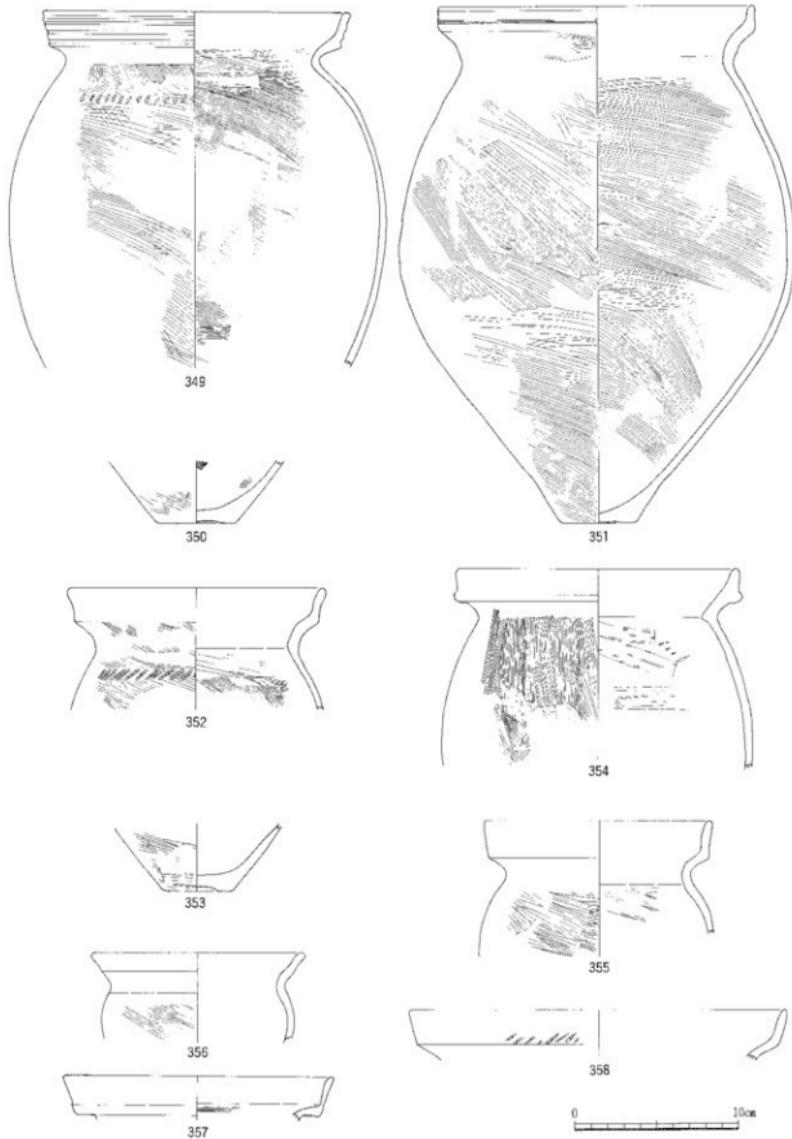
第56図 SK 1 (314~320)、SK 4 (321)、SK 8 (322~327)、SK 11 (328)、SK 14 (329)
出土土器



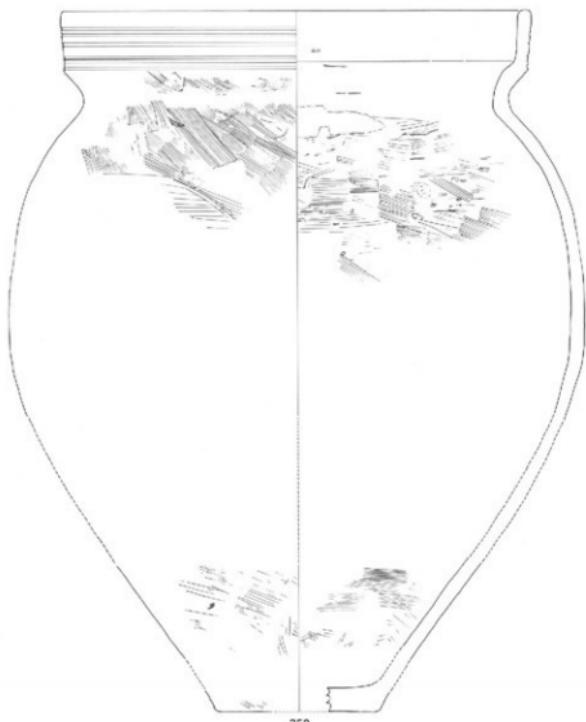
第57圖 SK15 (330~337)、SK16 (338, 339)、SK17 (340, 341) 出土土器



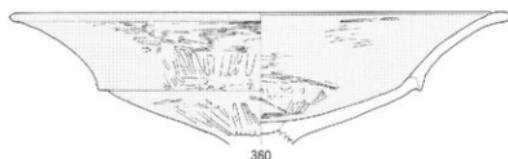
第58図 S K18出土土器



第59図 SK18出土土器



359



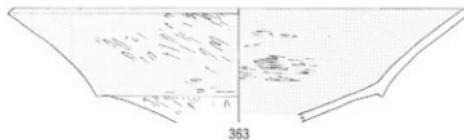
360



361



第60図 SK18出土土器



363



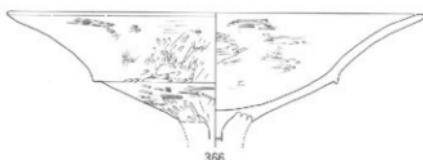
364



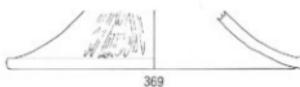
365



368



366



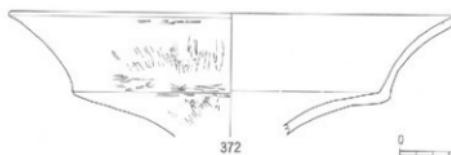
369



370



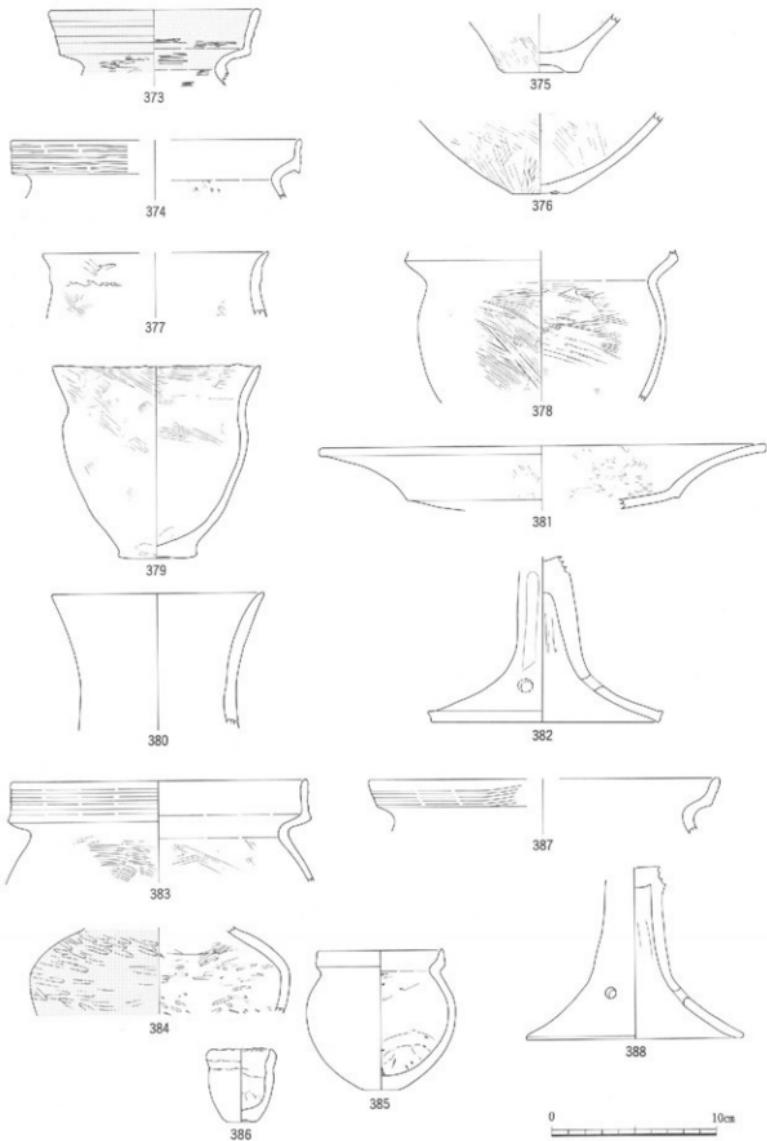
371



372



第61図 SK18出土土器



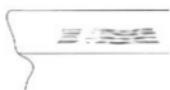
第62図 S K21 (373)、S D25 (374)、P 26 (375,376)、S K27 (377)、S K28 (378~382)、
S D29 (383~386)、S K30 (387, 388) 出土土器



389



390



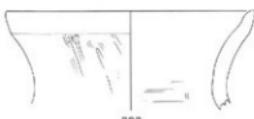
391



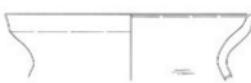
392



内面



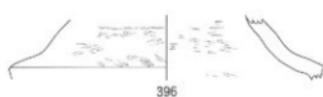
393



394



395



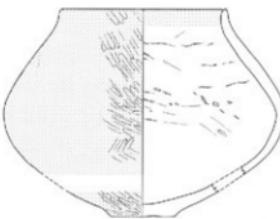
396



397



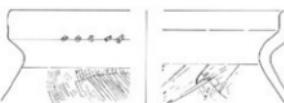
398



401



400



403



402



404

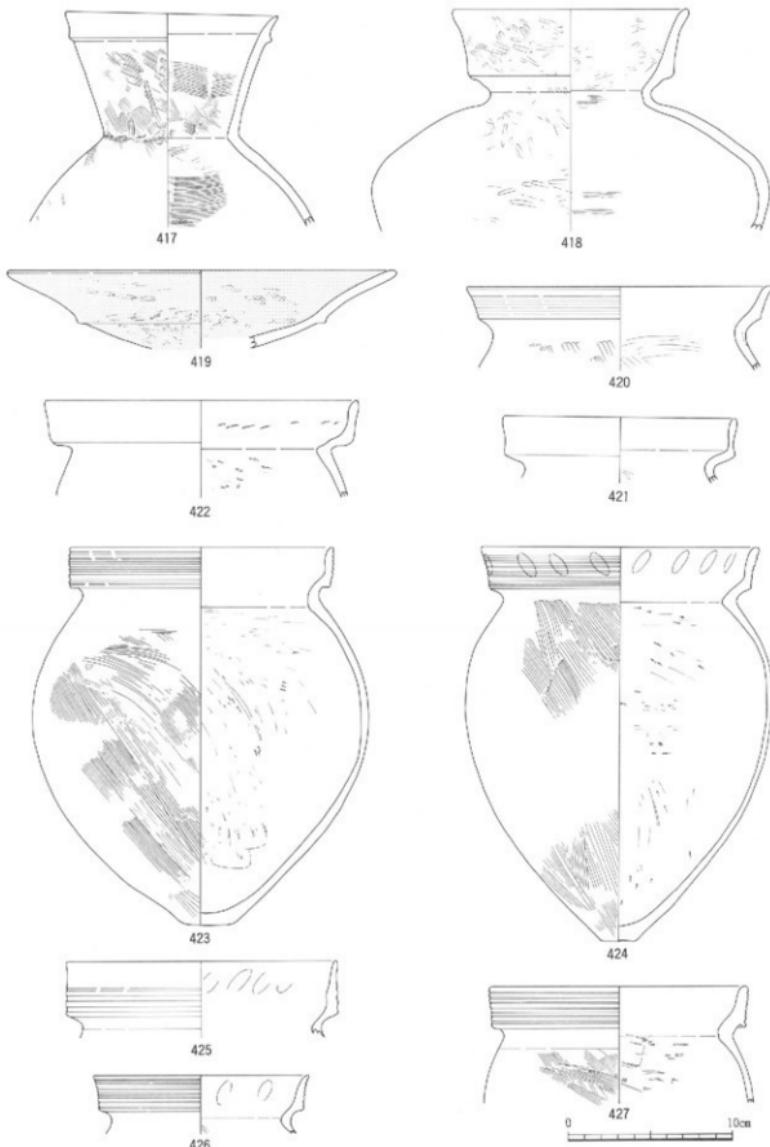
0

10cm

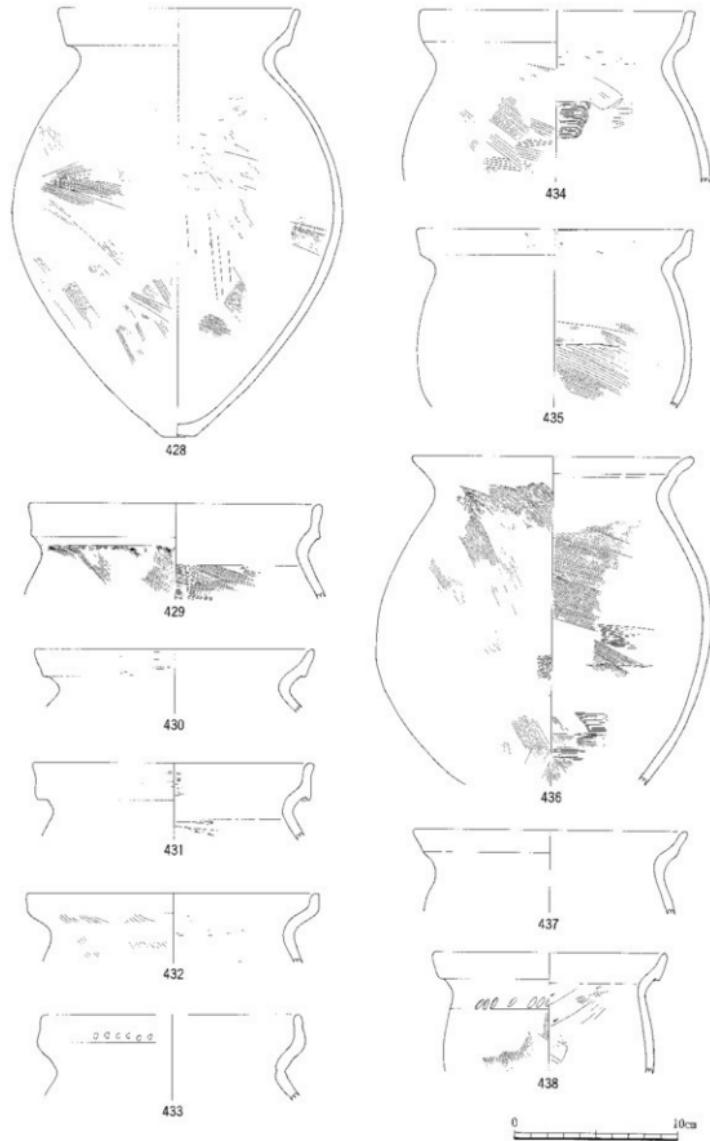
第63图 P31 (389)、S K32 (390)、S K33 (391、392)、S K34 (393~395)、P35 (396)、S D36 (397)、
S K37 (398~401)、S K38 (402)、P39 (403)、S K40 (404) 出土土器



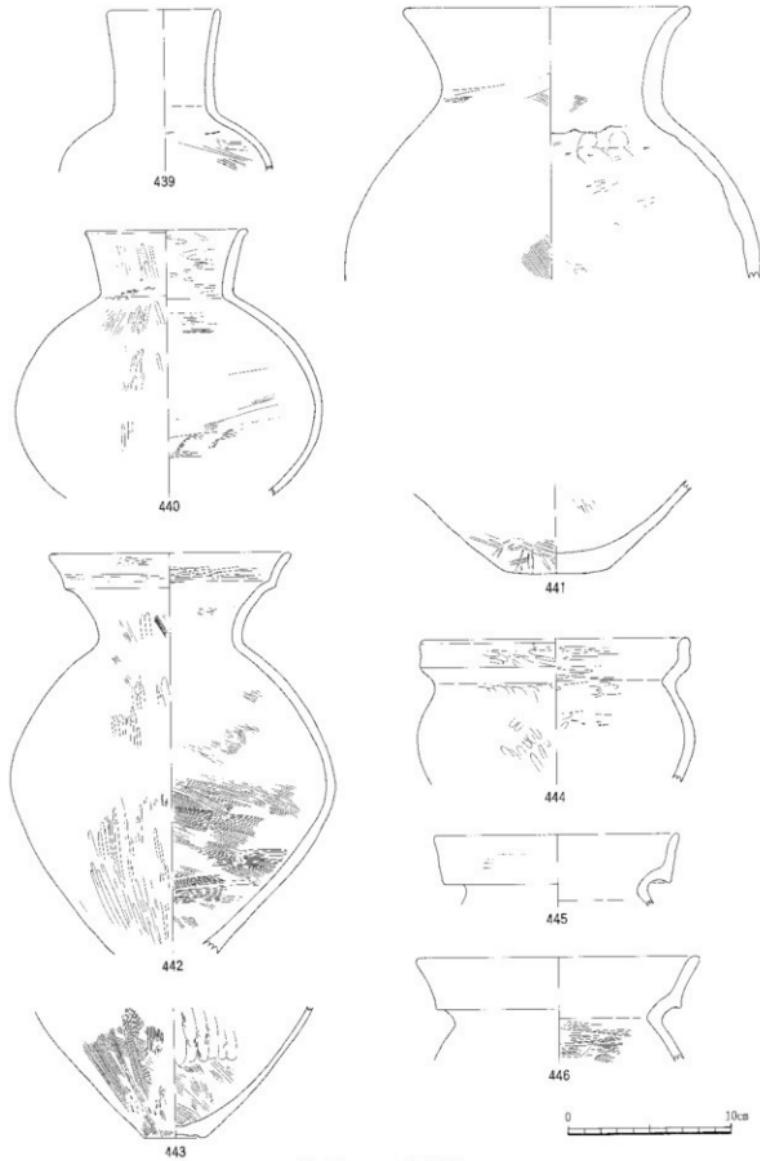
第64図 SK42 (405~408)、SD43 (409)、P44 (410)、SK49 (411~416) 出土土器



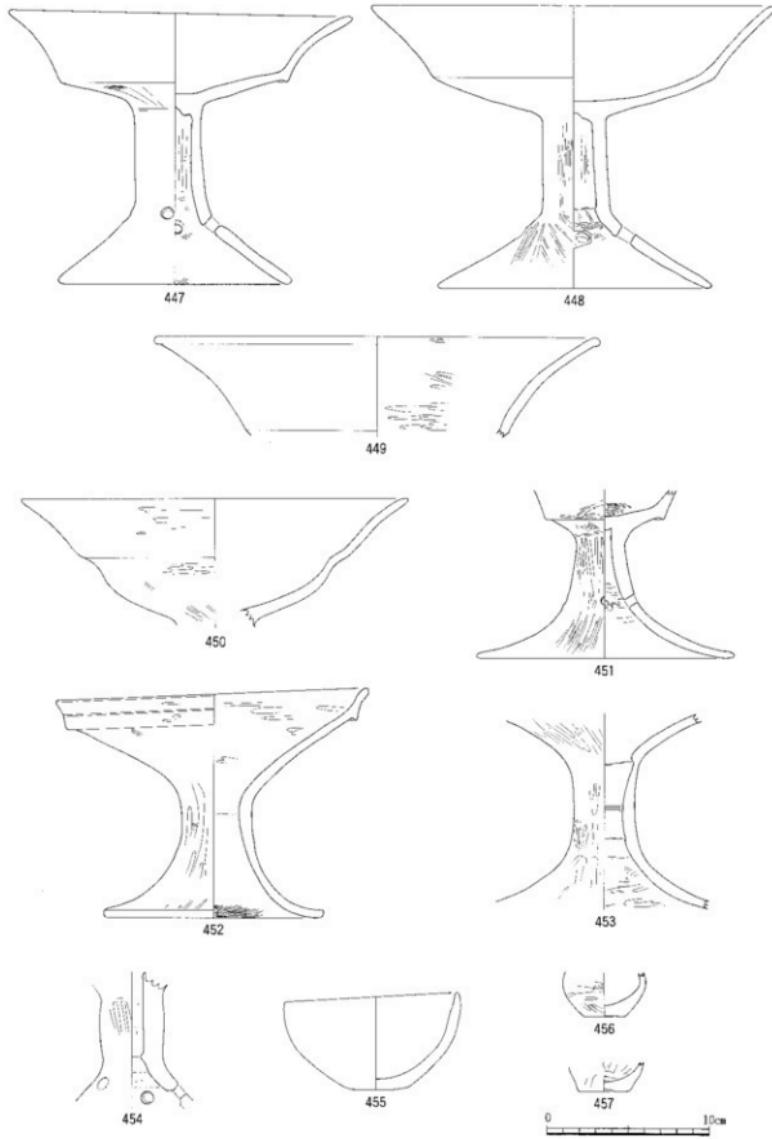
第65図 S K49 (417~419)、S K50 (420、421)、S K52 (422)、S K54 (423~427) 出土土器



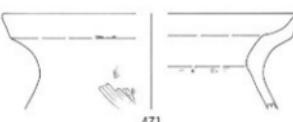
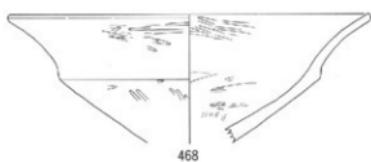
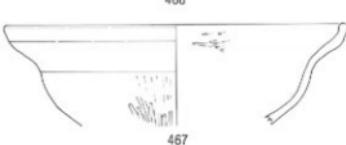
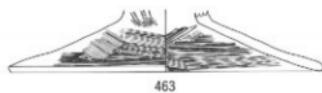
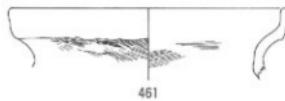
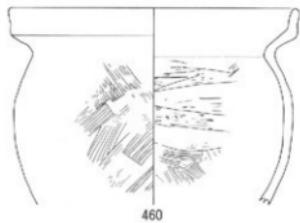
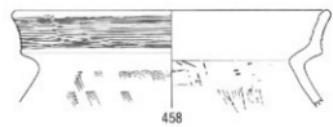
第66図 S K54出土土器



第67图 S K54出土土器

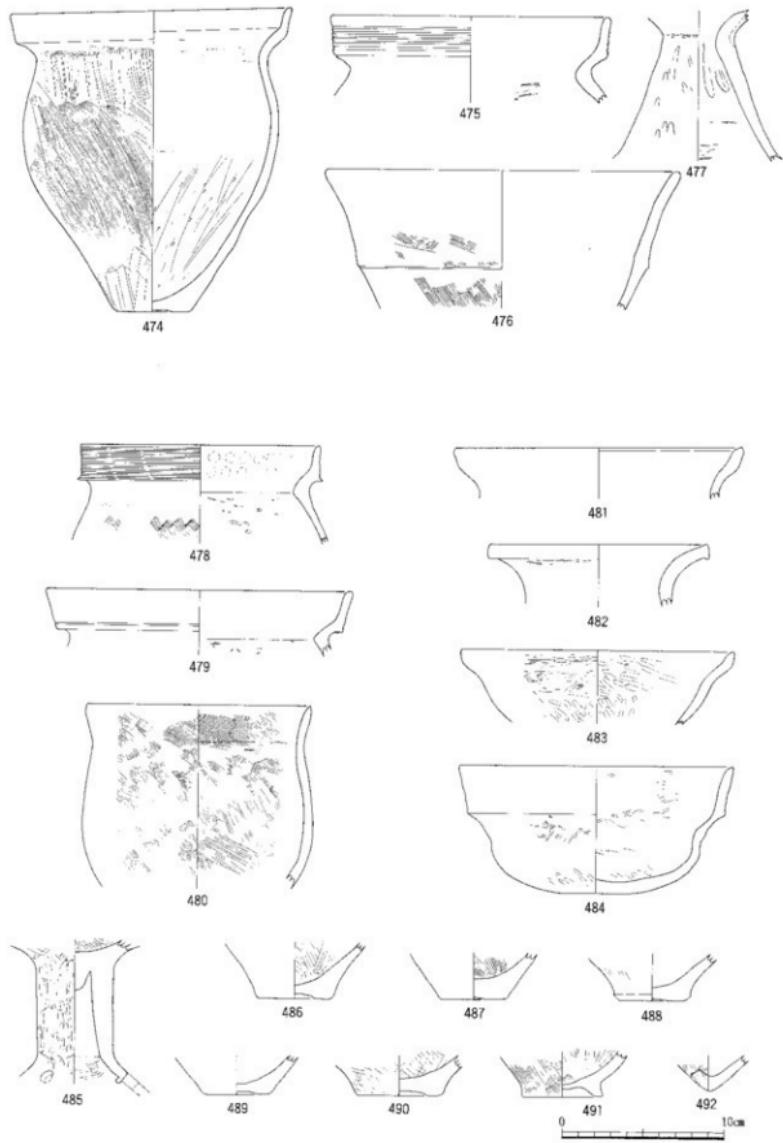


第68図 S K54出土土器

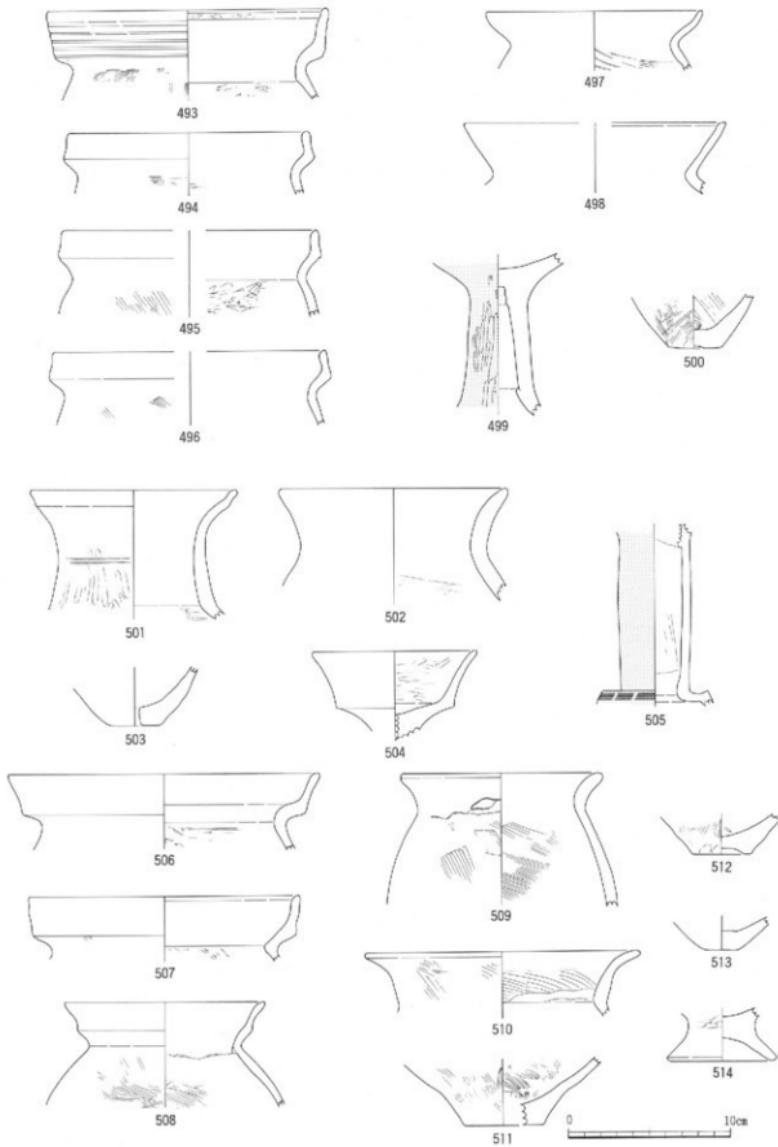


0 10cm

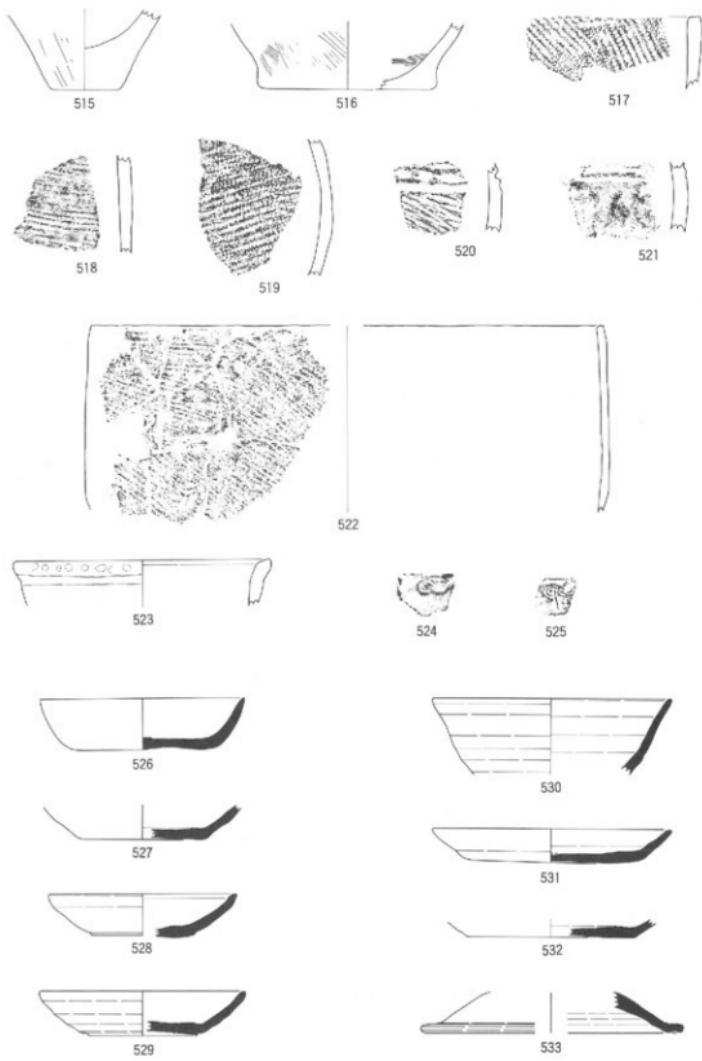
第69図 SK56(458,459)、SK58(460~467)、SK59(468,469)、P60(470)、SX61(471)、
SX62(472)、SX63(473)出土土器



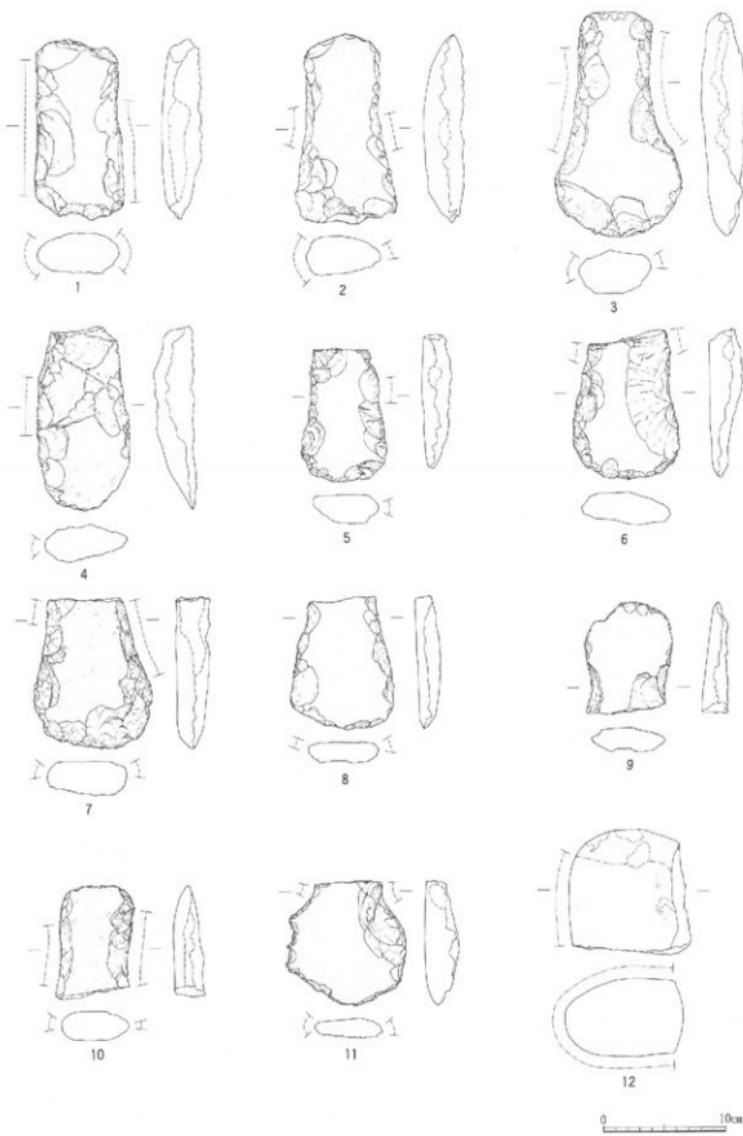
第70図 SK 64 (474)、SD 65 (475~477)、A区包含層 (478~492) 出土土器



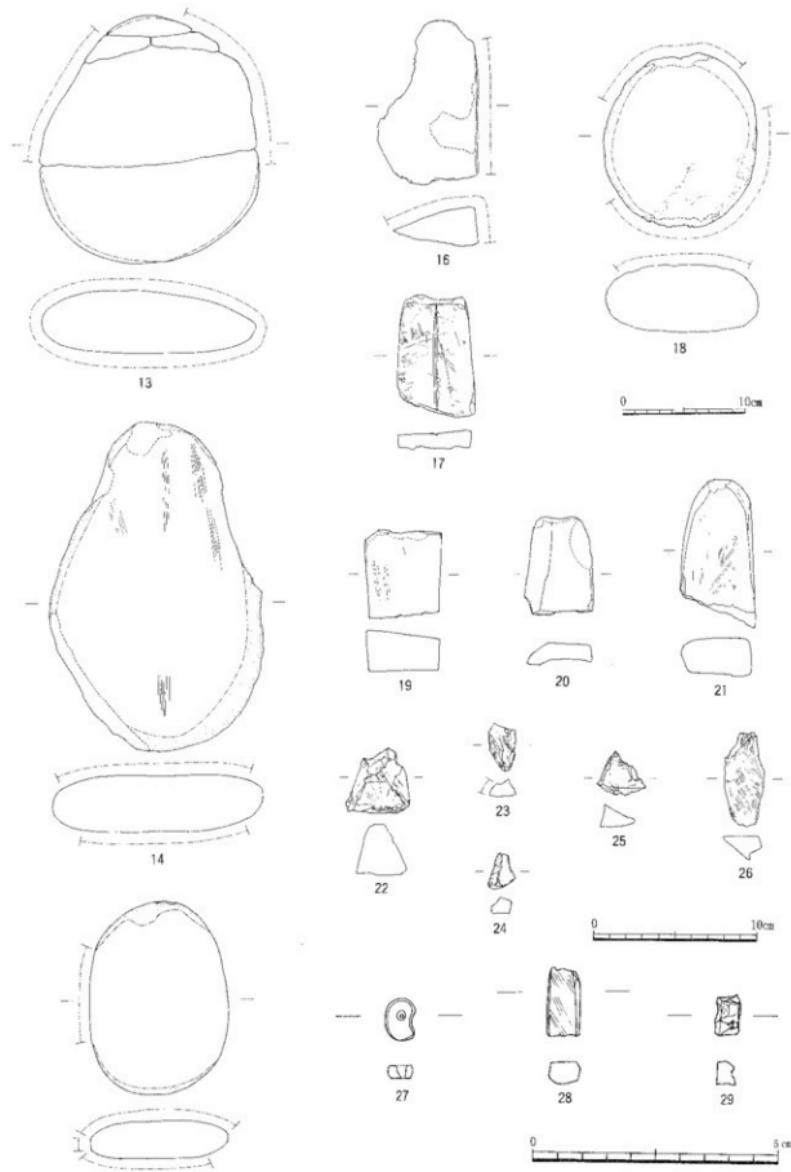
第71図 B区包含層(493~500)、C区包含層(501~505)、排土(506~514)出土土器



第72図 弥生時代中期以前（515～523）、スタンプ文（524、525）、奈良・平安時代（526～533）出土土器



第73図 各調査区出土石器 1~12 (1/4)



第74図 各調査区出土石器 13~18 (1/4) 19~26 (1/3) 27~29 (1/1)

上	品種	色	園	成	期
玉蜀黍	金	黃	黃	M-1	8
207 雜	C : 1.5 - 0	黃	黃	中 M-2	8
208 雜	C : 1.5 - 0	黃	黃	中 M-2	8
209 雜	C : 1.5 - 0	黃	黃	中 M-2	8
210 雜	C : 1.5 - 0	黃	黃	中 M-2	8
211 雜	C : 1.5 - 0	黃	黃	中 M-2	8
212 雜	C : 1.5 - 0	黃	黃	中 M-2	8
213 雜	C : 1.5 - 0	黃	黃	中 M-2	8
214 雜	C : 1.5 - 0	黃	黃	中 M-2	8
215 真形	B : 6.0	黃	黃	中 M-2	8
216 味	B : 5.7	黃	黃	中 M-2	8
217 成形	B : 6.4	黃	黃	中 M-2	8
218 味	B : 5.7	黃	黃	中 M-2	8
219 成	B : 2.8	黃	黃	中 M-1	8
220 真形	B : 3.9	黃	黃	中 M-1	8
221 酒	C : 2.4 - 3	黃	黃	中 M-2	8
222 小型土國	C : 1.0 - 0	黃	黃	中 S-2	8
223 成	B : 5.9	黃	黃	中 M-1	8
224 旗	B : 2.9	黃	黃	中 M-2	8
225 真形	B : 4.5	黃	黃	中 M-2	8
226 味	B : 4.8	黃	黃	中 M-1	8
227 酒	C : 1.2 - 0	黃	黃	中 M-2	8
228 酒	C : 1.9 - 0	黃	黃	中 M-2	8
229 酒	C : 1.5 - 0	黃	黃	中 M-1	8
230 酒	C : 1.5 - 0	黃	黃	中 M-2	8
231 酒	C : 1.5 - 0	黃	黃	中 M-2	8
232 酒	C : 1.0 - 0	黃	黃	中 M-2	8
233 成	B : 5.1	黃	黃	中 M-1	8
234 小斯三國	C : 1.9 - 0	黃	黃	中 M-2	8
235 成盛花	B : 4.4 - 0	黃	黃	中 M-1	8
236 成	B : 3.9	黃	黃	中 M-2	8
237 成	B : 3.9	黃	黃	中 M-2	8
238 成	C : 1.3 - 0	黃	黃	中 M-1	8
239 成	B : 3.9	黃	黃	中 M-2	8
240 成	B : 3.9	黃	黃	中 M-2	8
241 成	B : 3.9	黃	黃	中 M-1	8
242 成	B : 3.9	黃	黃	中 M-2	8
243 成	B : 3.9	黃	黃	中 M-2	8
244 古	C : 1.8 - 3	黃	黃	中 S-2	8
245 春古	C : 1.8 - 3	黃	黃	中 M-2	8
246 春	N : 2.1 - 0	黃	黃	中 M-2	8
247 醉	B : 1.5 - 0	黃	黃	中 M-1	8
248 醉	B : 1.5 - 0	黃	黃	中 M-1	8
249 醉	B : 1.5 - 0	黃	黃	中 M-1	8
250 小型土國	B : 2.9	黃	黃	中 S-2	8
251 小斯三國	C : 1.9 - 0	黃	黃	中 M-2	8
252 醉	B : 1.9 - 0	黃	黃	中 M-1	8
253 醉	B : 1.9 - 0	黃	黃	中 M-1	8
254 小型土國	B : 3.5	黃	黃	中 S-2	8
255 真	C : 1.7 - 4	黃	黃	中 M-1	8
256 真	N : 1.9 - 0	黃	黃	中 M-1	8
257 醉	B : 1.7 - 4	黃	黃	中 M-1	8
258 醉	C : 1.7 - 0	黃	黃	中 S-2	8
	W : 1.4 - 2	黃	黃	中 M-1	8
	W : 1.4 - 2	黃	黃	中 S-2	8
	W : 1.4 - 2	黃	黃	中 M-1	8

器 物 名 称	形 式	质 地	纹 样	施 工 方 法	施 工 程 序		施 工 方 法	施 工 程 序	施 工 方 法	施 工 程 序	施 工 方 法	施 工 程 序	施 工 方 法	施 工 程 序
					上 部	中 部								
407 瓶 口	C 2.9-4.4 C 3.2-4.6 C 3.9-4.6	白 内 外	高领 领口有斜坡 领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型 模压成型	是	M-1 M-2 M-3	C 1.6-5 C 1.4-4 C 1.2-3 C 1.0-2 C 0.8-1	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
408 小口 (领)	N 9.9-10.6 N 9.4-10.6	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-1	C 4.4-5 C 4.5-6 C 4.6-7 C 4.7-8	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
409 盖 环	C 1.7-2.4 C 1.9-2.4	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-1 M-2 M-3	C 4.7-9 C 4.8-10 C 4.9-11 C 5.0-12	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
411 镊	N 1.1-1.7 N 1.2-1.6	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	L-1 M-2 M-3	C 4.8-12 C 4.9-13 C 5.0-14 C 5.1-15	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	良	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
412 勺	N 1.9-2.8 B 1.3-2.4	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-1 M-2 M-3	C 4.9-16 C 5.0-17 C 5.1-18 C 5.2-19	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
413 油 加	B 1.3-2.4 B 1.3-2.4	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-1 M-2 M-3	C 5.0-20 C 5.1-21 C 5.2-22 C 5.3-23	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
414 筷	C 1.3-2.8 C 1.9-2.8	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-1 M-2 M-3	C 5.1-24 C 5.2-25 C 5.3-26 C 5.4-27	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
415 盆 形	N 1.9-6.6 N 1.9-6.6	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-1 L-1	C 5.2-28 C 5.3-29 C 5.4-30 C 5.5-31	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	良	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
416 盆	C 1.4-4 N 9.0	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2 L-1	C 5.3-32 C 5.4-33 C 5.5-34 C 5.6-35	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
417 盆	C 1.2-9 N 8.2	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-1	C 5.4-36 C 5.5-37 C 5.6-38 C 5.7-39	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	良	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
418 盆	C 1.8-9.7 N 2.4-13	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	L-1	C 5.5-40 C 5.6-41 C 5.7-42 C 5.8-43	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
419 盆 H	C 2.2-2.6	内	领口有斜坡	模压成型	是	M-1	C 5.6-44 C 5.7-45 C 5.8-46 C 5.9-47	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	良	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
420 筷	N 1.5-5 N 1.5-5	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-1	C 5.7-48 C 5.8-49 C 5.9-50 C 6.0-51	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
421 筷	N 1.5-5 N 1.5-5	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2	C 5.8-52 C 5.9-53 C 6.0-54 C 6.1-55	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	良	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
422 筷	N 1.5-5 N 1.5-5	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2	C 5.9-56 C 6.0-57 C 6.1-58 C 6.2-59	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
423 筷	C 1.6-6 C 1.6-6	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2	C 6.0-62 C 6.1-63 C 6.2-64 C 6.3-65	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	良	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
424 筷	C 1.6-6 C 1.6-6	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2 M-1	C 6.1-66 C 6.2-67 C 6.3-68 C 6.4-69	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
425 筷	C 1.6-6 C 1.6-6	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2 M-1	C 6.2-71 C 6.3-72 C 6.4-73 C 6.5-74	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	良	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
426 筷	C 1.4-4 C 1.4-4	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	S-2	C 6.3-75 C 6.4-76 C 6.5-77 C 6.6-78	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
427 筷	N 1.4-4 N 1.4-4	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	S-2	C 6.4-81 C 6.5-82 C 6.6-83 C 6.7-84	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	良	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
428 筷	N 1.4-4 N 1.4-4	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	S-2 M-2	C 6.5-85 C 6.6-86 C 6.7-87 C 6.8-88	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
429 筷	N 1.5-5 N 1.5-5	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	S-1 M-2	C 6.6-92 C 6.7-93 C 6.8-94 C 6.9-95	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	良	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
430 筷	N 1.5-5 N 1.5-5	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2 M-1	C 6.7-96 C 6.8-97 C 6.9-98 C 6.10-99	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
431 筷	N 1.5-5 N 1.5-5	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2 M-1	C 6.8-103 C 6.9-104 C 6.10-105 C 6.11-106	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	良	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
432 筷	N 1.5-5 N 1.5-5	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2 M-1	C 6.9-107 C 6.10-108 C 6.11-109 C 6.12-110	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
433 筷	N 1.5-5 N 1.5-5	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2 M-1	C 6.10-114 C 6.11-115 C 6.12-116 C 6.13-117	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	良	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
434 筷	N 1.5-5 N 1.5-5	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2 M-1	C 6.11-121 C 6.12-122 C 6.13-123 C 6.14-124	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
435 筷	N 1.5-5 N 1.5-5	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2 M-1	C 6.12-128 C 6.13-129 C 6.14-130 C 6.15-131	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
436 筷	C 1.6-7 C 1.6-7	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	S-1 M-2	C 6.13-138 C 6.14-139 C 6.15-140 C 6.16-141	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
437 筷	N 1.5-5 N 1.5-5	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	S-1	C 6.14-144 C 6.15-145 C 6.16-146 C 6.17-147	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
438 筷	N 1.5-5 N 1.5-5	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2	C 6.15-151 C 6.16-152 C 6.17-153 C 6.18-154	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
439 筷	N 1.5-5 N 1.5-5	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2	C 6.16-161 C 6.17-162 C 6.18-163 C 6.19-164	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	良	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
440 筷	N 1.5-5 N 1.5-5	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2	C 6.17-171 C 6.18-172 C 6.19-173 C 6.20-174	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
441 筷	C 1.5-4 C 1.5-4	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2	C 6.18-181 C 6.19-182 C 6.20-183 C 6.21-184	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	良	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
442 筷	N 1.5-5 N 1.5-5	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2	C 6.19-191 C 6.20-192 C 6.21-193 C 6.22-194	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	良	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3
443 筷	B 3.8	内 外	领口有斜坡 领口有斜坡	模压成型 模压成型	是	M-2	C 6.20-201 C 6.21-202 C 6.22-203 C 6.23-204	外 内 外	模压成型 模压成型 模压成型	不良	S-1 S-2 S-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3	M-1 M-2 M-3

器 種 形 式	法 規 色	高 度 底 成 分 土 質	
1944 高 度	C 14. 9 N 1. 3-2. 0 C 1. 5-7	赤系褐色 深褐色 深褐色	底 底 底
495 度	N 1. 4-2. 0 C 1. 6-8	赤系褐色 深褐色	底 底
496 度	N 1. 3-2. 0 C 1. 6-8	赤系褐色 深褐色	底 底
497 度	C 1. 3-2. 0 C 1. 0-2	赤系褐色 深褐色	底 底
498 度	N 1. 2-6 C 3. 5	赤系褐色 深褐色	底 底
499 高 度	N 1. 2-6 C 3. 5	赤系褐色 深褐色	底 底
500 武 部	B 3. 3	赤系褐色 深褐色	底 底
501 面	C 2. 7-8. 0 C 1. 4-2. 0	赤系褐色 深褐色	底 底
502 曲	C 2. 7-8. 0 C 1. 4-2. 0	赤系褐色 深褐色	底 底
503 高 度	N 1. 2-2. 0 C 1. 0-2. 0	赤系褐色 深褐色	底 底
504 高 度	N 1. 2-2. 0 C 1. 0-2. 0	赤系褐色 深褐色	底 底
505 高 度	H 4. 5	赤系褐色 深褐色	底 底
506 度	C 1. 9-1 N 1. 5-0	赤系褐色 深褐色	底 底
507 度	N 1. 6-1 C 1. 0-2	赤系褐色 深褐色	底 底
508 度	N 1. 6-1 C 1. 0-2	赤系褐色 深褐色	底 底
509 度	N 1. 0-4 W 1. 4-3	赤系褐色 深褐色	底 底

器 種 形 式	法 規 色	高 度 底 成 分 土 質	
510 高 度	N 1. 7-0 N 1. 2-8	赤系褐色 深褐色	底 底
511 高 度	B 5. 0	赤系褐色 深褐色	底 底
512 高 度	H 3. 6	赤系褐色 深褐色	底 底
513 高 度	S 2. 0	赤系褐色 深褐色	底 底
514 高 度	B 6. 8	赤系褐色 深褐色	底 底
515 高 度	S 1. 2	赤系褐色 深褐色	底 底
516 高 度	B 1. 2	赤系褐色 深褐色	底 底
517 高 度	B 0. 0	赤系褐色 深褐色	底 底
518 高 度	B 2. 2	赤系褐色 深褐色	底 底
519 高 度	B 1. 0	赤系褐色 深褐色	底 底
520 高 度	B 0. 0	赤系褐色 深褐色	底 底
521 高 度	C 3. 1-3. 8 C 2. 5-6	赤系褐色 深褐色	底 底
522 高 度	B 2. 5	赤系褐色 深褐色	底 底
523 高 度	B 0. 6	赤系褐色 深褐色	底 底
524 高 度	C 1. 1-1. 6 H 1. 2-4. 0	赤系褐色 深褐色	底 底
525 高 度	C 1. 3-2. 0 H 1. 2-6. 0	赤系褐色 深褐色	底 底
526 高 度	B 1. 2	赤系褐色 深褐色	底 底
527 高 度	B 0. 6	赤系褐色 深褐色	底 底
528 高 度	P 6. 6	赤系褐色 深褐色	底 底
529 高 度	P 6. 6	赤系褐色 深褐色	底 底
530 高 度	C 1. 5-2	赤系褐色 深褐色	底 底
531 高 度	H 2. 0-5	赤系褐色 深褐色	底 底
532 高 度	B 1. 0-8	赤系褐色 深褐色	底 底
533 高 度	C 1. 0-0. 44	赤系褐色 深褐色	底 底

第6章 まとめ

本章ではこれまで説明した個別の遺構・遺物を大略にまとめ、高橋セボネ遺跡の全体像を時代順に概略したい。

第1節 繩文時代

前期

遺構は柴山出村期の土器が見つかったS K 46だけである。第4章でも触れたように中から灰化物が出ており火

を使用したと推定されるが性格はわからない。周辺では押野タチナカ遺跡や御経塚遺跡などから同時期の土器が出土しているがいずれも検出面からの確認である。今後の調査成果を待ちたい。

後期

遺物について

高橋セボネ遺跡の主要な出土遺物は弥生時代後期後半に位置づけられる土器である。これらは堅穴住居跡や周辺の土坑、溝などの遺構から出土しており、本遺跡が弥生時代後期の集落跡であったことは疑う余地もない。集落の存続時期は法仏式から月影I式へ移るまでの間で大きく3段階に分かれる。この3段階をまとめるときのとおりになる【第1段階→法仏式（古段階）、第2段階→法仏式（新段階）、第3段階→月影式】。ここで16棟発見した堅穴住居跡をそれぞれの時期に大別する。

時 期	谷内尾 (1983)	楠 (1992)	堅 穴 番 号
高橋 I 期	法仏式《古》	8 期	2堅 10堅 11堅 16堅
高橋 II 期	法仏式《新》	9 期	1堅 5堅 8堅 13堅
高橋 III 期	月影 I 式	10 期	3堅 6堅 7堅 12堅 15堅

4号、14号堅穴は遺物量が乏しく時期決定しうる資料が少ないと上記には入れなかった。ただし、高环形土器54、262は古い様相を示し、また他の堅穴との切り合ひ関係から高橋I～II期の間に当てはまると思定する。9号堅穴は土器の実測点数は皆無のため不明と言わざるを得ない。なお、大量の土器が出土したSK18は高橋II期、SK54は高橋III期にあたる。

遺構について

今回検出した堅穴住居跡の内、4棟が焼失住居であった（2堅、10堅、12堅、15堅）。全ての堅穴は炭化材、燒土がほぼ全体に散在し、出土した土器は完形品が多く含んでいた。火災が発生した後、片付けなど行わざそのまま放置したと考えられる。発見された完形土器は壁際から多く出土した。これは金沢市西念・南新保遺跡、金沢市二口町遺跡など他の遺跡の焼失住居でよく見られる。この焼失住居の出土土器を観察してみると、2号堅穴は壺形土器、10号堅穴は壺形土器の完形品を多く見る。12号堅穴は完形品は少なく壺形土器の破片が多い。15号堅穴は壺形土器、壺形土器は多く見るが、高环形土器はほとんど出土しない。このように焼失住居の出土土器は器種別に分かれる傾向がある。これは各堅穴住居が様々な性格をもち各自用途別に機能していたためと考えられる。

また、1、3、10、12号堅穴からは緑色顕灰岩の原石やチップ、砾石などが多数出土した。これらの堅穴は玉造製作場に大きく関連すると認識する。

本調査区全体を概観すると堅穴住居跡、掘立柱建物跡は調査区中央を中心に周囲を囲むようにして建てられていることが分かる。付近には貯蔵穴と考えられる土坑や排水及び区画用に掘られた溝が存在する。これに対して、住居に囲まれた中はSK7～24の土坑群が存在するだけである。土坑群のほとんどは方形プランで遺物は絡まない。しかし中にはSK15やSK18のように供獻用の土器が大量に出土するものがある。また、SA2はこの土坑群を意図的に画す様相をしている。以上からこの土坑群は墓域、もしくは祭祀場などに使用され、調査区中央の空間地は聖地及び人々の集う場であったと推定する。この集落構造は調査区中央に鞍部が走り、住居施設を設定するには不適当な場所という条件もあったと思う。この地は周囲を沼地で覆われるなど利用土地が制限されている。その制約された中で弥生時代の人々はムラを形成し最大限に活用していたのであろう。

第3節 古墳時代

2号、6号、10号堅穴及び包含層から古墳時代前期の土器が5～6点近く出土している。しかし、この時代における遺構は確認できず、土器の数量も僅少である。各堅穴等から発見された土器は周辺から流れ込んできたものと思われる。

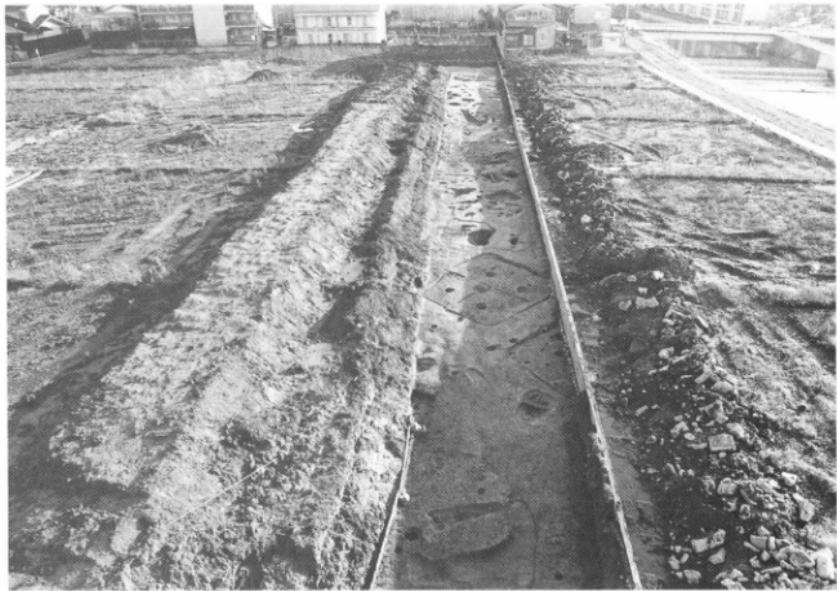
第4節 奈良・平安時代

この時代の主要遺構は8号掘立柱建物である。柱穴の形態などから古代の建物であることは間違いない、周辺出土面からは須恵器を確認している。8世紀後半の須恵器が一部混じるが、ほとんどは9世紀後半のものである。須恵器の産地は河北郡高松町や金沢市末及び小松地方と各地から搬入されている。2号、7号掘立柱建物も弥生時代には考えにくい構造をしており古代と推察したいが遺物が皆無なため今のところ古代以降とする。しかし、古代の集落構成を考える上で8号掘立柱しか存在しないということはいささか疑問である。2号、7号掘立柱の扱いを今一度考えなければいけないだろう。また、本遺跡周辺に同時期、同様なプランをもった建物が存在すると想定すると、本遺跡から南へ300m離れたところに立地する扇が丘ゴシヨ遺跡（弥生・古代・中世）が深く関わりそうである。

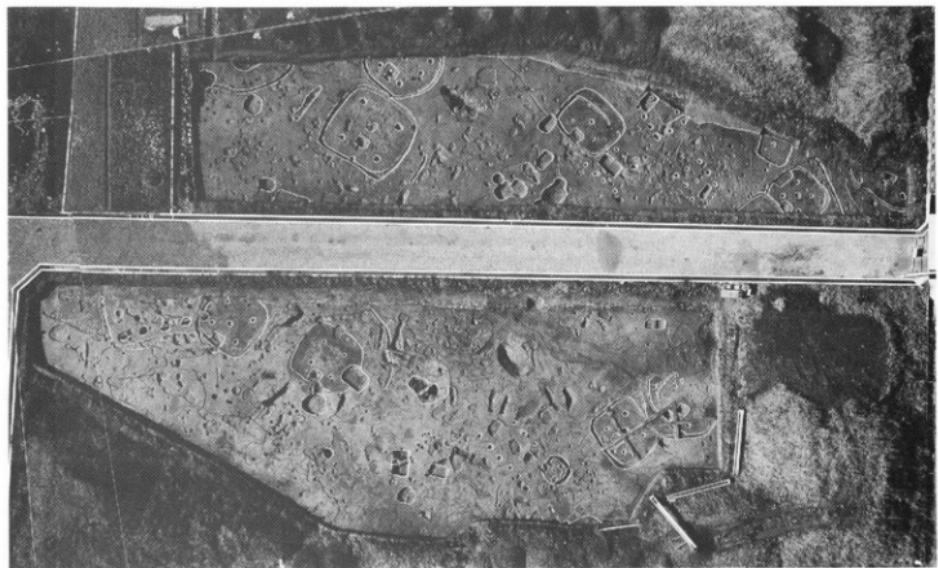
本報告書を作成するにあたって北陸学院短期大学助教授小林正史先生におかれでは上器の焼成技術の御教示、本遺跡の甕形土器の容量分布のデータを提供していただいた。しかし、これらの貴重な成果等を全く生かすことができなかった。この場をかりてお詫び申し上げる次第である。

参考文献

- | | | |
|---------------------|--|------------|
| 石川県教育委員会 | 『石川県遺跡地図』 | 1992年 |
| 石川考古学研究会 | 『シンポジウム「月影式」土器について』報告編 | 1986年 |
| 石川考古学研究会、北陸古代土器研究会 | 『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』報告編 | 1988年 |
| 木田 清 松任市教育委員会 | 『松任市八押子蟹遺跡』 | 1988年 |
| 木田 清 松任市教育委員会 | 『中村ゴウデン遺跡』 | 1989年 |
| 橋 正勝 金沢市教育委員会 | 『金沢市西念・南新保遺跡Ⅰ』 | 1989年 |
| 橋 正勝 金沢市教育委員会 | 『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』 | 1992年 |
| 出越茂和 金沢市教育委員会 | 『金沢市額谷ドウシンド遺跡』 | 1984年 |
| 橋木英道 | 『器台形土器の形態の変遷について』『北陸の考古学』(石川考古学研究会誌第26号) | 1983年 |
| 橋木英道 | 石川県立埋蔵文化財センター『吉竹遺跡』 | 1987年 |
| 前田清彦 松任市教育委員会 | 『竹松C遺跡』 | 1988年 |
| 前田清彦 松任市教育委員会 | 『旭遺跡群』 | 1995年 |
| 増山 仁 金沢市教育委員会 | 『接田・小野中遺跡』 | 1991年 |
| 南 久和他 金沢市教育委員会 | 『金沢市押野西遺跡』 | 1987年 |
| 宮本哲郎他 金沢市教育委員会 | 『金沢市無量寺B遺跡』 | 1982年 |
| 宮本哲郎他 金沢市教育委員会 | 『金沢市西念・南新保遺跡』 | 1983年 |
| 宮本哲郎他 金沢市教育委員会 | 『金沢市二口町遺跡』 | 1983年 |
| 安 英樹他 石川県立埋蔵文化財センター | 『竹松遺跡群』 | 1992年 |
| 谷内尾晋司 | 『北加賀における古墳出現期の土器について』『北陸の考古学』(石川考古学研究会誌第26号) | 1983年 |
| 吉岡康暢他 | 石川県教育委員会『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 塚崎遺跡』 | 1976年 |
| 吉岡康暢 | 『日本海域の土器・陶磁(古代編)』 | 六興出版 1991年 |



平成 2 年度調査区全景（B 区）



平成 3 年度調査区全景（A、C 区）



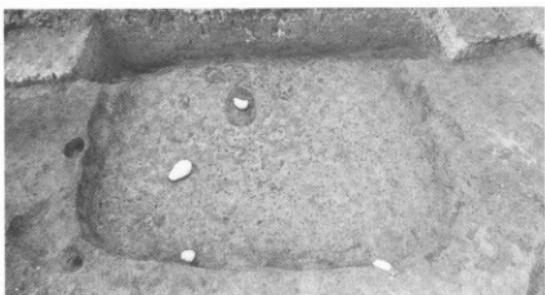
A区 1号竖穴完掘



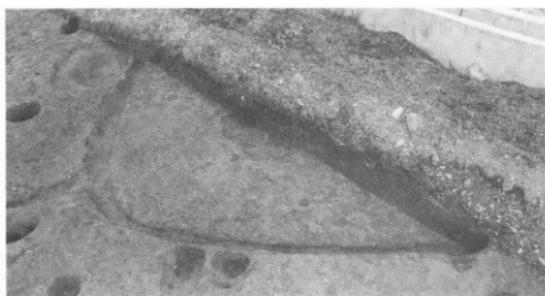
A区 2号竖穴遗物·炭化材出状况



A区 2号竖穴完掘



A区 3号竖穴完掘



A区 4号竖穴完掘



B区 5号竖穴完掘



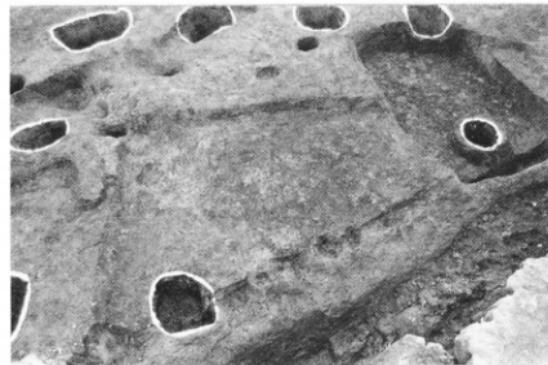
C区 6号竖穴完掘



C区 7号竖穴挖掘



C区 8号竖穴挖掘



A区 9号竖穴挖掘



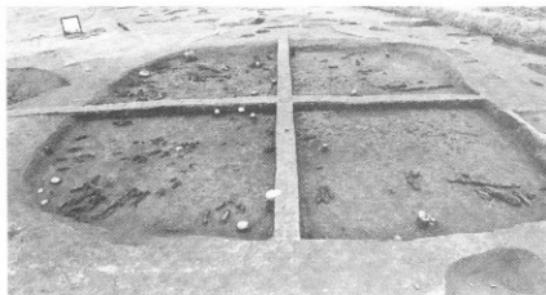
A区 10号竖穴遗物，炭化材出土状况



A区 10号竖穴完掘



A区 11号竖穴完掘



A区 12号竖穴遗物·炭化材出土状况



A区 12号竖穴完掘



C区 13号竖穴完掘



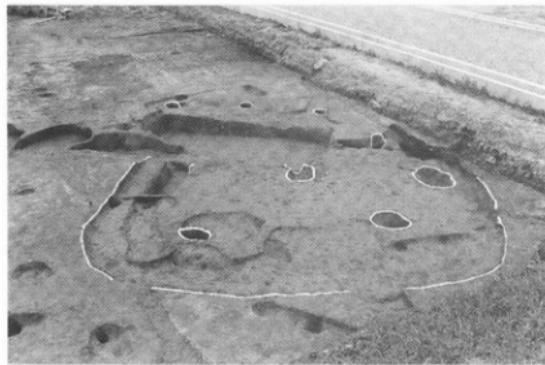
A区 14号竖穴完掘



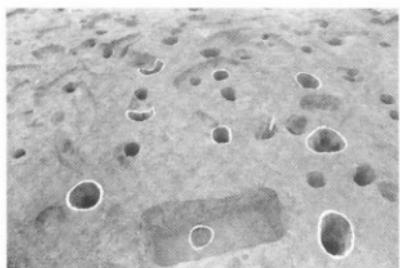
C区 15号竪穴遺物・炭化材出土状況



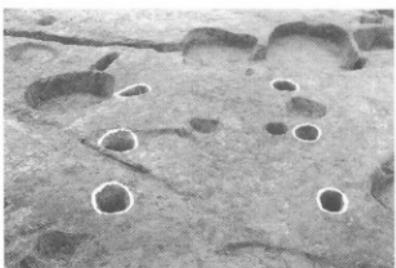
C区 15号竪穴発掘



A区 16号竪穴発掘



A区 1号掘立柱建物



A区 5号掘立柱建物



A区 2号掘立柱建物



A区 6号掘立柱建物



A区 3号掘立柱建物



B区 7号掘立柱建物



C区 4号掘立柱建物



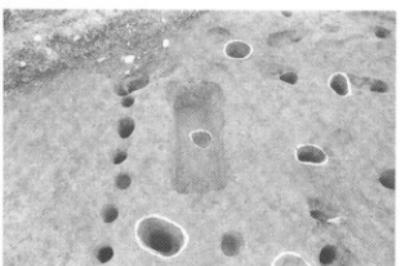
B区 8号掘立柱建物



B区 SK1土器出土状况



B区 SA2、SK6、7、18~24完掘



A区 SA1、SK2完掘



A区 SK32、33、SD36全景



A区 SK15、16、17完掘



A区 SK37完掘



B区 SK18土器出土状况



A区 SK38土器出土状况



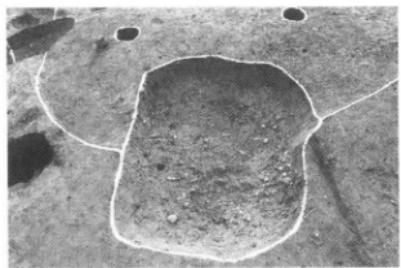
A区 SK38完掘



C区 SK54土器出土状况



C区 SD45完掘



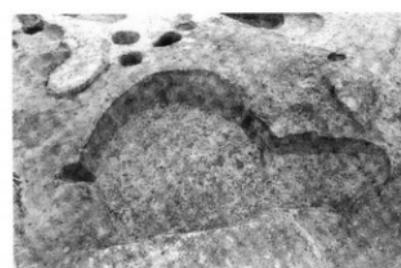
C区 SK54完掘



C区 SK47完掘



C区 SK64土器出土状况



C区 SK53完掘



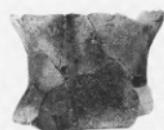
C区 鞍部全景



1



11



27



2



12



28



14



31



3



25



8



9



26



35



36



133



135



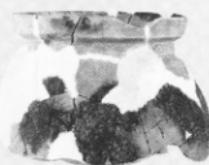
138



147



234



139



163



244



140



180



252



183



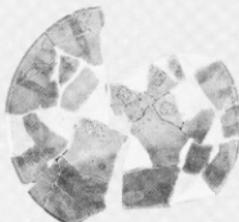
255



142



197



260



261



300



341

340



264



312



313



342



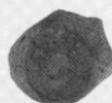
265



330



343



278



334



345



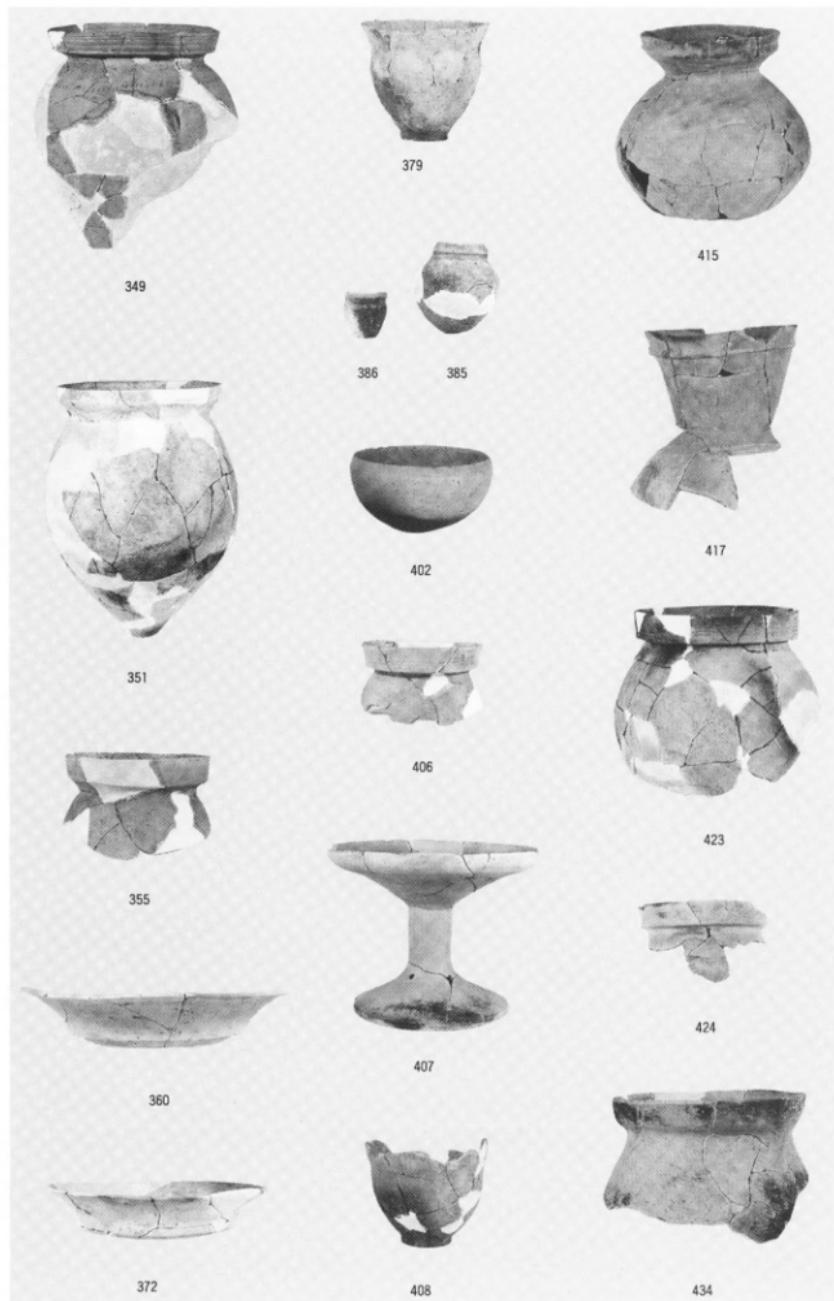
292



336



347





436



452



455



441



474



526



529



531



447



1

2

3

7



448



17

19

20

21



451



27

28

29

報告書抄録

ふりがな	たかはしせぼねいせき
書名	高橋セボネ遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
編著者名	田村昌宏 吉田淳
編集機関	野々市町教育委員会
所在地	郵921 都道府県 石川県石川郡野々市町本町5丁目4-1 電 0762-46-2344
発行年月日	西暦 1996年 3月 29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯 東 経		調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
			市町村	遺跡番号				
たかはし 高橋セボネ遺跡	いさぎや 石川県石川郡 の いさぎやまちのなかまち 野々市町高橋町	17344	16041	36度 31分 47秒	136度 37分 48秒	1990.10.24 1990.12.17 1991.06.10 1991.12.06	600m ² 3500m ²	土地区画整理 事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高橋セボネ	集落跡	弥生	堅穴住居 掘立柱建物	弥生土器 勾玉 管玉未製品 砥石	縄文時代から奈良・平安時代までの複合遺跡 縄文、古墳の遺構は木柵認。
	集落跡	奈良・平安	掘立柱建物	1棟 須恵器	掘立柱建物 8棟確認。うち2棟は時期不明。
	縄文 古墳			縄文土器 土師器	

高橋セボネ遺跡

発 行 1996年3月
編集発行 野々市町教育委員会
〒921 石川県石川郡野々市町本町5丁目4-1
☎ 0762-46-2344
印 刷 北國書籍印刷株式会社

